
聖女カシェリーナ完結編 サードモンスタープラン

神村律子

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

聖女カシエリーナ完結編 サードモンスタープラン

【Nコード】

N9335E

【作者名】

神村律子

【あらすじ】

デイズム・ゲス戦争から5年。地球も月も戦争の傷跡が癒えて、新たな歴史が始まるうとしていた時。再び狂気が二つの国家に襲いかかるうとしていた。カシエリーナとレージン、そしてロイ、エリザベス、ロベルト、シエリーが、狂気に立ち向かう。15歳未満閲覧禁止です。ご了承ください。

プロローグ 新任講師

時の流れるのは早い。地球と月を震撼させたあのベン・ドム・デイズムの悪夢から、五年の歳月が流れていた。

ここニューペキンも戦後の復興がすっかり終わり、その一部を構成している大学群も、完全にもとの状態に戻りつつあった。五年の間に生まれた子供達に、何年か前に戦争があつて、たくさんの人が死んだのだと話しても、信じてもらえないほどに……。

ニューペキンの最高学府の一つ、ガイア大学は創立五十周年を迎える名門である。先の戦争ではほとんど被害はなかったが、軍が接收して少しの間使用していたので、学生の成績や大学の様々な情報を納めたホストコンピュータのデータが消失し、バックアップデータも紛失してしまい、一年ほどのブランクができてしまった。そのせいで、損をした学生と得をした学生がいたらしい。

そのガイア大学の法学部棟の小ホールは、立ち見が出るほどの賑わいになっていた。勉強熱心な学生が多いわけではない。いつの時代も大学生とは暢気な生き物なのだ。ではどうして立ち見が出るほど賑わっているのか？

理由は単純にして明瞭である。新しい年度を迎えた法学部に、新しい講師が着任したためだ。その講師の名は、カシエリーナ・ダムン。地球と月を救った聖女とまで呼ばれた、ガイア大学の卒業生である。

「凄いわね……。何、こんなに……」

カシエリーナは、五年前に比べると落ち着いた雰囲気になっていたが、相変わらず胸元の大きく開いた白のブラウスに、膝上二十センチメートルはあるうかという、タイトな黒のミニスカート姿が似合っていた。髪はストレートをやめて少しウェーブをかけていたが、

自慢の黒髪は脱色やカラーリングはされておらず、つやつやしていた。

彼女は意を決してホールに足を踏み入れた。その存在に気づいた男子学生達の間から、

「おおっ！」

という歓声上がり、女子学生からは強烈な嫉妬の視線が浴びせられた。カシエリーナはそんな学生の反応にニッコリ微笑んで応じながら、教壇に立った。

「初めまして。今年度から、法学部法律学科の憲法の講師を勤めることになりました、カシエリーナ・ダムンです。よろしく願います」

カシエリーナがそう言い終わると、ホール内にまるで嵐のような拍手がわき起こった。カシエリーナはギョツとして一歩退いたが、すぐに気を取り直し、拍手が鳴り止み始めたのを見計らってから、「とにかく、私の初めての講義にこれだけの人が出席してくれたのは、大変光栄です。ありがとうございます」

と学生達を見渡した。中には手を振っている男子学生もいる。カシエリーナは笑顔でもう一度学生を見渡して、

「それでは、早速講義を始めます」

と話し出した。

それと同じ頃、ニューペキンから離れたある場所で、ある男が真つ暗闇の中、ニヤリとした。

「まだ終わってはいない」

男はそう呟き、もう一度ニヤリとした。

第一章 出会い

五年前の戦争で、共和国軍は事実上崩壊したも同然であった。反デイズムを掲げて戦った軍の者達が、全てを破壊し、組織作りから始めて、共和国軍を再生したのは、一年前であった。

その中心にいたのが、カシェリーナが心の底から愛していると公言してはばからない、レージン・ストラスキーである。

彼は反デイズム軍のリーダー達と会い、軍の立て直しを話し合った。立案に一年、実行に三年。しかしそれだけに満足のいくものができた、とレージンは自負している。

確かに以前に比べて軍の権限は縮小され、クーデターによって政府の転覆を謀れないように、憲兵隊が組織された。しかし、どれほど人間が知恵を絞っても、神ではないのだから、完全なものは作れない。これから起こる悲劇は、その盲点を突いたものだったのだ。

レージンは、憲兵隊の第一分隊の隊長を務めている。彼がいるのはニュートウキョウにある軍本部脇に新しくできた、憲兵隊本部の第一棟である。

「コペルニクスクレータも、あと何日かで首都としての機能を回復するそうです」

分隊長室には、二人の男がいた。一人はもちろんレージンである。彼は憲兵隊専用の軍服姿がかなり様になりつつあった。そしてもう一人は、第一分隊の隊員の一人である。

「式典には議長も出席されるし、護衛として、憲兵隊から選りすぐりが同行することになる」

レージンは分隊長の椅子になじめないような顔つきで、座っていた。隊員はレージンと机を挟んで向かい合って立っているのであるが、小柄なため、座っているレージンとさして頭の高さが変わらない。

「五年も経ったんだな。早いものだ」

レージンは机に両手を置いて呟いた。そして隊員を見て、

「そうだ。君は新人だそうだな。姓名は？」

と尋ねた。隊員はかしこまって敬礼し、

「はい、ロベルト・トキワであります！」

と答えた。レージンは、その声があまりにも甲高くて上ずっていたので、笑いを噛み殺して、

「あのクロノス事件の当事者の一人だそうだな？」

「は、はい」

ロベルトは少し赤面して返事をした。レージンはとうとう我慢し切れなくなつたのか、笑い出して、

「そうかしこまるなよ。士官学校に行っていた頃は、随分暴れていたそうじゃないか。あの頃の威勢の良さは、どこに行っちゃったんだ？」

と言った。ロベルトはシドロモドロになりながら、

「いえ、あの、その……」

と答えに窮していた。レージンはフツと笑って、

「君達がクロノスを奪って、ニユートウキョウに現れてくれたから、俺は助かったし、カシエリーナはデイズムに会えたんだからな。感謝しているよ」

「はア」

ロベルトは溜息のような返事をした。そして意を決したように、

「隊長とカシエリーナ・ダムン先生とは、どういうご関係ですか？」

と尋ねた。レージンはフンと鼻を鳴らせて、

「女王様と召使いの関係さ」

「ええっ？」

あまりに意外な答えに、ロベルトは仰天してしまった。レージンは大笑いして、

「冗談だよ。そんなことを言つたと知れたら、あいつに蹴飛ばされる」

「そ、そうでありますか」

ロベルトは、目を白黒させていた。そんな彼の反応を、レージンは面白そうに見ていた。

カシエリーナの講義は終わった。彼女は学生達に囲まれてしばらくいろいろ話をしていたが、やがて次の講義が始まる頃になると、大半の者は次々にホールを出て行った。カシエリーナも教職員専用のドアから外に出ようと歩き出した。

「先生！」

と声をかけた者がいた。カシエリーナは振り返って声の主を探した。そこには男子学生が一人と女子学生が一人立っていた。男子の方は、髪の毛を長く伸ばし、後ろで束ねており、Ｔシャツにジーンズ。女子の方は、ブロンドの髪と青色の瞳で、淡色系のスリーピースを着た清楚な感じの学生である。

「何かしら？」

カシエリーナは抱えていた本を持ち直して、ニツコリした。男子の方が、

「俺、この前の戦争で先生を見てから、ずっと憧れていました。今日はとっても興奮しています。こうして話しているのも、信じられないくらいです」

と熱っぽく語った。カシエリーナは微笑んだままで男子を見て、
「そう。ありがとう。あの放送を見たのね。私、あの頃と比べて、年取ったでしょ？」

「そ、そんなことないですよ。先生はあの頃のままです。いや、あの頃より美しくなられたような……」

「まア、お世辞が上手ね」

カシエリーナは右手で口を隠しながらクスツと笑った。男子はますます興奮したように、

「ハ、ハハハ……」

と引きつった笑い方をし、頭を掻いた。隣にいる女子が、少しムツとした顔で自分のことを見ているのに気づいたカシエリーナは、女

子の方を見た。

「二人は恋人同士？」

「そうです」

男子の方が何か言おうとするのを遮るように女子が言った。それはほとんど叫びに近かった。

「先生、私、ずっと以前から凄く疑問に思っていることがあるんです。お尋ねしてもいいですか？」

「え、ええ……」

カシエリーナはビクツとして頷いた。

（何かしら、この子のこの迫力？）

その女子はキツとカシエリーナを睨み据えて、

「五年前の戦争の張本人であるベン・ドム・ディズム総帥は、太平洋にあつた核融合砲基地で爆死した、というのが報道された事実ですよね」

「おい、先生はな……」

男子が止めようとする、女子はキツとして、

「うるさいわね！ 口を挟まないでよ！」

と言い返した。そして再びカシエリーナを見て、

「では、ディズム総帥が使っていた影武者のうち、生き残った四人はどうしたかご存じですか？」

「えっ？」

カシエリーナの記憶が五年前に遡った。彼女は戦争終結後、ディズムの影武者四人の行方がわからなくなったというニュースを見たが、その後どうなったのかは、現在に至るまで知らないでいた。

「影武者四人、と言いましたが、本当は、影武者と思われる四人と言うのが正しいと思います」

「何が言いたい、貴女は？」

カシエリーナは真剣な顔で尋ねた。女子学生は、

「私が言いたいのは、核融合砲基地で爆死したのは、本物のディズム総帥かどうかかわからない、ということです」

「……」

カシエリーナも一度は考えたことがあった。しかしやめていた。もうあの悪夢を思い出すのはやめよう、と身体の中から拒否する思いが溢れて来たからだ。

「そうね。その可能性はあるわね。行方不明の影武者が全員見つかって、やはりその四人は影武者だったと証明されるまではね」

カシエリーナはゆっくりと慎重に答えた。そして、

「もういいかしら？」

「あ、はい。申し訳ありませんでした」

女子学生はさっきまでの気迫をすっかり消失させて答えた。カシエリーナは一度立ち去ろうとしたが、

「そうだ、名前を教えて」

と振り返って言った。男子学生は嬉しそうな顔をして、

「俺、ロイ・アマギです。ニホンのカンサイ地区から来ました」

と言った。女子も、

「私はエリザベス・イトーです。カンサイ地区から来ました」

と答えた。カシエリーナは再びニッコリして、

「二人共、講義が終わったなら、私の部屋にいらっしやい。もう少し詳しい話をしましょう」

「はい」

カシエリーナは二人に手を振ってホールを出て行った。ロイとエリザベスは顔を見合わせた。

第二章 月の女帝

月は、コペルニクスレータの復興だけにこの五年間を費やして来た、と言っていていいだろう。「国民一丸」とは古くて危険な臭いのする言葉だが、まさに今の月がそれだった。

その月の一部である、神酒の海。月の裏世界の女帝であるパイア・ギノが住む、アイトウナがあるところである。ヒュプシピュレ・カオスがカロン・ギグネイと行方をくらまして、地球にある彼女の組織を取り仕切ってくれるようにパイアに電子メールを送って来て以来、パイアは地球にもその勢力を伸ばしていた。

「カロンをとられたのは癪だけど、まあ、その代償としては十分ね」パイアは当時そう思って、カロンに対する思いを断ち切った。

パイアは、アイトウナのプライベートルームのベッドに、一糸まとわぬ姿で微睡んでいた。三十一歳になった今でも、その美しい肢体に衰えは見られなかった。

「パイア」

隣で寝ていたパイアより大分若い全裸の男が声をかけた。パイアは思索を破られたようにハッとして男に目を向け、

「何？」

「僕といると、退屈？」

男は少し申し訳なさそうに尋ねた。パイアはフツと笑って男の胸を撫で、

「そんなことないわよ。どうしてそんな風に思うの？」

「だって、パイア、僕を全然見てくれないから」

男はすねたような口ぶりで言った。パイアは苦笑して、

「ごめんごめん。ちよっと考え事していたのよ」

「また、カロンさんのことを考えていたの？」

凶星を突かれたパイアは、ギクツとした。しかし冷静を装って、

「違うわよ。月が元通りになつて治安がよくなると、私達の商売もやりにくくなるなつて思つてたのよ」

「ホントに？」

男はパイアの目を覗き込むように見た。パイアはベッドの脇のテーブルにある煙草を取るフリをして顔を背けた。心を見透かされそうな気がしたのだ。そしてライターで火を点け、紫の煙を吐き出しながら、

「貴方ほどの顔と地位なら、私のような年増を相手にしなくても、大丈夫なんじゃないの？」

「パイアは年増なんかじゃないよ」

男は怒つたような声で言い返した。パイアはニツコリ笑つて男を見た。

「ありがとう、テス」

そう、若い男はかつて月の支配者であつたダン・ディーム・ゲスの息子、テセウス・アスであつた。彼はパイアと共に地球に行つて来て以来、すっかり彼女の虜になつてしまつていた。それでもルナ大学に最高得点で合格するという離れ業をやつてのけた秀才である。「あと一週間で、コペルニクスレータは完全に復興して、地球共和国の評議会議長を招いて、式典を行うことになつていようだけど、貴方は出席するの？」

パイアが尋ねると、テセウスは天井を見上げて、

「出席しないよ。招待はされているけどね。出ても意味がないし、退屈するだけだ」

「なるほどね」

パイアはベッドから出て、シャワールームに入った。

「もう帰りなさい。お母さんが心配するわよ」

中からパイアは言った。するとテセウスは立ち上がつて、

「僕も一緒にシャワーを浴びたら帰るよ」

とシャワールームに飛び込んだ。

第三章 デイアネイラ

カシエリーナは、自分の研究室でコンピュータのキーボードを叩いていた。

（あのエリザベスという子の言っていた事、気になるわ。確かにあれから五年も経つというのに、未だに四人の影武者の行方はわかっていない。と言うより、探す事すらしていないのかしら？）

彼女はブラウスの袖をまくり上げてキーボードを叩き、大学のデータベースにアクセスし、ディズム爆死当時のニュースデータや新聞記事、雑誌や論文を呼び出して調べた。

（どれほど探しても、あの日から一ヶ月くらいしか、影武者の行方不明の話は出て来ない。何故なのかしら？）

その時、ドアがノックされた。カシエリーナは手を休めてドアの方を向き、

「どうぞ。開いているわ」

と答えた。

「失礼します」

入って来たのは、ロイとエリザベスだった。カシエリーナはニコリして、

「よく来たわね。さ、かけて」

とソファを手で示し、部屋の隅にあるテーブルに近づいて、コーヒーマーカークの電源を入れた。

「ヘエ」

ロイは周囲を見回しながら、ソファに腰を下ろした。研究室だから当然なのだが、中は本棚だらけで、窓以外の全てを覆い尽くさんばかりに並んでいた。

「凄いなア。本屋みたいだ」

「私なんかまだ少ない方よ。ベテランの教授方は研究室の他に書庫に何千冊も本を保管しておられるわ」

カシエリーナはロイの前に腰を下ろしながら言った。綺麗な膝が二つ、ロイの目の前に並んだ。ロイは思わず生唾を呑み込んでしまった。エリザベスはロイの隣に座っていたが、そんなロイの行動を見て、

「嫌らしいわね」

と呟いた。ロイはその言葉にギクツとしてエリザベスを見ると、

「な、何だよ？」

と言い返した。彼は自分が考えている事を見抜かれたような気がして、ドキドキしていた。カシエリーナもその時初めて、自分のスカートの丈が短過ぎて、ソファに座るのには（ましてや目の前に若い男がいるのに）適さないのだ、と言う事に気づいた。

「あ、あつ」

彼女は頬を赤らめて、膝を斜めにした。エリザベスはカシエリーナのことをキツと睨みつけて、

「先生、詳しい話をしましょうと言われたので、参りました。どんなお話ですか？」

とまるでこれから喧嘩でも始めるのではないかという調子で尋ねた。カシエリーナは苦笑いして、

「そ、そうね。貴女がさっき言っていた、ディズム総帥の影武者の話なんだけど……。どうして貴女は、爆死したディズム総帥が本物ではないと考えるようになったの？」

と尋ね返した。するとエリザベスはギクツとしたような顔つきになり、黙り込んだ。カシエリーナは変に思っ

「あら、どうしたの？」

とエリザベスの顔を覗き込んだ。大学生にしては、落ち着いた服装だけど、顔はやっぱり若々しくて学生らしいわね、とカシエリーナは思った。

エリザベスがディズムの影武者の話を持ち出したのは、カシエリーナへの嫉妬からだっただけだ。別に何か思うところがあつてした発言ではない。とにかくあの時は、カシエリーナとロイの会話を遮り

たかっただけなのである。だから何故と問われると、答えられない。もちろん正直に、自分の考えている事を話すわけにもいけない。エリザベスはすっかり困ってしまった。

「こいつ、推理小説やサスペンススリラーが大好きなんですよ。だからじゃないですか？」

思ってもみなかったロイの助け舟に、エリザベスはホッとした。と同時に、ロイに悪い事をしたと自己嫌悪に陥ってしまった。

カシエリーナはコーヒーメーカーのところにいき、カップにコーヒーを注いで、トレイに載せ、戻って来た。彼女はテーブルの上にトレイを置いて、

「なるほどね。私も好きよ」

「そうですか。じゃ、俺も好きになっちゃおうかなア」

「フフフ……」

カシエリーナとロイの会話が弾んでいるのをエリザベスはぼんやりと見ていた。

（私、何やってるんだろう？）

彼女の頭の中を、そんな疑問が駆け抜けた。

「それでね、今ディズム総帥の影武者の話が出て来る記事や論文なんかを探していたんだけど、いくら探しても、事件後一ヶ月足らずで、全くどこにも出ていなくなっているのよ。当時はそんなこと、気にも留めなかったんだけど、今になって考えてみると、とても不思議よね」

とカシエリーナが言ったので、エリザベスはハッと我に返った。

「先生はご存じかどうか知りませんが、俺達、あのクロノス事件の当事者なんです」

ロイが誇らしそうに言うと、カシエリーナはクスクス笑って、
「ええ。さっき名前を聞いてから少しして、思い出したの。レージンから聞いたことがあるから」

「レージン？」

ロイはキョトンとした。カシエリーナはロイを見て、

「私のフィアンセよ。彼は今、憲兵隊の第一分隊の分隊長を任されているわ」

「フィ、フィアンセ？」

ロイの目が虚ろになった。相当ショックだったらしく、彼は俯いてしまった。エリザベスはそんなロイを見て、急に上機嫌になり、「そうなんですか。先生ほどの美人なら、恋人がいないわけないですよね」

「ありがとう、イトーさん」

カシエリーナはエリザベスの豹変に驚きながらも、礼を言った。エリザベスは照れ笑いをして、

「エリーでいいです、先生。それに、この人もロイで十分です」

「わかったわ」

カシエリーナはニコツとして応じた。そして、

「話を元に戻すけど、ロイ」

「は、はい」

ロイはカシエリーナに呼びかけられて、死の国から舞い戻ったような顔でカシエリーナを見た。エリザベスはそんなロイの動きがおかしかったのか、クスクス笑った。ロイはムツとしてエリザベスを一瞥してから、

「何でしょうか？」

とカシエリーナを見た。カシエリーナは真剣な表情で、

「あなた達、クロノスがその後どうなったか知ってる？」

「いいえ。反デイズム軍に引き渡した後のことは知りません。それが何か？」

ロイはカシエリーナの目を見た。カシエリーナは二人を見て、「デイズム総帥のことと関係があるかどうかわからないんだけど、クロノスはその事件の後、ニューペキンの軍支部で保管していたらしいの。でも、半年ほど前、クロノスの保管されている倉庫に、侵入した者がいたらしいわ」

「クロノスの倉庫にですか？」

ロイは身を乗り出した。エリザベスもカシエリーナの話に聞き入っている。カシエリーナは大きく頷いて、

「そうなの。サードモンスタープランって聞いた事ある？」

「サードモンスタープラン、ですか？ 聞いた事あるか？」

ロイはエリザベスを見た。エリザベスは首を横に振って、

「知らないわ。何ですか、それ？」

とカシエリーナを見た。カシエリーナは声を低くして、

「スキュラ、クロノスの次の戦闘機の計画よ。確か、『ディアネイラ』とかいう名前だったと思うわ」

「ディアネイラ？」

ロイとエリザベスは口を揃えて言った。カシエリーナは立ち上がって窓に近づき、

「ディアネイラは、スキュラやクロノスを上回る破壊力を持つ、まさにモンスターと呼ぶにふさわしいものだったらしいの。あなた達が、クロノスを奪ったおかげで、その計画は挫折したらしいわ」

と振り返って言った。外からの日差しが、カシエリーナの黒髪をキラキラと輝かせていた。ロイはカシエリーナを見上げて、

「そのディアネイラと、クロノスの倉庫に侵入した奴と、どういう繋がりがあるんですか？」

「クロノスのプロトタイプをさらに発展させたものが、ディアネイラらしいの。侵入者はクロノスの倉庫から、クロノスのマニュアルと設計図を盗み出そうとして捕まったのよ」

カシエリーナはコンピュータデスクの椅子に腰をかけて、脚を組んだ。ロイはギョツとして、

「じゃあ何者かが、ディアネイラを造ろうとしているってことですか？」

「かも知れないわね。その捕まった侵入者というのが、リノス・リマウという男の部下だったらしいわ」

「リノスの？」

ロイはリノスの姿を思い浮かべた。狡猾そのものの顔が、ヒグマ

のような身体に着いている男。

「リノスが、デアネイラを造ろうとしているんですか？」

「そうじゃないらしいの。リノス・リマウという男には、そんな力も資金もないようだから」

「じゃあ、リノスの後ろに誰かがいる？」

ロイはその時改めてエリザベスの言った言葉を思い出した。

『私が言いたいののは、核融合砲基地で爆死したのは、本物のディズム総帥かどうか知らない、ということです』

「そう考えるのが、正しいわね。でもこの話、他言無用よ。レージンから聞いた、トップシークレットなんだから」

カシエリーナは、唇に人差し指を押し当てて言った。ロイはニヤリとして、

「先生のフィアンセ、そんなこと先生に話しちゃって立場大丈夫なんですか？」

「大丈夫なんじゃない？」

カシエリーナもクスツと笑って答えた。

第四章 疑惑

翌日、レージン率いる憲兵隊第一分隊は月のコペルニクススクレータ復興式典に出発する評議会議長の一行に先立って、ナリタ空港の宇宙港から月へ向けて飛び立つ事になった。猜疑心の強い現議長の強い要請で急遽決定されたので、レージン達は大わらわだった。当初は同じ日に出発だったからだ。

「どこまで心配性で疑り深い議長なんだかな」

レージンはそう独り言を言い、ロベルト達隊員に向かって、

「まさか何か起こると思えないが、月には今回の式典に議長が出席するのを快く思っていない輩もいるようだ。細心の注意を払って、警護に当たってくれ」

全部で十名の隊員達は、

「はっ！」

と敬礼して応えた。レージンは、ロベルトが緊張でカチカチになっているのに気づき、フツと笑った。

「さア、乗り込むぞ」

レージンは先頭に立って発射台に向かった。隊員達はその後に続いて歩き出した。

一方カシエリーナも、ニューペキンから月に向かうシャトルに乗船するため、搭乗手続きをしていた。ニーストウキヨウはすでに午前九時を過ぎていたが、ニューペキンはまだ朝靄が煙っている時刻だ。カシエリーナは地球と月の救世主として、招待されているのだ。彼女自身は気が乗らなかったのだが、忙しくてあまり会う機会がないレージンも警備のためとは言え、月に行く事になっていたのだ。どこかで会う事ができると思って、出席を決めたのである。彼女はレージンとの再会を想像して、ついニンマリしてしまい、手続きをしていた受付の女の子をギクツとさせてしまった。

少し肌寒い日だったので、彼女は自慢の美脚を封印して黒のロングスカートを履き、ブラウスも襟がキツチリ閉じたものにしており、ジャケットも少し厚手の白にしていた。耳には大きめのイヤリングが下がっていて、髪はカチューシャで留め、額に少し前髪が垂れている。黙っていれば、まだ二十代前半で通りそうだと自分で思った。実際童顔の彼女は、そう見えなくもなかった。

（でも……）

彼女はロイ達と話した昨日の事を思い出していた。

（あのクロノスの倉庫に侵入したのがリノス・リマウの部下で、単にクロノスのコピーを造ろうとしたのなら、何の心配もいらなくても、もしそれだけのことでないとしたら……）

何者かが再び戦争を起こそうとしているのなら、とんでもないことだ。カシエリーナは搭乗カードを受け取ると、搭乗口に向かった。（そのリノスもまだ逃亡中で、軍も警察も搜索中だと言っていたし……）

エリザベスの嫉妬から、カシエリーナは様々なことに思いを巡らせる事になっていた。

カシエリーナの父であるシノン・ダムンは、戦火を免れた邸で、またガイア大学に通う女性と暮らし始めていた。今年六十歳の彼には、もはや女性に対する肉体的欲求はほとんど残っていなかったのだ、以前暮らしていたナターシャと同じく、彼女をどうしようと思った事はない。

「教授、朝食の用意ができましたよ」

シノンがバルコニーで寛いでいる所へ、その女性がやって来た。髪は少し茶色っぽくて、目はパツチリした二重で瞳は碧色。口元は口角がほどよく上がっていて、理知的な印象を与える。彼女の名前は、テミス・アキ。ガイア大学の四年生で、ロイやエリザベスと同じゼミに所属している、活発な女の子である。

彼女は持っていたトレイをバルコニーのテーブルの上に置き、自分

も椅子に腰を下ろした。起き抜けのガウン姿のシノンと、キッチンとワインレッドのワンピースに着替え、フリルの着いたエプロンを着けているテミス。何となくそぐわない二人に見えたが、決してそうではない。

「また新しい日が始まるのか。これで死に一步近づいたわけだ」

シノンが独り言のようにボソツと言うと、テミスはニツコリして、「何をおっしゃるんですか、教授。まだまだ、あの世からのお迎えなんて、先の話ですよ」

と言った。するとシノンはテミスを見て、

「いやいや。死というものは、常に人の背後にいていつ襲いかかって来るのかわらんものなのだよ。どれほど健康な者でも、翌日には死んでしまいかも知れんのだ」

「教授」

テミスがたしなめるようにシノンを睨んだ。シノンは苦笑いして、そのすっかり白くなつた総髪を掻きむしると、

「いや、すまん。しかし死を直前にして、狼狽うろたえるのも嫌だからな」と答えた。テミスは再びニツコリ笑って、

「さア、早く食べて下さい。今夜は、マーン先生夫妻がいらつしやるんですから、パーティーの準備をしなくちゃならないんです」

「はいはい」

シノンもニツコリして、皿の上に並んだサンドイッチを頬張った。

第五章 すれ違い

一方ロイは、法学部棟のロビーにある掲示板の前で呆然としていた。

『カシエリーナ・ダムン 行政法 休講』

ロイはカシエリーナの講義する憲法、行政法、刑法の三つを受講する事になっていたのだが、カシエリーナが月のコペルニクススクレータの復興式典に出席するため、一週間大学を休むことになったのを知って、半分死んでしまったかのように固まっていた。

「残念だったわね、ロイ」

エリザベスに声をかけられて、ロイはハッと我に返り、彼女を見た。

「何がだよ？」

図星を突かれると強がりと言うのが、ロイの悪い癖である。エリザベスはニヤツとして、

「カシエリーナ先生、休暇なんですよ？ しかも、一週間も」

「か、関係ないよ」

ロイは歩き出した。そして、あれっと思って立ち止まり、改めてエリザベスを見た。彼女は昨日とは全く違う服装だった。身体の線がクッキリと浮き出た真っ赤なワンピース。しかも、スカートの丈は、カシエリーナのものより凄い膝上二十五センチメートルはあった。ちよつとかがめば、中が丸見えになりそうだ。しかも胸元も、完全に谷間が見えており、テレビやインターネットのアイドルの格好よりきわどい服だ。その上、化粧もいつもの彼女とは違い、妙にケバケバしい。口紅はパープルで、アイシャドーはピンク。髪型は、まるで嵐の中を駆け抜けて来たように逆立ったもので、それでいて何かまとまりがあった。

「どうしたんだ、お前、その格好は？」

ロイばかりでなく、周囲を歩いている誰もが（特に男共が）、

エリザベスを見つめていた。

「あら、貴方、こういうの好きなんじゃないの？」

「あのな……」

ロイはエリザベスの変わりように呆れてしまった。

（こいつ、何考えてるんだ？ 俺はこいつの、大人しくて、派手好きじゃないところが好きだったのに。これじゃ、そこいらのガサツな女と一緒にゃねえかよ……）

ロイは口に出して言いかけたが、それを何とか呑み込み、再び歩き出した。

「待つてよ、ロイ」

エリザベスが追おうとすると、ロイはうるさそうにエリザベスを見て、

「ついて来るな。俺はそういうケバい女は大嫌いなんだ」

と言つて立ち去ろうとした。するとエリザベスは、

「何よ！ じゃ、今まではどうなの？ あの日以来、貴方はカシエリーナ先生のことはかり考えて……。すぐそばに私がいるのに、私の事なんか、少しも考えてくれなかったじゃないの！」

と癪癪を起こした。ロイはギョツとしてエリザベスを見て、

「お、おい、大声を出すなよ。皆が見てる」

と周囲に集まり始めた学生達を見た。しかし、逆効果だった。

「だから何よ！」

ますますエリザベスは、声を荒げて捲し立てた。

「今までだつて振り向いてくれなかったのに、この格好が気に入らないなんて、よく言えたものね！」

エリザベスの目に涙が光っていた。ロイは仕方なく、エリザベスの右手を掴んで、走り出した。

「何するのよ！」

ロイは嫌がるエリザベスを無理矢理学部棟裏の人気のないところに連れ出した。

「痛いわよ、放してよ！」

ロイはエリザベスの右手から自分の手を放した。するとエリザベスはその場にベタンとしゃがみ込み、泣き出してしまった。

「私の事なんて少しも考えてくれないで、何よ……。部屋で一人で先生のことを考えて、変な事してたんでしょ」

エリザベスが言ったので、ロイはギクツとしたが、

「バ、バカ言うな。あの先生の事は、そんな対象じゃないよ。ただ憧れているだけだ」

「どうだか……」

エリザベスは泣くのをやめて、キツとロイを睨んだ。ロイもさすがにあまりにも支離滅裂なエリザベスの言動にムツとして、

「じゃあ、俺は何て言えばいいんだ？ どうすればいいんだ？」

「……」

エリザベスはビクンとした。ロイはエリザベスの前で片膝を着いて彼女の両肩を掴み、

「お前の事は、ガキの頃からずっと好きだったんだ。だから、素のままでもいい。そんな格好するなよ。いつものお前の方が、ずっとチャーミングなんだからさ」

と言った。するとエリザベスの大きな瞳から、ポロポロと涙が溢れ出た、

「ごめんなさい、ロイ……。ごめんなさい」

彼女は泣きじゃくりながら、ロイに抱きついた。ロイも優しく彼女を抱きしめた。

「もういいよ、エリー。俺も悪かったよ」

二人は長い間何となく付き合っていた自分達に気づき、やっと素直に相手を見る事ができるようになった。

ニューホンコン。昔は雑多な街であったが、今では共和国政府の都市計画という名の強制収用で、すっかりその様相を変えていた。あれだけゴミゴミしていた街並が、碁盤の目のように整えられ、二ユーペキンに次ぐ、アジア第三の都市となっていた。（一位は言

うまでもなく、共和国首都、ニユートウキョウである)

そのニユーホンコンの一角の林の中にリノス・リマウは潜んでいた。そこは惨めな掘つ建て小屋だった。

彼は報酬の半分を前金でもらい、正体不明の出資者の指示で部下にクロノスの設計図とマニュアルを盗ませようとした。しかしそれは失敗に終わり、部下は捕まった。彼は当然出資者から残りの報酬は貰えず、殺されると思った。しかし、そうはならなかった。彼の口座に、残金が振り込まれた上、刺客が襲って来る事もなかった。リノスには理由がわからなかった。

「失敗したのに報酬を払うとは……。余程のバカか、それとも……」
謀略には長けているつもりのリノスだったが、彼に出資した者の底知れぬ構想を感じ、背筋が凍る思いだった。

「一体、何者なんだ？」

リノスは手に持っていた骨つきのフライドチキンを食いちぎった。
「ニユーホンコンにいるらしいということ以外、何も知らされないのも気に食わんな」

リノスは眉をひそめて呟いた。

ニユーホンコンには、カロン・ギネイに殺されたケパロス・ピュトンが所有していた巨大な軍需工場があった。そこは共和国軍に接收され、軍の管理下にあったが、一年前にある投資家が軍から払い下げを受けて、民間企業に戻った。

その大きさは想像を絶する。大型戦艦クラスが五隻、楽々入るのだ。そしてここは、軍の兵器全てを一手に引き受け、製造していた。その工場を共和国軍司令長官であるダス・ガールスが視察に来ていた。彼はデイズムによって追放されていたが、デイズムが死んで復権し、再び司令長官となったのである。

「月の連中が、ニユーホンコンを過敏なまでに意識している。あまり派手な動きはするなよ」

たくさんの襟章と勲章が着けられた軍服に身を包んだガールスは、

デイズムの下で使われていた時と違い、澁刺としていた。

「わかっております。コペルニクスクレータでの式典も迫っておりますので、月の過激な連中を刺激したくはありません」

ガールスの横に並んで立つて話している男は、工場を買い取った者の代理人であり、工場の経営者でもある、アバス・アドである。ずんぐりしていて、頭の半分が禿げ上がっているこの男は、長身のガールスと並ぶと、よりその不格好さが際立った。しかし目つきは鋭く、頭は切れそうである。

「結構。取り敢えず、夜のパーティーを楽しみにしているぞ」

「はい」

歩いて行くガールスとそのSP達の後ろで、アバスはニヤリとした。

（この好き者が……）

アバスは心の中でガールスを嘲笑した。

第六章 失踪

シノンの邸では、テミスがパーティーの準備に追われていた。外はすっかり夕闇に包まれており、後はマーンとナターシャを待つばかりとなっていた。

シノンは忙しく動き回るテミスを、部屋の隅の椅子に腰掛けて眺めていた。

（偶然かな？）

シノンはテミスを見てそう思った。彼女とは、久しぶりに訪れたガイア大学でたまたま知り合った。そして彼女の名を知って驚いたのだ。テミスという名は、彼の元妻の名前と同じなのである。しかし、二人は似ても似つかない。カシエリーナにテミスを紹介した時、彼女もその名を聞いてギョツとしていた。しかしカシエリーナは一切その事には触れず、テミスとも「大学では講師と学生の関係」という約束をしていた。

（何かの巡り合わせか？）

無神論者のシノンが、そんなことを考えてしまった。

（下らんな。偶然さ）

その時、玄関の呼び鈴が鳴った。テミスは手を止めて、玄関に走った。

「いらっしやい……」

満面の笑みでドアを開いたテミスは、そこに立っていたナターシャを見て仰天した。髪は乱れたまま、顔は血の気がすっかり引いていて青いと言うより白くなっていた。服装も部屋着のままで、化粧もしていない。ナターシャは元々奇麗な顔立ちなので、それほど化粧はしないのだが、それにしてもその時の彼女は、本当にスッピンだった。相当慌てて来たようだ。

シノンもテミスがなかなか戻って来ないので、玄関に出て来た。そしてそこにいた嘗ての同居人の、あまりにも悲しそうな顔を見て、

びつくりしてしまった。

「どうしたんだ、ナターシャ？」

シノンに声をかけられて、ナターシャはいきなり大声で泣き出し、シノンにしがみついた。

「おい、ナターシャ、どうしたんだ？」

シノンはもう一度尋ねた。しかしナターシャは泣きじゃくるばかりで、何も答えようとしない。シノンはテミスと顔を見合わせた。

カシエリーナとレージンは、コペルニクスクレータから少し南に行ったところにあるホテルドームの中の一つのホテルに部屋を取り、レストランで食事をしていた。

「いつ以来かな、こうして晩飯と一緒に食べたのは？」

レージンが尋ねた。カシエリーナは鼻の頭に右手の人差し指を当てて、

「うーん。いつ以来かしら？ 忘れてしまっくらい、放っておかれた気がするわ」

「おいおい、他人聞きが悪いぞ。放っておいたのは、お前の方だろう？」

レージンの反論にカシエリーナはペロツと舌を出して、

「ごめーん。ちょうど大学の講師になれるかどうかの瀬戸際で、どうにも動きが取れなかったのよ」

「ま、念願のガイア大学の教壇に立てるかどうかってことだったんだから、そのことをどうこう言うつもりはないけどさ。よく休暇が取れたな？」

レージンはパンをちぎって口の中に放った。カシエリーナはコーヒーカップを手に取り、

「大学にとっても、式典出席者がいるのは大変な名誉ですからね。教授会も、理事会も、諸手を上げて賛成してくれたわよ」

「結局は損得勘定で許可された休暇ってことだな」

レージンは、パンをコーヒーで流し込んで言った。

「そんな言い方されると、身もふたもないけどさ」

カシエリーナは肩を竦めた。その時、彼女のバッグの中の携帯が鳴り出した。

「おい、バイブにしてないのかよ？ 恥ずかしい奴だな」

レージンの指摘にカシエリーナはムツとして、

「うるさいわね、ちよつと忘れてただけよ」

と立ち上がり、化粧室に行きかけたが、人が何人かいるのが見えたので、仕方なくレストランの外に出た。

「お父さんから？ 何かしら？」

カシエリーナは不思議に思っただけで携帯に出た。

「どうしたの、お父さん？ マーン先生達と、パーティーの最中じゃないの？」

電話の向こうのシノンの声は、とてもそんな楽しそうな雰囲気ではなかった。

「マーン君が行方不明になった。ナターシャの話では、何者かに拉致されたようだ」

「何ですって？」

カシエリーナはつい大声を出してしまい、周囲を見回した。幸いそばには人はいなかったため、彼女はもう一度シノンに尋ねた。

「行方不明って、警察には連絡したの？」

「無論だ。しかし、現実問題として、彼が拉致されたという証拠がないし、犯人から何か要求があったわけでもないから、取り合ってもらえなかったそうだ。もう一日待って、それでも帰らなかったら、届けを出してくれと言われたそうだ」

「そんな。悠長過ぎるわよ」

「わしもそう思うんだが、警察の言い分も正当だからな」

「そうだけどさ……」

カシエリーナは憤懣やる方ないという顔をした。

「戻って来られるか？」

「ええ、何とか」

「すまん、大事な式典に出席するところなのに」

シノンの言葉にカシェリーナは、

「何言ってるのよ。マーン先生がいたからこそ、今の私があるのよ。式典なんか、私がいなくなっただけで何の支障もないわよ」

「そうか。気をつけて戻って来てくれよ」

「ええ」

カシェリーナは携帯を切ると、大きな溜息を吐いた。

「どうしたんだ？」

カシェリーナがいつまでも戻らないので、痺れを切らせたレージンは、さっさと会計をすませてレストランを出て来た。

「どうしたんだ、カシェリーナ？ 何かあったのか？」

カシェリーナは深刻な顔でレージンを見て、

「マーン先生が拉致されたらしいの」

「何だって？ どういうことだ？」

興奮して問い質すレージンにカシェリーナは冷静に対処した。

「まだ何もわかっていないわ。わかっているのは、マーン先生が行方不明だということ。ただそれは、ナターシャさんの話なの。それだけでは、判断しかねるでしょ？」

「そうだな。それで？」

レージンは先を促した。

「私、地球に帰るわ。式典は欠席するかも知れない」

「仕方ないだろう。式典なんて、勝手に進めてもらえばいいさ」

「そうね」

カシェリーナはすぐに部屋に戻り、帰り支度を始めた。

「俺は帰るわけにはいかないから、教授達によろしくな」

「わかったわ」

二人は熱いキスをかわして、別れた。

コペルニクスクレータの中枢に位置する大統領官邸には、新しく就任した大統領が登庁していた。その官邸の脇にある軍司令本部に、

司令長官になったバラムイア・サランドはいた。

バラムイアは、前任者のガルガロイ・ダンドルがゲスに暗殺され、ラルルが核融合砲で蒸発してしまったために、司令長官に納まる事のできた、運のいい男である。しかし彼は、不安になっていた。

「過激派の連中が、鳴りを潜めているのも気になるが、地球にいるスパイからの情報の、半年前に地球で起こったクロノス盗難未遂事件の話も気になる。何者かが、噂に聞くサードモンスタープランを復活させようとしているというのか？」

バラムイアは、回転椅子を軋ませて立ち上がった。

「もしそんなことになれば、今度こそ月は立ち直れないほどのダメージを受けるだろうな」

彼は窓の外の夜景に目を向けた。彼がいるのは、司令本部ビルの百二十階で、コペルニクススクレータが一望できる位置にある。

「式典を六日後に控えて……。緊張するあまり、取越苦労をしているのか？」

バラムイアは自嘲気味に呟いた。

カシェリーナは、タクシーでホテル群からさらに南にある宇宙港に向かっていた。

（先生がどうして拉致されたの？ 一体何が起こっているの？）

彼女は、ナターシャが嘘を言っているとは全く思っていない。マインは間違いなく何者かに連れ去られたのだ。となれば、それは何を意味しているのか？ 今の彼女には、それはわからなかった。

「何とか最終便に間に合いそうですよ、お客さん」

妙に愛想のいい運転手が声をかけて来たので、カシェリーナはハッと我に返り、

「あ、ああ、そう。ありがとう」

と答え、窓の外を見た。

（先生……）

カシェリーナは、もう大学時代の恩師であるダウ・バフ・マーン

に一年以上も会っていない。彼がナターシャと結婚したのが四年前で、二人の新居が完成したのが一年前。カシェリーナはその新居にお祝いを持って行って以来、マーンと会っていないかった。時折ナターシャから電話があつて、彼女とは話す事はあつたが、マーンとは話す事はなかつた。マーンはナターシャと新居で暮らし始めると同時に、大学も辞め、執筆活動に打ち込んでいた。そのせいで会えなかつたのかというと、そうでもない。シノンやその他の人間は、マーンと会っていたのだ。

（私、避けられているのかな？）

あまりマイナス思考ではないカシェリーナも、落ち込みかけたほどだった。しかし、これには驚くべき理由があつたのである。

第七章 謎

シノンはやつと落ち着いたナターシャをソファに座らせて、自分もその向かいに腰を下ろした。テミスはナターシャの横に座り、彼女を気遣うように見ていた。

「もう少し詳しく話してくれないか、ナターシャ。警察に話したが、取り合ってもらえなかったということだが、マーン君がいなくなつた時の状況を教えてくれ」

シノンが促すと、ナターシャはまだ赤い目を彼に向けて、

「今日、教授のところに伺う事になっていたので、何がプレゼントを買おうと思つて、ダウを誘つて出かけようとしたのですが、ダウは仕事があるからと出かけるのを嫌がつたんです。私は仕方なく一人で買い物に出かけました」

シノンはテミスに目配せした。テミスは頷いてキッチンに行った。ナターシャが再び口を開いた。

「それで、買い物をすませて家に戻ると、中が荒らされていて、ダウの姿がありませんでした。私は家中を探しましたが、彼はいなくなつたんです。それで……」

ナターシャは泣き崩れた。シノンはナターシャの肩に優しく手をかけて、

「マーン君が誘拐されたのか、自分の意志で姿をくらましたのか、実際のところははっきりしていないんだね？」

「はい」

ナターシャは顔を上げて答えた。シノンはフツツと溜息を吐いて、「何にしても今日はもう遅い。今テミスに寢酒の用意をさせているから、それを飲んで眠りなさい」

「でも、ダウが……」

ナターシャが駄々をこねる子供のようなことを言いかけたので、シノンはムツとして、

「君がいくら心配したところで、事態は何も進展しないんだ。いいから、言う通りにしなさい」

「はい……」

ナターシャは応え、目を伏せた。

翌朝、ロイはエリザベスを誘ってレンタカーでドライブに出かけた。エリザベスはいつもの服装に戻って、化粧もほとんど目立たない。ロイは満足そうにエリザベスを見てから、車をスタートさせた。「大学の講義はどうするの？」

エリザベスが尋ねると、ロイはフンと笑って、

「クストスに頼んどいたよ。奴のノートを後で見せてもらえば、実際に講義に出るよりずっとよくわかるぜ」

「まア」

エリザベスは呆れながらも、嬉しく思っていた。ロイの気持ちははっきりわかったし、こうして自分を誘ってドライブに出かけてくれている。エリザベスはいいニコニコしてしまった。

「何だよ、ニヤニヤして」

ロイが言ったので、エリザベスはハツとして、

「や、やだ……」

と赤くなって俯いた。そんなエリザベスを見るロイの目は、優しさに満ち溢れていた。

「あれ？」

ロイは前を見て言った。エリザベスもそちらに目をやり、

「何？」

と尋ねた。ロイはスピードを落として、車を歩道に寄せ、停止させた。

「先生！」

ロイは大声を出した。彼はバスターミナルでバスを待っているカシエリーナの姿を見かけたのだった。

「あら、ロイにエリーじゃない？」

声をかけられたカシエリーナは、ニツコリして二人に近づいて来た。

「こんなところで何してるの？」

ロイとカシエリーナの口から、絶妙なタイミングで全く同じ言葉が出た。二人は顔を見合わせてクスツと笑った。

「先生は月に行ったんじゃないかなかったですか？」

エリザベスが口を挟んだ。カシエリーナはエリザベスを見て、

「そうなんだけど。急な用事ができて、今朝早く、こちらに戻ったのよ」

「一体何があつたんですか？」

ロイが尋ねた。カシエリーナはロイを見て、

「私の恩師が行方不明なの。その奥さんが今私の父の家に来ているので、今からそこへ行くところなのよ」

「先生の恩師って、ダウ・バフ・マーン教授ですよね？」

ロイは言った。カシエリーナは頷いて、

「そうよ」

と応じた。ロイはチラツとエリザベスを見た。するとエリザベスはすぐにロイの言いたい事を察して、コクンと頷いた。ロイはニツとして再びカシエリーナを見て、

「じゃ、俺が乗せてつてあげますよ」

「でも……」

カシエリーナはエリザベスを見た。また睨まれると思ったのだ。

しかしエリザベスはニツコリとして、

「大丈夫ですよ。私達、別に行く当てがあつて走つてたわけじゃありませんから」

と答えた。カシエリーナは、エリザベスが妙に機嫌がいいので、逆に驚いてしまった。

レージンは部下と合流して、コペルニクスクレータにある式典会場の視察をしていた。いや、視察というよりは、検査と言った方が

正しいかも知れない。彼らは会場の裏、カーテンの陰、廊下の窓、壁、床、会場の天井にあるライトと、様々な箇所を調べて回った。

「これといって、異常な箇所は発見されませんでした」

ロベルトが報告した。レージンは、

「そうか。ご苦労。また明日、同じように点検する。今日はこのまま解散だ」

「はっ！」

隊員の多くは大喜びで、それぞれの目的地に向かって走って行った。レージンはそんな様子を見ながら、別の事で不安になっていた。（マーン先生がこの時期になって行方不明とはな。偶然なのか？それに、リノス・リマウらしき人物が、ニューホンコンにいますという情報もある。何かが起ころうとしているのか？）

「隊長、どうしたんですか？」

残っていたロベルトが声をかけた。レージンはハッと我に返って、「いや、何でもない。それより、お前はどこにも行かないのか？」と尋ね返した。ロベルトは苦笑いをして、

「遊びたいのは山々なんです、後でばれると、命が危ないもんで」「彼女、怖いのか？」

レージンがニヤリと言うと、ロベルトは照れ笑いをしながら、「はア……。独占欲が強いというか……」

「ハハハ、お互い女運が悪かったな」

レージンは大笑いをした。ロベルトはキョトンとして、

「では隊長、カシエリーナ・ダムン先生も、怖いのですか？」

「多分、お前の彼女より怖いだろうな」

レージンは肩を竦めて言った。ロベルトはただ引きつつて笑うだけだった。

第八章 新たな動き

ロイ達の乗るレンタカーは、ニューペキン的高级住宅街に入っていた。

「ヘエ。すつげえな。この辺、みんなこんな凄い家ばっかなんですか？」

ロイは立ち並ぶ家の大きさに、すっかり圧倒されていた。エリザベスもポカンと口を開けたまま、巨大な邸宅を眺めていた。

「こちら辺は、土地が安かったのよ。二十年前はね。でも今じゃとても手が出ないわ」

カシエリーナがロイとエリザベスの間に顔を出して言った。ロイはその横顔を間近で見て、ドキツとした。

（ やっぱり、大人の女性だよなア。ちょっと開けっぴろげな感じもするけど ）

しばらくして、三人はシノンの家に到着した。

「ガレージはこの奥にあるわ」

カシエリーナが降りながら言うと、ロイは、

「いえ、すぐ行きますから」

「そんなこと言わないで。私、料理は未だにダメだけど、コーヒーを入れるのは得意なのよ。この前、研究室でご馳走してあげたでしょ」

カシエリーナは振り返って言った。

「どうする？」

ロイはエリザベスを見た。エリザベスは肩を竦めて、

「別にいいんじゃない？ どこへ行くつもりもなかったんだから」
「そうだな」

エリザベスが降りて、バンとドアを閉じると、ロイは邸の裏手にあるガレージに車を向かわせた。エリザベスはしばらくそれを見送っていたが、やがてハツとして、

「先生！」

と玄関に近づいて行くカシエリーナに声をかけた。カシエリーナは立ち止まってエリザベスを見て、

「何、エリー？」

エリザベスは少しモジモジしながらカシエリーナに近づき、

「この間はごめんなさい。私、先生に喧嘩腰で話して……」

「私がロイを盗っちゃうと思ったの？」

カシエリーナがニツコリして尋ねると、エリザベスは真っ赤になつて、

「いえ、そうは思いませんでした。ただ、ロイがあんまり先生に夢中なので、つい……」

「でも、今は大丈夫なんですよ？」

カシエリーナは声を低くして言った。エリザベスは小さく頷いた。「じゃ、何も問題ないわ」

カシエリーナが満面の笑みをたたえて言った時、ロイが戻つて来た。

「お待たせ」

カシエリーナとエリザベスは、ロイがキョトンとするのもかまわず、顔を見合わせてクスクス笑った。

リノスは掘つ建て小屋の中で寝息を立てて眠っていたが、ドアの開く気配にハツとして飛び起きた。

「誰だ？」

リノスは身構えながら、ドアの向こうに立っている一つのシルエットに尋ねた。するとそのシルエットの主が、

「リノス・リマウ様ですね。総帥閣下のご命令で、お迎えに上がりました」

と言った。リノスは眉をひそめて、

「総帥？ 迎え？ ということだ？」

と再び尋ねた。シルエットの人物は、

「ご同行願えれば、おわかりいただけます。総帥閣下が、貴方にク
ロノスの設計図とマニュアルを盗み出すように依頼した方なのです」
「何？」

リノスは身構えるのをやめた。

第九章 思わぬ出会い

「よく来てくれた、カシエリーナ」

カシエリーナはドアを開いて出迎えたのがシノンだったので、少々面食らいながら、

「ところで、ナターシャさんは？」

と中を覗いた。シノンは奥の方をチラツと見て、

「寝室で休んでいる。まだ少し興奮気味だな」

「そう」

カシエリーナは中に入ってから、

「さ、どうぞ」

とロイとエリザベスの方を向いて言った。その時シノンは初めて二人に気づき、

「おや、君達は？」

「俺達、先生の講義を受けている、ガイア大生です」

ロイが答えると、シノンは苦笑して、

「そんなことはわかってるよ。確か君はロイ・アマギ。それから、そちらの品のいい嬢さんがエリザベス・イトー。そうだね？」

と言ったので、ロイとエリザベスはびっくりしてしまった。

「な、何で知っているんですか？」

ロイは尋ねた。シノンは得意そうな笑みを浮かべて、

「私のコンピュータには、クロノス事件の全容が納められている。

君達他に、ロベルト・トキワとシェリー・キモトという子がクロノスに搭乗したということも、知っているぞ」

と答えた。ロイとエリザベスは驚きを通り越して、呆然としてしまった。

「全く、相変わらず、ハツカーみたいなことをして、あっちこちから情報を引き出しているのね」

カシエリーナも呆れ顔で言った。シノンはカシエリーナに目を転

じて、

「まア、そう言っな。そのおかげで、警察の動きもわかったんだからな」

「警察の動きが？」

カシエリーナはリヴィングルームのソファをロイとエリザベスに勧めながら、自分も腰を下ろして言った。

「ああ。マーン君のことではいろいろと調べていたら、警察も少しは動いている事がわかったんだ。連中、誘拐と失踪の両面で調べている」

「何か掴んでいるの、警察は？」

カシエリーナはロイとエリザベスをチラッと見てから、シノンを見た。ロイとエリザベスも、シノンを見た。シノンは三人を見て、「掴んでいると言えば、掴んでいるな。警察は、デイズムの影武者らしき人物を見かけたという情報を得て、そのことで動いていたんだよ」

「総帥の影武者？」

カシエリーナはギョツとしてエリザベスを見た。エリザベスはカシエリーナ以上に驚いていた。ロイも同じだ。

「そこへデイズムの息子であるマーン君が行方不明という情報が入って来たので、腰の重い警察も、放っておくわけにはいけなくなつて、捜査を開始したということらしい」

シノンは続けて言った。カシエリーナは黙って頷いた。

「教授、ナターシャさんが目を覚ましましたよ」

奥からテミスが現れた。その声にエリザベスがハツとした。

「あら、テミスじゃない？ どうしてここにいるの？」

ロイもテミスを見て、

「あ、ホントだ。テミス、どうしてお前ここにいるんだ？」

と尋ねた。テミスはギクツとして、

「あ、あんた達こそ、どうしてここにいるのよ？」

と尋ね返した。カシエリーナとシノンは、しまった、という顔で見

合った。

テミスとシノンの関係は、カシエリーナがうまくロイとエリザベスに説明した。

「別に私の父とテミスは、何もやましい関係じゃないけど、大学で他の学生には話さないでね」

カシエリーナは念を押した。エリザベスは微笑んで、

「話したりしませんよ。ね、ロイ？」

とロイを見た。するとロイはニヤツとして、

「先生が、憲法と行政法と刑法の単位を保証してくれるのなら、いいですよ」

と言った。カシエリーナはこんな時、全然ユーモア感覚を失ってしまふ。彼女は思わず、

「ふざけないでよ！」

と大声で怒鳴ってしまった。ロイはビクツとして、

「す、すみません、悪い冗談でした」

と謝った。するとテミスが、

「私は別に話されても構いません。私は教授を愛しているのではなく、敬愛しているのですから。何も困る事なんかありません」

と開き直ったように言つてのけたので、ロイはテミスを見て、

「悪かったよ、テミス。喋ったりしないって。お前とは小学校も一緒だったんだから、そんな酷い事しないよ」

「信用できない」

テミスはムツとした顔でロイを睨んだ。ロイはハツとして、

「な、何でさ？」

「だってあんたは、小学校一年の時、私と結婚してくれるって言ったのに、それから半年も立たないうちに、エリーと結婚の約束したじゃない。私、それが元で転校したのよ。あんたの顔見るの、辛くなったので」

「えっ？」

ロイはもうこの上なく焦りまくってエリザベスを見た。しかしエ

リザベスは怒っている様子はなかった。それどころかニッコリして、「ごめんね、テミス。それ、私が悪いの。私がロイに、私と結婚してくれなければ、一生呪ってやるって言ったのよ。だからロイは私と結婚の約束をしてくれたの」

と言った。これにはテミスも返す言葉がない。ロイは真っ赤になっ
てしまった。カシエリーナは呆れてシノンと顔を見合わせた。

「負けたわ、エリー」

テミスは肩を竦めて言い、シノンを見て、

「教授、話を戻しますけど、ナターシャさんが目を覚ましました」
「わかった」

シノンは立ち上がり、カシエリーナを見た。カシエリーナは頷い
て、

「私、ナターシャさんに会って来るわ。あなた達はテミスとここに
いて」

とシノンと奥に行きかけた。そして去り際に、

「もめないでね」

とウィンクして奥に入って行った。ロイはムツとしたが、エリザベ
スはクスツと笑ってテミスを見た。テミスもニッコリしてからロイ
を見て、クスツと笑った。

リノスは、全長が七メートルはあろうかというリムジンに乗せら
れ、ニューホンコンの市街を移動していた。しかし彼は目隠しをさ
れており、リムジンがどこへ向かっているのかは知らされていない。
「俺をどこへ連れて行くつもりだ？」

リノスは隣に座っている男に尋ねた。男は黒い防塵マスクを着け、
大きなサングラスをかけた、オールバックの髪型で、ほとんどその
表情は読み取れないが（リノスは目隠しされているので尚更だが）
、明らかにニヤリとしたようだった。彼は、

「貴方は総帥閣下のご命令で、クロノスの設計図とマニュアルを盗
むわけでしたが、失敗しました」

「……」

リノスの全身に汗がにじんだ。彼はギュツと齒を食いしぼり、

（ 殺されるのか、俺は……？ ）

と警戒した。しかしサングラスの男は、

「危害を加えたりしませんから、安心して下さい。貴方には、サードモンスターのパイロットになっていただきます」

「サードモンスター？」

リノスはサングラスの男に顔を向けて尋ねた。サングラスの男はリノスをチラリとも見ず、前を向いたままで、

「そのことについては、今はまだお話できません」

と答えた。リノスは警戒心を解かずにした。

（ サードモンスター……。どこかで聞いた事がある……。何だ？ ）

第十章 恐るべき陰謀

カシエリーナがナターシャが休んでいる部屋に入ると、彼女は部屋の窓を開いて、外を眺めていた。

「ナターシャさん」

カシエリーナが声をかけると、ナターシャはハッと我に返ったように振り返り、カシエリーナに向かって弱々しく微笑んだ。

「本当に、何て言ったらいいのか……」

カシエリーナはナターシャに近づいた。シノンはドアのところに立って二人を見ていた。

「カシエリーナさん、ごめんなさいね。月で式典に参加するはずだった貴女にまで、迷惑をかけてしまって」

ナターシャは涙ぐんで言った。カシエリーナはニッコリして首を横に振り、

「そんなこと、気にしないで下さい。マーン先生は、私の恩師です。放っておけるわけがないでしょう?」

「ありがとう」

二人はしっかりと抱き合った。

リノスは地下道のようなところを歩かされていた。もちろん、目隠しは着けたままである。サン格拉斯の男が前を歩き、屈強な大男がリノスの両脇に張りついていて、そこは間接照明によってぼんやりとした光が射しているだけで、目が慣れないと歩けないような明るさだった。

「貴方は不思議に思っているでしょうね。何故失敗したのに、報酬の残金が支払われたのか」

サン格拉斯の男は歩きながら言った。リノスは捨て鉢気味に、

「そうだな。何故だ?」

「答えは簡単です。計画が成功したからですよ」

「何？」

リノスは禅問答でもしているのかと思った。

「何をわけのわからんことを……」

サングラスの男は、フツと笑ったようだ。彼は立ち止まってリノスの方に顔を向け、

「つまり、貴方がクロノスの倉庫に忍び込ませた部下は、捨て駒だったのです。我々の同志が、貴方の部下が侵入するより早く、倉庫に忍び込んでいました。そして、設計図とマニュアルをデジタルカメラで撮影して、その後にやって来た貴方の部下が捕まえられて騒ぎになっている隙に、脱出したのです」

「何だと？」

リノスは自分と自分の部下がすっかり道化を演じていた事に気づき、

「どういつつもりだ？ 何のために俺達を利用した？」
と語気を荒げて尋ねた。

「ですから、貴方にはクロノスの次の段階、すなわち、第三の化け物に乗ってもらいます、と申し上げましたでしょう？」

サングラスの男は、淡々とした口調で答えた。リノスはそこでようやくある事を思い出した。

「そうか……。サードモンスタープラン……。ディアネイラのことか？」

「そうです。貴方が、五年前にクロノスを狙ったのは、そのためだったのでしょうか？」

サングラスの男は、ニヤリとしたようだった。

ダス・ガールスは隣に寝ていた女が起き出したので、ハツとして目を覚ました。彼がいるのはニューホンコン最大のホテルの最上階だ。

「もうこんな時間か……」

彼はベッドの脇にあるデジタル時計を見て呟いた。表示は「10：

30」を示していた。

（下らんパーティーだったな、夕べは）

ガールスはバスローブを着てベッドを離れ、シャワールームに行った。

「キャツ！」

ガールスの夜の相手をした女は二流のファッションモデルで、アバスの紹介だった。彼女はプロポーションだけは一流モデルと遜色なかった。

「止めて下さい！」

自分がシャワーを浴びているのに、全くおかまいなしに入ってきたガールスを、女は押し止めようとした。

「かまわんだろう？ 何を恥ずかしがることがある？」

ガールスはバスローブを放り出し、女の身体を触って来た。

「……」

女はジツと耐えていた。ガールスは嫌らしい目つきで笑い、

「お前、名前は何と言う？」

と尋ねた。女はガールスの手の動きに耐えながら、

「レト・アオキです」

と答えた。ガールスは、レトの身体を舐めるように眺めて、

「いい名だ」

と言いながら身体のおちこちに手を伸ばした。レトは屈辱で泣き出しそうだった。

（我慢しなければ。こんな男に弄ばれるのは嫌だけど、祖国を救うためには……）

レトは月連邦軍の情報部が送り込んでいる工員だった。地球での表向きの顔は、売れないファッションモデルだが、実は優秀なスパイなのだ。彼女は今までこんな役を命じられた事はなかったが、先輩の女性工員に男を誘惑する方法を指導され、男性の教官に男を教えられた。信じられないような話である。

（月にいる父や母、幼い弟や妹のためにも、そして何より、祖国

月連邦のためにも……) 　まだ二十歳のレトにとって、それは重過ぎる任務であった。

カシエリーナ達がナターシャと話している間、ロイとエリザベスとテミスは、何となくぎこちない雰囲気では話をしていた。

「変わったな、テミス」

ロイが言つと、テミスはロイを見て、

「何が？」

と尋ねた。ロイは肩を竦めて、

「昔のお前はもつとお転婆だったよ。さっき奥から出て来た時、お前だって気づくのに、少し時間がかかったよ」

「そうね。大学で会う時とも、全然違う感じだったから、私も一瞬貴女だつていう事に気づかなかつたほどよ」

エリザベスが口を挟んだ。するとテミスはムツとして、

「あんた達は私の記憶が十五年前で止まっているから、そんなこと言うのよ。大学で久しぶりに会った時も、私はすぐにロイとエリーだつて気づいたのに、二人は私だつて気づかなかつたわ」

「そうだつて。まア、何にしても、さっきは本当に悪かつたよ。お前の気がすむのなら、殴つてもいいよ」

ロイは真顔で言つた。テミスは呆れ顔で、

「いいわよ、別に。昔の怨みをちよつと言つてみたかっただけなんだから。今はもう、あんたには何の魅力も感じないよ」

と言いつ返した。ロイはカチンと来たらしく、

「何だよ、それ？」

と膨れっ面をした。エリザベスはクスクス笑いながら、

「私も謝り直すわ、テミス。あの時はごめんなさい。でもロイを彼にするのやめて正解だったでしょ？」

「そうだね。シノン教授の方が、ずっとカッコいいよ」

テミスもクスクス笑いながら言つた。ロイはますます剥れてしまつた。

「あつ、カシエリーナ先生」

カシエリーナとシノンが戻って来たのに気づいたエリザベスが言った。カシエリーナはエリザベスの前に腰を下ろし、

「ごめんなさいね。ナターシャさん、少しは落ち着いたみたいよ」

「そうですか。良かったですね」

シノンはテミスの横に座り、

「もうすぐ昼だから、ロイとエリーの分の食事も作ってくれないか。大勢の方が、ナターシャも気が紛れるだろう」

「わかりました」

テミスは立ち上がり、キッチンの方へ歩いて行った。エリザベスはシノンを見て、

「私達、もう出ますから、大丈夫ですよ」

と言った。しかしシノンは、

「テミスの手料理は、一流のシェフ並みだぞ。私の娘は、ゆで卵くらいしかできんがな」

とカシエリーナを見た。カシエリーナはムカッとして、

「うるさいわね。これから勉強するのよ！」

「お前が結婚したら、キッチンに立つのはレージンになるんだろうな」

「何よ、お父さんの意地悪！」

「ハハハ！」

シノンとカシエリーナの言い合いは、父と娘と言うより、仲のいい男女の口喧嘩のように見えた。ロイとエリザベスは、呆れて顔を見合わせた。

第十一章 生きていた男

リノスはようやく目隠しを外された。一瞬目が眩むような眩しい光が見え、リノスは顔を背けた。やがて目が慣れるにつれ、そこが宮殿の大広間のようなところである事がわかって来た。

「ムッ？」

彼は自分をここに連れて来たサン格拉斯の男が立っている隣に、車椅子に乗っている人物がいることに気づいた。

「何だ？」

その車椅子の人物は、両脚共金属に覆われており、右手も義手のようだ。着ているのは、共和国軍の将軍クラスの軍服で、顔の大半は金属で覆われていて、髪の毛が少しだけ見えている程度だった。

「この方が、総帥閣下です」

サン格拉斯の男は言った。リノスは目を見張った。

（こいつ、ほとんどつくりものじゃないか……。一体誰なんだ？ まさか……）

共和国軍の軍服、そして総帥と呼ばれている……。答えは一つしかないように思われた。

（こいつ、デイズムなのか？ 核融合砲基地の爆発から生還していたというのか？）

リノスがいろいろ思案していると、

「リノス・リマウ、よく来た」

その車椅子の人物が喋った。その声は人口声帯のようだった。

（地獄から舞い戻ったのか、この男……）

リノスの額に汗がにじんだ。
「お前が私を怨んでいることはよく知っている。だが、協力してもらいたい」

車椅子の人物の声は、時々キーキーと耳障りな雑音が混じった。リノスはその音に顔を歪めた。

「俺にどうしろというんだ？」

リノスはニヤリとして尋ねた。車椅子の人物はしばらくゼーゼーと息をしていたが、

「ディアネイラで、月を破壊し尽くしてほしい」と答えた。リノスはギョツとした。

（こいつ、まだ月を滅ぼすつもりなのか……。あれから五年も経っているというのに……。いや、この男が月を憎しみの対象にしてから、四十年以上経っているはずだ。何て執念深い男なんだ……）

「返事はすぐにしなくてもよい」

キーキーという雑音混じりで、車椅子の男は続けた。リノスはフツと笑って、

「今すぐ返事をするよ。了解した。そのディアネイラとやらで、月を破壊し尽くしてやるぜ」と答えた。

（そして、次はてめえだ。二度と地獄から舞い戻れないように、跡形もなく消し飛ばしてやるよ）

リノスは狡猾な笑みを口元に浮かべた。

（そうなれば、地球と月の支配者は、この俺だ）
単純明快な計算だった。しかし事がそう簡単に運ぶはずがないのだ。

「妙な事は考えないようにして下さい。ちょっとした貴方に叛意が見えれば、ディアネイラを自爆させます」

サングラスの男はリノスの腹の内を見透かしたかのように言い添えた。リノスはビクツとして、

「ま、まさか……。そんなつもりはない」

リノスは作り笑いをして、サングラスの男を見た。

ガールスはアバスと落ち合い、再び工場の視察に出向いていた。彼はその巨大な建物の一角に見慣れない戦闘機を見つけた。それは、クロノスだった。しかしガールスは、クロノス事件の時、任を解か

れていたので、何も情報が入って来ていないのだ。

「アバス、あれは何だ？」

「ガールスは、クロノスを指差した。アバスはクロノスを見て、

「ああ、あれがクロノスですよ。ご存じなかったのですか？」

「ああ」

「ガールスは、クロノスの名前は知っていたので、自分がちょうど外されていた時の事だとわかり、ムツとした。そして、

「あれが、スキュラ作戦後、月を直接叩くために開発途上だった、クロノスなのか……」

と目を細めた。アバスはニヤリとして、

「ニューペキンの軍支部にあったものを整備のためにここへ移送したので。まア、改造も兼ねてですが」

「改造？ クロノスをか？」

「ガールスは、またしても自分の知らない事が行われている事を知って不愉快になり、アバスを睨んだ。アバスは肩を竦めて、

「そうです。これはトップシークレットで、政府の上層部の方しか知らないという事です」

「なるほどな」

「ガールスは、苦虫を噛み潰したような顔でクロノスを睨んだ。その時彼は、若い女のメカニックがクロノスの近くで作業しているのに気づいた。

「あの女は？」

「ガールスが尋ねると、アバスもそのメカニックを見て、

「ああ、彼女はクロノス専属のメカニックです」

と答えた。ガールスは眉をひそめて、

「クロノス専属だと？」

「彼女は、例のクロノス事件で、クロノスに搭乗した四人の一人なんです」

「アバスが説明すると、ガールスはニヤリとして、
「そういうことか」

と納得顔で頷いた。

そのメカニック——言うまでもなく、ロベルトの恋人であるシェリー・キモトである——は、油まみれのつなぎを着て、顔を黒くしながらクロノスの整備をしていた。五年前はただ生意気そうな女子高生だった彼女も、高校を卒業後すぐに軍の技術専門学校に入学した。そしてそこで三年間技術を勉強して、その経験と感性を買われ、一年前にクロノス専属のメカニックに任命され、今日までクロノスの整備を全て任されていた。メカを扱うので、自慢の赤い髪のをショートカットにし、化粧もほとんどしていない。つなぎの上からわかる抜群のプロポーシヨンがなければ、一見美少年に間違えられそうである。

「シェリー、ちょっと来てくれ」

アバスが声をかけたので、シェリーは手を休めてアバスの方に歩き出した。

「あの女、フリーか？」

ガールズが言うと、アバスは、

「いいえ。軍に恋人がいます。憲兵隊の隊員です」

と呆れ気味に答えた。ガールズはそれでも、

「そうか」

と嬉しそうに言った。

「何でしょうか、社長？」

シェリーは手袋を外して、尻のポケットに押し込みながら尋ねた。

アバスはチラッとガールズを見て、

「こちらは、共和国軍司令長官のダス・ガールズ様だ」

と言った。シェリーはハツとして敬礼し、

「し、失礼しました！」

と応えた。ガールズはフツと笑って、

「そうかしこまらなくてもいい。お前の名前を教えろ」

「シェリー・キモトであります」

シェリーは敬礼したまま答えた。ガールズは真顔になって、

「所属は？」

「共和国軍技術部であります。現在はアド産業に出向中でありま
す」

「そうか。ご苦労」

ガールスはアバスに目を向けてから、

「急用を思い出した。私はこのままニューホンコンの支部に向かう」
「はア」

アバスは気の抜けたような返事をした。ガールスはシェリーを見
てニヤリとし、歩いて行った。

「どうされたのですか、長官は？」

シェリーはガールスを見送りながらアバスに尋ねた。アバスはシ
エリーを見て、

「好色の虫が騒ぎ出したのさ。君もそのつなぎを脱がせんように
気をつけたまえ」

「えっ？」

シェリーはキョトンとしてアバスを見た。

第十二章 滅亡への序章

「お前も帰ってしまうのか？」

カシエリーナは昼食を終えてしばらく歓談した後、ロイとエリザベスが暇を告げたので、便乗してアパートに戻る事にした。それに対して、シノンが言った言葉だ。

「しばらくここにいたいけど、やっぱり式典には出ておきたいの。今夜の便で立って、月に行くわ」

「と言うより、レージンが恋しいんだろう？」

シノンがにやけて言うのと、カシエリーナは舌を出して、

「ま、本音はそうかもね。でも式典では私も祝辞を頼まれているから、欠席するわけにはいかないのよ」

「そうか。まア、式典が終わったらまた来い。それまでにはマーン君のことも、何かわかるだろうから」

「ええ。何かわかったら、すぐに連絡ちょうだいね」

カシエリーナはシノンとお別れのキスをして、玄関を出た。ロイはそれを羨ましそうに見ていたのをエリザベスに気づかれ、思い切り脇腹を抓られた。

「ロイ、エリー、また遊びに来てね」

エプロン姿のテミスが現れて言った。ロイはテミスを見てニッコリし、

「ああ、また来るよ。あんなうまい料理、久しぶりに食ったからな」

「それ、どういう意味？」

エリザベスがムツとして詰め寄った。ロイはまずい、という顔で口を手で押さえた。テミスは笑って、

「ほらほら、もう揉めないで」

と仲裁し、話をそらそうとも思っただのかエリザベスに、

「そう言えば、シェリーはどうしているか、知ってる？」

と尋ねた。エリザベスは唐突な質問に一瞬キョトンとしたが、

「ああ、シェリーなら、ニューホンコンの軍需工場に行っているみたいよ。何をしているのかは秘密だって、言ってたわ」

「そうなんだ。ロベルトはニュートウキョウだし……。昔の友達は、みんな遠くか。何か、寂しいな」

テミスはしみりとした口調で言った。するとロイが、

「ああ！ 思い出したぞ、テミス！ さっき俺が謝ったの、撤回だ」と言った。テミスはビクツとして、

「な、何が？」

とロイを見た。エリザベスもカシェリーナも、シノンまでもがロイを見た。ロイはテミスを睨みつけて、

「お前、ロベルトにも結婚してくれって言ったんだってな。ロベルトに聞いたの、今思い出したぞ」

「えっ？」

今度はテミスが焦る番だった。エリザベスが呆れて、

「テミス、貴女ねエ……」

「ハハハ」

テミスは笑って誤摩化そうとした。ロイも呆れ気味に、

「今更そんなこと言ってみても仕方ないよな。まア、これでおあいこだからいいとするか」

と言った。

レージンはロベルトを誘って、コペルニクススクレータの端にある、酒場のバーにいた。

「遠慮せずに飲め。今日は俺のおごりだ」

レージンは運ばれて来たビールの大ジョッキを前にして言った。

ロベルトは恐縮しながら、

「はい」

と応じ、ジョッキを手に取るとビールを飲んだ。レージンはそれを見ながらジョッキを持ち、グツと一息にビールを飲み干した。

「少しは羽目を外せ、ロベルト。そう真面目では、肩が凝るだろう」

？」

「はア。しかし、あいつに比べると、ホントに怖いんです」

ロベルトは溜息混じりに言った。レージンは二杯目を注文してから、

「そう言えば、お前の彼女は何をしているんだ？」

「軍の技術部で、メカニックをやってます。クロノス事件以来、すっかりメカの虜になってしまってます」

ロベルトは頂垂れて言った。レージンは笑って、

「なるほど。じゃあ何かすれば、すぐに彼女の耳に入っちゃまうってことか」

「ええ。それでなくても、あいつは地獄耳ですから」

「まア、それだけ愛されているってことさ。喜ばしいじゃないか」

レージンは二杯目をあおりながら、無責任なことを言った。ロベルトはそんなレージンをチラッと見てから、またフーツと溜息を吐いて、

「そんなもんですかねエ……」

と呟くように言った。彼は、自分の恋人がガールズに目をつけられて、身体を狙われているなどは、夢にも思っていなかった。

リノスは車椅子の男の後について、広間の隅にあるエレベーターの前に行った。

「このエレベーターで降りた、地下五十メートルの格納庫に、デアネイラがあります」

サングラスの男が言った。リノスは後ろに立っている二人の大男を気にしながら、

「なるほど」

と応えた。車椅子の男は、軋むような息をしているだけで、何も喋らなかった。

やがてリノスは、デアネイラがある格納庫へと降りて行った。

「これは……」

エレベーターの扉が開き、目の前に広がった場所は、ニューホンコンのアバスの工場並みの広さがあり、そのほぼ中央に、クロノスより二周りは大きいと思われる、ディアネイラがあった。端的に言い表せば、五メートルを超える巨人用に造られた戦闘機という感じだった。

「すげえ……。確かにクロノスなんかよりずっと上だ……」

「参考にしたのは、クロノスに搭載されているメインコンピュータのみです。後は我々独自の技術で開発しました」

サングラスの男は車椅子を押して前に進みながら説明した。リノスはその後を追うように続いた。

「一体いつから、これほどのものの準備に取りかかったんだ？」

リノスがディアネイラを眺めながら尋ねると、サングラスの男もディアネイラを眺めて、

「核融合砲計画が失敗し、総帥の政権が倒れた時からです」

「……」

リノスは、ディズムと言う男の執念を見た思いがした。

（つくづく恐ろしい男だ……）

彼は車椅子に座っている、半分機械のような男を見た。

「中もごらんになりますか？」

サングラスの男が尋ねた。リノスはニヤリとして、

「ああ。見せてもらおうか」

と答えた。

第十三章 それぞれの思惑

バラムミア・サランドは軍司令本部に戻り、レト・アオキからの報告書に目を通していた。ここは司令長官室である。

「ガールスは何も知らんようだな」

サランドは回転椅子に座り、報告書を机の上に投げ出した。

「そのようです。何者かが月を狙っているという情報は入っていますが、それはどうやら地球共和国軍ではないようですね」

と答えたのは、ゲスの死後、情報局を解体して軍情報部に組織変更した後、局長に就任したカライス・エトルである。悪党面でいかつい身体つきだが、頭脳明晰な男だ。

「男の口が一番軽くなるのは、寝物語の時です。その時ですら、奴は何もレトに話していません。何も知らないという線が、正しいと思います」

「只の女好きというだけかも知れんがな」

サランドはニヤリとして言った。カライスもニヤリとし、

「もしそうでしたら、レトは抱かれ損ということになります」

「それも仕方なかるう。全ては祖国月連邦のためなのだ」

サランドは冷酷に言った。

「レトはどうしますか？」

カライスが真顔に戻って尋ねた。サランドはジッと報告書を見たまま、

「ガールスが怪しんでいる様子がなければ、周辺の調査を続けさせる。謎の敵の存在も気になるが、地球人共の動きも気になる」と答えた。カライスは黙って頷いた。

一方パイア・ギノは、リノス・リマウらしき人物を乗せたリムジンが、ニューホンコンを走っているのを目撃したという情報を入力し、色めき立った。

「リノスが動き出したか。地球政府や軍が情報部を使って探らせていたのに、全く行方がわからなかったリノスが、一体何のためにどこに行ったのか……」

パイアは手にしたグラスのワインを一気に飲み干すと、

「ディズムの影武者らしき人物も、ニューホンコンで見かけられている。臭いね」

そして、

「何人が使って、ニューホンコンを探らせな。とんでもないことが起こっているような気がする」

と近くに控えていた幹部の女に言った。その女は、

「はい、首領」

と言うと、部屋を出て行った。パイアは、

「ダウ・バフ・マーンが姿を消したという話も聞いた。キナ臭いね、全く」

と言い、ソファに身を沈めた。

カシエリーナは、ロイに空港まで送ってもらい、シャトルに乗って月に向かっていった。

「先生……」

ロイ達と空港に向かっている間は、マーンの事を考えないようにしていたのだが、一人になって、音のない宇宙空間まで出て来るとマーンの事が頭から離れなくなってしまった。

（何があつたのですか？ ご無事なんですか？）

カシエリーナは祈るような気持ちで、マーンの事を考えた。

ロイとエリザベスは、結局どこへ行く事もなく、レンタカーを返し、大学に行った。

「そう言えば、テミスは今日休んだのかしら？」

エリザベスが法学部棟のロビーに入ったところで言った。ロイは、「さアね。あいつはゼミ以外で見かけた事がないからな。今日はゼミ

「三はないし」

「そうかア」

エリザベスは何か考え込むように顎に手を当てていたが、

「取り敢えず、クストスに会って、ノートを見せてもらいましょう」

ロイは頷いて、

「そうだな。あいつ、お前に気があるからな。きっと一生懸命ノートをとってくれたと思うよ」

と冷やかすように言っていると、エリザベスはツンとして、

「クストスは貴方と違って真面目な人だから、きちんとノートをとっているのよ」

「何だよ、その言い方は？」

ロイがムツとしてそう言った時、その話題の人であるクストスが現れた。度の強い眼鏡をかけた、長身痩躯の男である。

「相変わらず、仲がいいね、二人共」

クストスはニコニコしながら言った。エリザベスもニコリして、「ごめんなさいね、クストス。ロイが変な事頼んじやって」

「いや、いいんだよ。君達だけじゃなくて、他に何人もノートをコピーしたがっている連中がいるんだ。二人の分は、ついでだよ」

クストスは、エリザベスの顔をまともに見られず、俯いて答えた。

ロイが、

「ついででも何でもいいよ。早いとこ、ノートを貸してくれ。民法三部は、特によくわからないんだ」

と言うと、エリザベスはキツとしてロイを睨み、

「クストスにお礼くらい言いなさいよ、ロイ！」

「はいはい、ありがとな、クストス」

ロイは投げやりな言い方をした。エリザベスはクストスを見て、「ごめんなさい。この人、こういう言い方しかできないのよ。悪く思わないでね」

「わ、悪くなんか思ったりしないよ」

クストスはエリザベスの顔が間近にあるので真っ赤になりながら

言った。ロイはそんな二人のやり取りを、ムスツとした顔で見
てい

第十四章 動き出した魔物

その頃シェリーは、クロノスの改造を一段落させ、帰途についていた。

（ロベルトは月へ行くって言うてたな。もう何ヶ月会っていないんだろう？）

彼女はロードスターを運転していた。ショートヘアが風で激しく揺れている。着替えた黒皮のミニスカートから出ている黒いストッキングを履いた綺麗な脚は、ギョツとするような角度で広がっており、アクセルを踏む右足はそのままだったが、左足はフットレストに載っていて、カーコンポから流れる音楽に合わせて、リズムを取っていた。

（お互いの仕事を尊重し合っていたら、すっかり離れ離れになっちゃったな）

シェリーのロードスターは工場の敷地を出て、ニューホンコンの街中に入って行った。

「おっ？」

彼女はガールスが女と歩いているのに気づいた。ガールスはパステルカラーのスーツに着替えており、隣にいる女は、シースルーのワンピースを着ていた。ほとんど下着が見えた状態である。

（アバス社長が言った通りだ。とんでもないスケベ親父だね）
シェリーはガールスを無視して交差点を左に曲がり、アパートに向かった。

その当のガールスと言うと、レトと夕食を食べるために、ニューホンコン最高のレストランである、「香港楼」に向かっていた。道行く人は、二人の歳の差に気づいていたが、誰も気に留める者はいない。それもそのはず。ニューホンコンの夫婦の四分の一が、十五歳以上歳の離れた夫婦なのだ。富める都市が必然的に生み出す、「自然の摂理」なのだろうか？

「私はあまりチュウカは食べた事がないのだがな」

ガールスは少し嫌悪感を露にして言った。しかしレトはニコニコして、

「私はチュウカが大好きよ。四千年以上も伝えられている料理ですもの。奥が深いんだから」

と言った。彼女のチュウカ好きは本当だ。ガールスとの接触をニユーホンコンに指定したのは、レトの発案である。彼女にとって、この最低最悪の任務の仲で、唯一の楽しみがこのチュウカだったのだ。「そうか」

ガールスはレトを見てニヤリとし、腰に回した手でワンピースの上からそのふくよかなヒップを触った。

「他人^{ひと}が見てるわ」

「かまわんさ」

そんな会話を交わしながら、宵闇迫る中を二人は「香港楼」に入って行った。

そして何事もなく日は過ぎて行き、コペルニクスクレータの復興記念式典の当日の朝を迎えた。

「うつ……」

レージンはベッドの中で、カーテンの間から射し込む人工光に気づき、目を覚ました。

「もう朝か。どうも月にいると、時間の感覚が狂うな」

レージンは起き出し、隣で眠っているカシエリーナを見た。そして、

「朝だぞ、カシエリーナ」

とおはようのキスをした。カシエリーナはびっくりして起き上がり、「お、おはよう。早いね」

と眠そうな目でレージンを見た。レージンは全裸のままベッドから出て、

「さてと、夕べの汗を流すか」

と言いながら、バスルームに入って行った。その言葉を聞いて赤くなったカシエリーナは、

「もう、バカなんだから」

と呟き、シーツを身体に巻きつけ、ベッドから抜け出した。

「今日俺は八時に会場入りだ。君は十時だろ？ もう少し寝ているよ」

バスルームからレージンの声がした。カシエリーナはムツとして、
「貴方が起こしたんでしょ！」

と言い返した。レージンの笑い声がバスルームから響いて来た。

パイアは朝早く起こされたので機嫌が悪かったが、非常に重大な情報だったので、部下を怒鳴りつける事はなかった。彼女はナイトガウンを直に羽織り、ブラシで髪をとかしながら、

「月に近づくもの？ 地球のシャトルじゃないのか？」

「いえ、この時刻にシャトルは来ません。それに、その飛行物体は、対レーダーコートがされています」

「対レーダーコート？ 何者なんだい？」

「わかりません。地球の軍のものかと思い、照合しましたが、合致するものがありませんでした」

「……」

パイアは腕組みをした。彼女達の技術には対レーダーコートを凌ぐ索敵方法がある。宇宙線を利用したもので、対レーダーコートをしてあっても、その物体を捉える事ができるのだ。

（このこと、リノスの事や、マーンのことと何か関係あるのか？）

パイアはしばらく思索していたが、

「テス呼んで。何か知っているかも知れない」

「はい」

部下は答え、部屋を出て行った。パイアは眉間に皺を寄せて、

「何だ？ 何が起ころうとしているんだ？」

と呟いた。

コペルニクススクレータのメインストリートを、地球共和国評議会議長の乗るリムジンが疾走していた。

「クロノスの準備はどうだ？」

後部座席と運転席の間の仕切りが上がり切るのを待つて、議長は尋ねた。彼はディズム政権下で評議会の執行委員を務めていた男で、反政府軍のリーダーによって追放されていたが、一年前の議長選でアバスの資金と票田をバックにして、議長になった男である。陰険で狡賢い性格が、顔と、その三段腹ににじみ出ている。

「はい。ご命令があれば、いつでも発進できるようになっております」

そう答えたのは、議長の右腕であり、アバスとも繋がりを持つ、筆頭秘書官である。金縁の眼鏡をかけ、髪をポマードでベツトリと固めており、口ひげが嫌らしい口の上に海苔のように張りついている男である。

「五年前、私達は反乱軍に追放され、クロノス計画は挫折してしまった。しかしまたこうしてチャンスが巡って来たのだ。今度こそ、月は地球の属州に成り果てる」

議長はニヤリとして言った。秘書官はフツと笑って、

「五年前、ゲスが殺された後、大統領になったあの男は相当なボンクラです。我々の計画など、全く気づいていないでしょう」

と言った。議長は目を細めて、

「何にしても、式典が終わり次第、ここを発つぞ。クロノスの攻撃開始は、コペルニクススクレータ時間の午後四時だ」

「はい」

リムジンは会場の入り口に差しかかり、門が開くのを待つてから、再び走り始めた。

第十五章 二つのモンスター

シェリーは工場に着くと、クロノスが工場端の滑走路に移されている事に気づいた。

「テスト飛行でもするのかな？」

彼女はいつものようにクロノスの整備を進めようと思っていたので、少し面食らっていた。

（ 妙な話だ。使いもしないのに、何で改造なんかするんだ？ ）
クロノスの改造を命じられた日のことをシェリーは思い出していた。今になっても大いに疑問なのだ。

「クロノスが動かされたようだな」

シェリーに後ろに、軍服姿のガールスが不意に立った。シェリーはビクツとして振り返り、

「あつ、おはようございます、長官」

と敬礼した。ガールスはそれには答えず、クロノスを見たままで、
「クロノスの改造の件、軍のどこからも指令は出ていない。何故お前はクロノスを改造している？」

と尋ねた。シェリーは手を戻して、

「それはわかりません。しかし、軍の指令ではないことは知っていました」

「ほオ。では、どこの指令を受けて改造していたのだ？」

ガールスはシェリーを見た。シェリーは首を横に振り、

「それはわかりません。軍ではない、ということを知っているだけです」

「妙な話だな」

ガールスは再びクロノスを見た。シェリーもクロノスを見て、

「はい」

と応じた。

テセウスは中央の入り江の邸の自分の部屋でコンピュータを操作していたが、テレビ電話のアクセスを知らせるメッセージが出たので、切り替えた。モニターに、映ったのはパイアだった。

「パイア」

テセウスはニツコリ笑って言った。

「今、大丈夫？」

パイアは警戒するような声で尋ねた。テセウスは頷いて、

「大丈夫。母は出かけているよ。どうしたの？」

「実はね、今、月に正体不明の飛行物体が接近しているのよ」

「正体不明の？ ということ？」

テセウスは眉をひそめた。パイアは真顔で、

「貴方なら、軍や政府のコンピュータにもアクセスできるでしょ？」

何か掴めない？」

「うーん。できるけど……。どうするのさ？」

「これは私の勘なんだけど、とても恐ろしい事が起こる気がするのよ。五年前みたいなの……」

パイアが言うと、テセウスはギクリとした。彼はパイアと地球から月に戻る途中で、宇宙船の横をかすめた、核融合砲の事を思い出した。

「わかった。調べてみるよ。パイアもその飛行物体のこと、もっと詳しく調べてみてよ」

「了解。愛してるわ」

「僕もだよ」

パイアは投げキスをして、消えた。テセウスは満足そうに微笑んで、すぐにキーボードを叩き始めた。

ナターシャは、あの日以来ずっと、シノンの家にいる。テミスとはすっかり打ち解けて、少しは明るさを取り戻していた。シノンもそんなナターシャを見て安心していましたが、一方で彼を不安にする情報を手に入っていた。

（タベ、あのバカ議長の秘書官のコンピュータから探り出したクロノス計画というファイル。暗号化されていたので、中身はわからなかったが、あれは一体……）

シノンにも議長がクロノスを使って月を地球の属州にしようとしているなど、想像することができなかった。

「まさかあの議長、ディズムのやり残した事を続けるつもりじゃないだろうな」

シノンはコンピュータのキーボードに手をかけたまま考え込んだ。

「クロノスが動き出したそうだな？」

広間で、車椅子の男がサングラスの男に尋ねた。サングラスの男は頷いて、

「そのようで。議長の命令で、極秘に進められている計画のようです。我々には筒抜けですが」

「……」

車椅子の男はそれには応えなかった。サングラスの男は、車椅子を押しながら、

「しかし、クロノス計画は全く無駄になりました。我々のディアイネイラによって」

「うむ」

車椅子の男は、キーキーと音をさせながら、頷いた。

レージン達は会場で最終点検をすませ、会場に入る招待客のチェックを始めていた。

「今のところ、不審な人物は見かけられていません」

ロベルトが報告すると、レージンは、

「そのようだな。そろそろ、議長のリムジンが到着する頃だ」

と腕時計に目をやった。ロベルトも腕時計を見た。

「来たぞ」

レージンは会場の正門にリムジンが現れたのを見た。道の両脇に

は地球共和国と月連邦の小旗を持ったたくさんの人達が並んで、リムジンを見ていた。

「まさか、この中にカロン・ギギネイのような殺し屋が潜んでいるなんてことはないですよね」

ロベルトが言うと、レージンはニヤリとして、

「まさかな。言っちゃ悪いが、あの議長も月の大統領も、殺すほどの人物ではないよ」

と答えた。ロベルトは思わず噴き出してしまった。

ガールスはクロノスが発進したので、すぐにアバスのいる工場に向かった。シェリーも彼に続いた。

「アバス！」

アバスは工場の一角で、従業員に指示しているところをガールスに見つけられ、大声で呼ばれた。

「何でしょうか？」

アバスは一体何事だ、という顔をしてガールスに近づいた。

「クロノスが発進した。一体どこへ行ったのだ？」

「クロノスが？ さア、知りません」

アバスは明らかに何か知っているのに、トボケた。ガールスはムツとして、

「ふざけるな。工場の経営者であり、軍と政府を裏で牛耳っている貴様に知らない事などないだろう？」

とアバスの襟首をねじ上げた。アバスは少し慌てた様子で、

「ちよつと待って下さい。何の事ですか？」

と尋ねた。ガールスは手を放して、

「いつまでトボケるつもりだ？ 今の議長はお前の金のおかげで当選したのだろう？ 対立候補も、お前が立てた。あの選挙は最初から茶番だった」

とアバスを睨みつけた。アバスは襟を直しながら、

「確かに力は貸しましたよ。しかし、そのこととクロノスの事と、

どう繋がるんです？」

と尋ね返した。ガールスはカチンと来たらしく、

「あの議長は五年前、ディズムの側近の一人だった。ディズムが死んだのを知り、逃げ出そうとして反乱軍に捕えられ、政府から追放された男だ。そいつが議長になって何をするかと言えば、ディズムのやり残したことを継承する事しか考えられんだろう！」

と言い放った。アバスはさすがにビクツとしたようだ。シエリーもガールスの「ディズムのやり残した事を継承する」という言葉にピクンとした。

「ではそれは一体何です？」

アバスはあくまでもシラを切った。ガールスは、

「月を滅ぼす事だ。クロノスは月に向かったのだろう？」

「……」

アバスはそれには何も答えなかった。代わりにシエリーが、

「月へ向かったんですか？　じゃあ、五年前にクロノスが行うはずだった、月の爆撃を……」

と蒼ざめて言った。ガールスはシエリーを見て、

「そうだ。この男、何を企んでいるのか知らんが、どこかでディズムとつながっているのだ。だから奴の影武者らしき人物が、ニユーホンコンで何度となく目撃されているのだ」

と言った。シエリーは目を見開いた。

（じゃあ私は、この一年、月を滅ぼそうとしている奴らの手助けをしていたの……）

「しかし、本当の黒幕は貴様ではない」

ガールスのその一言に、アバスは今度こそ本当に驚いたようだった。

「誰だ？　まさか、本当のディズムではないだろうな？」

ガールスはアバスに詰め寄った。アバスの額から汗が噴き出した。そのアバスの額に十字線が重なった。

「そ、それは……」

アバスがそう言いかけた時、銃声がし、アバスの眉間が銃弾に打ち抜かれた。

「キャアアア！」

シェリーの金切り声が響いた。アバスは頭から血を噴き出して仰向けに倒れた。ガールスが、

「伏せる！」

とシェリーを地面に倒した。しばらく静寂の時間が流れた。どうやら狙撃者はアバスの口を封じるのが仕事だったらしく、その後銃声はしなかった。やがて作業員達が驚きの表情でアバスの遺体に近づいて来た。ガールスは立ち上がって、

「憲兵隊に連絡しろ！」

と近くにいた作業員に怒鳴った。そして、周囲を見渡した。

（やはり、誰かがアバスを操っていたのか。一体何者だ？）

カシエリーナは紺のスリーピースを着て、胸に白いバラを着けた。ブラウスの襟は広く深く、胸の谷間が見えている。スカートの丈も短く、エリザベスがロイを仰天させたものと同じくらいだった。髪はカチューシャで留められ、前髪が少し垂れた状態。これはレージンの好みらしい。彼女は鏡を覗き込み、口紅を薄く塗って、ニッコリした。その時、バッグの中の携帯が鳴った。

「はい」

カシエリーナは見た事のない番号からの着信だったので、一瞬出るのをためらったが、何か重要な連絡の気がして、出た。その相手は意外な人物であった。

「テセウス？ まア、久しぶりね。どうしたの？ よく私の携帯の番号がわかったわね」

カシエリーナが言うと、テセウスの声は、

「僕も貴女のお父上と同じで、コンピュータをいじるのが大好きなんですよ。それで、貴女の携帯の番号を調べて、連絡したんです」

「そうなの。それで、御用は何？」

カシエリーナはシノンとテセウスが並んでコンピュータを操作しているところを想像して、クスツと笑って尋ねた。時計は「9時30分」を指していた。

「実は今、月に謎の飛行物体が接近しているんです」

「謎の飛行物体？」

カシエリーナはギクツとした。テセウスの声は落ち着いた感じで、「軍や政府のコンピュータにアクセスしてみたのですが、どこその飛行物体に気づいた様子はありません」

「貴方は何故知っているの？」

カシエリーナはベッドに腰を下ろして尋ねた。

「パイア・ギノが教えてくれたんです。彼女のところには、軍のリーダーを上回る索敵システムがありますから」

「パイアさんが？」

カシエリーナは、ニュートウキョウの軍本部のロビーで会ったパイアを思い出した。派手なイメージの強い、でもとても綺麗な女性、という印象が強かった。

「何故私にそんなことを教えてくれるの？」

「パイアはその飛行物体に危険を感じたらしいんです。僕も彼女の意見に賛成です。ですから、貴女が危険に巻き込まれるのを阻止しようと思って、こうして連絡をとったんです」

カシエリーナは声を低くし、

「もしかして貴方、サードモンスタープランのことを知っているの？」

「ええ、知っています。確か、デアネイラですよ」

「そう。知っているの。だから危険だと考えたのね？」

「はい」

カシエリーナは少し考え込んでいたが、

「どうしたらいいと思う？」

「貴方のフィアンセに知らせて、対処してもらうのが一番いいですよ」

「ええ、そうね。それがいいわね」

カシエリーナはテセウスに礼を言くと、また連絡することを約束し合って携帯を切った。そして、立ち上がった。

（間に合うのかしら？）

カシエリーナは不安になった。

第十六章 二重の陰謀

レージン達は議長の一行が会場内に消えたのを確認すると、今度は会場の出入り口の警備に移った。

「隊長！」

隊員の一人が、会場の中から声をかけた。レージンはそちらに目をやり、

「何だ？」

「お電話です。カシエリーナ・ダムン先生からです」

「カシエリーナから？」

レージンは少し迷惑そうな顔をし、隊員が差し出したコードレスフォンを受け取った。

「俺だ。一体なんだ？」

レージンは横柄な言い方で尋ねたが、カシエリーナの話を聞くうちに、顔が見る見るうちに強ばった。

「本当か、それは？」

レージンは廊下の隅に移動し、話を続けた。周囲にいる憲兵隊員達は、素知らぬフリをして、レージンの声に耳を傾けていた。

「わかった」

レージンは言うと、コードレスフォンを切り、隊員に返した。そして、

「俺は連邦軍本部に行つて来る。後を頼む」

と言い、足早に会場を出て行った。ロベルト達は互いに顔を見合わせてから、走って行くレージンの後ろ姿を見送った。

「一体何があつたんだろう？」

ロベルトは呟いた。

謎の飛行物体は言うまでもなく、リノス・リマウが搭乗しているディアネイラである。

「月まであと十万キロメートルか。二時間半ほどで到達するな」
リノスは呟いた。彼は宇宙服を着込み、ディアネイラを操縦していた。

（クロノスは最低でも二人いないと操縦できなかったが、こいつはそのクロノスの欠点を全てクリアしている。破壊力だけじゃなく、操縦性能でも、クロノスより数段上だな）

リノスは前方に見える月を見据えた。

「まず最初は小手調べにコペルニクスクレータの外に威嚇攻撃をしろと言っていたな。回りくどいやり方だが、仕方ないか」

ディアネイラは、月に向かって時速四万キロメートルで飛行している。一秒間に十一キロメートルという、想像を絶するスピードである。しかし、それほどの速度でも、月まであと二時間半かかる。地球と月との距離は三十八万キロメートルだから、ディアネイラでも、九時間半かかる計算になる。しかしそれは決して月の人々にとって長い時間ではなかった。

シノンはカシエリーナからの電話を受け、その内容に驚愕していた。そしてすぐさまコンピュータを使って、地球各地の情報収集を始めた。

「軍や政府が気づいている様子はない。クロノスが月に向かったらしいことはわかってるが、時間的に違うものだ」

シノンはテミスを入れてくれたコーヒーを飲みながら、キーボードを叩き続けた。テミスは心配そうにディスプレイを見ていた。

「どこかで誰かが目撃していないか、インターネットの掲示板を使って、あちこちに照会してみるか」

シノンはカップを置き、両手でキーボードを叩き始めた。

「一体何が起こっているんです、教授？」

テミスが尋ねると、シノンはディスプレイを見たまま、

「カシエリーナは、サードモンスタープランが動き出したんじゃないかと言っていたがな。もしかすると、それが正解かも知れん」

と答えた。テミスは思わず身震いした。

宇宙でそんな一大事が起こっているなどとは全く思っていないロイは、いつも通り、ガイア大学に行っていた。彼はエリザベスとロビーで合流し、教室へ向かう途中だった。

「ロイ、エリー」

その時二人にクストスが声をかけた。ロイは迷惑そうに、

「何だよ？」

と言った。しかし、クストスはニコニコして、

「シノン・ダムンで、カシエリーナ先生のお父さんの名前だよね？」

「ああ、そうだよ。それがどうしたの？」

ロイは素っ気ない。エリザベスがロイをキッと睨んでからクストスに、

「何、クストス？」

と尋ねた。クストスはエリザベスとの距離があまりに近いので真っ赤になりながら、

「いや、その、シノン元教授が、インターネットの掲示板で、変な事を探ねていたんだ。これがその画面をプリントしたものなんだけどさ」

とエリザベスに差し出した。エリザベスはそれを受け取り、

「『ディアネイラを見た人は連絡を下さい シノン・ダムン』」

と読み上げた。そしてロイに目を転じた。ロイはエリザベスからそのプリントを引いたくるようにして受け取り、

「ディアネイラを見た人だって？ 一体どういうことだろう？」

「何があったのかしら？」

エリザベスが言うと、ロイは、

「こりゃ、暢気に講義なんか受けてる場合じゃないぞ。すぐにシノン教授に連絡を取ってみよう」

「ええ」

二人はロビーの端に行き、携帯でシノンに連絡を取った。クスト

スは何が何だかわからずにポカンとしていた。

ガールスは憲兵隊がアバスの遺体を担架で運んで行くのを見ていたが、

「クロノスは月に向かったに違いない。月までどのくらいかかる？」とシェリーに尋ねた。シェリーは一瞬虚を突かれたように呆然としたが、

「クロノスは宇宙では時速三万五千キロメートルで航行できます。大気圏脱出に十五分ほどかかりますから、十一時間ほどで到達するはずです」

と答えた。しかしガールスは、

「いや、そんなはずはない。クロノスはもっと速いはずだ。時速四万キロメートルは出せるはずだ」

と反論した。するとシェリーは意外なことを言い出した。

「いいえ、あのクロノスは三万五千キロメートルが限界です。あれはプロトタイプのコピーなんです。本当のクロノスは、工場の奥にあります。手つかずで」

ガールスは啞然とした。

「ど、どういうことだ、それは？」

「社長、いえ、アバスがそうしたんです。アバスはクロノスが月に向かうことを知っていたらしく、クロノスのコピーを造らせたんです。詳しい事は、私にはわかりませんが」

シェリーは肩を竦めた。ガールスは腕組みをして、

「地球政府を陰で操りながら、何故月を滅ぼす計画を邪魔するようなことをするんだ？」

と呟いた。そして、

「何にしても、アバスに操られていたのは議長だと言う事は間違いない。しかし、アバスを操っていたのが誰なのかはわからないな」と言つと、シェリーをその場に残し、憲兵隊の車に向かい、同乗して憲兵隊支部へと向かった。

（月にはロベルトがいるんだ。大丈夫かな、あいつ……）
シェリーは天空に微かに見えている月を見上げた。

その頃レト・アオキは、ガールスの軍服の勲章の一つに仕掛けた盗聴器で聞いたクロノスの一件を、電子メールで月の情報部に送信していた。ここは彼女がニューホンコンに借りているアパートである。

「それにしても……」

レトは信じられないという思いでいっぱいだった。

「コペルニクススクレータの復興記念式典に合わせて、クロノスで月を攻撃しようとするなんて……。地球人はやっぱり、月の人間とは相容れないのかしら……」

レトは虚しかった。情報部員としてはやっと任務を果たせたのだが、一人の人間として知りたくない事を知ってしまった気がしたからだ。

「何か、悲しいわ……」

レトはシェリーと同じく、窓の外にうつすらと見える月を見上げた。

第十七章 開戦

レージンは連邦軍本部に到着してすぐに事情を説明したが、なかなか信じてもらえない。あまりレージンがしつこいので、彼はロビーで待つように言われ、ソファに座っていた。

（全く、どこの世界も、お偉いさんは頭が固いんだからな）

レージンが苛々しながら待っていると、將軍らしき軍服を着た人物がゾロゾロと五人の兵士を連れて現れた。

（やっとわかってくれたようだな）

レージンはそう思って立ち上がった。その時、彼は信じられない光景を見た。兵士五人が、銃を向けたのだ。

「これは一体何のマネだ？」

レージンは將軍らしき人物に尋ねた。するとその男は、

「とばけるな。その謎の飛行物体というのは、クロノスだろう？」

地球人め、やはり月を滅ぼす準備をしていたのだな」

「何だって？」

レージンはとんでもない勘違いをされたと思った。しかし否定するだけの情報がない。

「お前は我が国の捕虜だ。議長ご一行にも、いずれこちらに来ていただく事になるう」

「……」

レージンは銃を突きつけられ、本部の奥に連行されてしまった。

ロイはエリザベスと共に、バスでシノンの邸に向かっていた。バスには二人の他に誰もいず、まるで貸し切り状態であった。ロイは座席に座りながら、

「教授の話だと、ディアネイラが月に向かっていているってことだ。それに、ニューホンコンからクロノスが月に向かったらしい」

「どうということなのかしら？」

エリザベスは隣に座って言った。ロイは腕組みをして、

「シェリーが何か知っているんじゃないかな」

「そうね。シェリーはニューホンコンの軍需工場にいるんですものね」

「とにかく教授に相談してみよう。クロノスが絡んでいるとなると、とても他人事とは思えないからな」

ロイが言うと、エリザベスは頷いた。

カシエリーナは、レージンが軍本部で捕虜になっているとも知らずに、会場近くまで来ていた。

（変ね。レージンの姿が見えない。それに、ディアネイラ接近の情報が伝わっているにしては、何の対処も見受けられない……）
カシエリーナは会場入り口に立っていたロベルトに声をかけた。

「ねエ、君」

「はい」

ロベルトは、声をかけて来た女性がカシエリーナだと気づき、赤くなつて、

「何でしょうか？」

とついつい、彼女のスラツとした脚に目をやってしまった。カシエリーナはそれに気づかず、

「隊長はどうしたの？」

「た、隊長は、連邦軍本部に行くと言われて、ここを出て行かれたままです」

「戻っていないの？」

カシエリーナは眉をひそめて尋ねた。ロベルトはやっとカシエリーナの顔を見て、

「はい。自分らも探しておるのですが。連邦軍本部に問い合わせても、もう帰ったとしか言ってくれないですし」

「ええっ？」

（おかしいわね。レージンがディアネイラ接近を連邦軍に知らせ

ているのに、連邦軍が動いた様子はない。そして、レージンは行方不明。どうということなのかしら？」

カシエリーナが考え込んでいると、ロベルトが、

「隊長がどこに行つたのかわからないのも妙なのですが、我々も会場に入れなくなつたのです。そればかりか、議長の車にも監視がつけられ、議長も連邦軍の兵士に連行されるように会場に入つて行きました」

「そう……」

カシエリーナは嫌な予感がした。

（まさか、ディアネイラが接近しているのは地球政府の差し金だと思われたの？）

コペルニクスクレータの外周部にある軍事基地から、十隻の戦艦クラスの艦が発進し、クロノス撃墜作戦を展開しつつあつた。

「相手はたつた一隻ではあるが、月の絶滅を目的に造られた化け物だ。心してかれよ」

艦隊の旗艦であるポルピュリオンのブリッジで、命令を下している男がいた。エウロス・パレと言う、無骨な感じのする大男の軍人である。その厳めしい顔の半分くらいを埋めている黒い髭が、彼のトレードマークだ。

（月と地球は、一体いつになつたらわかり合えるんだろうか……。なア、親父）

エウロスは心の中でそう思った。

「クロノス迎撃のため、月の艦隊が動き出した模様です」

サングラスの男が、車椅子の男に言つた。車椅子の男は、キーキーと息をしながら、

「ディアネイラは無敵だ。何も心配はいらぬ……」

と答えた。サングラスの男は黙つて頷いた。車椅子の男は首を少し右に傾けて、

「そろそろあれの準備をさせる。コペルニクスレータを壊滅させた後に、地球だけでなく、月の各都市にも映像を流す……」
「はっ」

サングラスの男は一礼し、その場を離れた。

「ディアネイラ？ 何、それは？」

パイアはテセウスからの連絡を受けていた。コンピュータのディスプレイに映ったテセウスは、

「スキュラ、クロノスに次ぐ、第三の化け物のことだよ。月を壊滅させるために造られた、巨大な戦闘機なんだ」

「そんなものが、月に向かっていているっていうの？」

パイアはソファから立ち上がった。テセウスはパイアを見上げて、
「まだディアネイラと決まったわけじゃないよ。でも、地球共和国軍のものでないとすれば、その可能性は高いけどね」

「ニューホンコンにいる部下にいろいろと探らせているけど、クロノスが月に向かったっていう情報くらいしか入っていないし……どうする、テス？」

パイアはテセウスを見た。テセウスは考え込んでいたが、

「パニックを引き起こすかも知れないけれど、コペルニクスレータに避難勧告を出そう。このままじゃ、連邦国民二千万万人の命が危ないよ」

「それはもう軍がやっているらしいよ。クロノスが接近しているっていう情報が入っているからね」

パイアは答えた。しかしテセウスは、

「いや、記念式典は続行するつもりらしいし、軍は本気で国民を避難させるつもりはないよ」

「かも知れないわね」

パイアは、そんなことは私の知った事ではない、という顔でソファに身を沈めた。

「クロノスが来ると思っているからだよ。確かにクロノスなら、今

の連邦軍の戦力で十分かも知れない。しかし、実際にあともう少しで月に到達するのは、デアネイラかも知れないんだよ」

テセウスはパイアの冷たい態度に憤然として言った。パイアはテセウスのそんな顔を見てフツと笑い、

「わかったわよ。避難勧告を出しなさい。私んとこの望遠鏡で捉えた、デアネイラとかの写真をメールで送るわ。それを使ってうまくやれば」

「ありがとう、パイア」

テセウスは本当に嬉しそうに笑った。パイアは照れ臭くなってニコツとした。

第十八章 悪魔接近

会場の主賓席に座った地球共和国評議会議長は、不服そうな顔をしていた。

（ 妙だ。急に月の連中、物々しい警備をし始めた。情報が漏れたのか？ ）

議長の顔は汗ばんでいた。秘書官は兵士に連行され、軍本部に軟禁されているらしい。

（ 予定変更だ。何とかしなければ、生きて帰れんかも知れん ）
議長は周囲を見渡した。彼は同じく主賓席に座っているカシエリーナに気づき、立ち上がって彼女に近づいた。

「ダムン先生ですな？」

カシエリーナは、不意に後ろから声をかけられたので、ギクツとして振り返った。

「は、はい。そうですね。閣下、何か？」

カシエリーナは立ち上がった。議長はカシエリーナのいい匂いのする耳元に顔を近づけて、

「コペルニクススクレータにクロノスが向かっている。あと半日でここは壊滅する。できるだけ早く発つ事です」

と囁いた。カシエリーナはハッとして議長の顔を見た。

「クロノスが？ デイアネイラではないのですか？」

「デ、デイアネイラ？」

今度は議長が驚く番だった。カシエリーナは、
「そうです。私、デイアネイラらしき飛行物体が、あと一時間半ほどで月に到達するという情報を入手したんです」

「一時間半？ 六時間半の間違いではないのか？」

「いいえ。あと、一時間半です」

カシエリーナのキツパリとした物言いに、議長はカシエリーナが言っているのがクロノスの事ではないのをはっきりと悟った。

「では、クロノスより先に、この月に向かっているものがあるところ……？」

議長は蒼くなった。彼もディズムの側近だった男だ。ディアネイラプランのことは、少しは知っていた。その破壊力はまさしくメガトン級なのである。コペルニクスクレータのドームが破壊されるどころか、クレータそのものが消滅してしまうかも知れないのだ。

「もしその情報が正しいのなら、一刻も早く逃げるべきだ。クレータそのものが、なくなってしまうかも知れない」

議長はカシエリーナに言った。その時ファンファーレが鳴り響き、会場の中央に敷かれた赤い絨毯の上を、警備兵に囲まれて大統領が現れた。ただ人の好いだけの老人といった感じのする男である。

「大統領が現れたという事は、月の連中、事態の深刻さに気づいていないのか」

議長は仕方なく席に戻った。カシエリーナも椅子に座り直した。

「どうしよう……」

と彼女は呟いた。

大統領は歓迎の拍手に応じながら演壇に上がり、マイクに向かった。その様子は月ばかりでなく、地球のテレビ局も中継していた。

「この良き日を迎えられた事を、大変嬉しく思っています」

大統領の演説は、その後ろにある巨大なマルチビジョンに映し出されていた。

「五年前の出来事により、コペルニクスクレータは壊滅的な打撃を受けました。しかし、連邦国民が一丸となって努力した結果、五年前以上にすばらしい都市として復興したのです」

大統領は議長を見て、

「そしてその記念の日に、かつて戦火を交えた相手国である地球共和国の評議会議長閣下をお迎えできる今のこの平和な時に、深く感謝するものであります」

と続けた。

「……」

議長は仕方なく作り笑いをして大統領に応じた。大統領は頷き、再び正面を向き、喋り出そうとした。その時である。

「皆さん、今、このコペルニクスクレータに、謎の飛行物体が接近しています」

テセウスの声が流れた。カシエリーナは顔をあげて、

「テセウスの声？ 一体……？」

議長もギョツとして上を見た。

「何だ？」

大統領はどうすればいいのかわからず、オロオロしていた。その後ろのマルチビジョンに、ディアネイラの写真が映った。

「これがその謎の飛行物体です。恐らく、地球を支配していたデイズムが計画していた最後のプランである、ディアネイラという戦闘機だと思われます」

再びテセウスの声がした。議長はその写真を見て、仰天した。

「あ、あれは……」

彼はディアネイラの設計図を見た事があった。それとそっくりだったのだ。カシエリーナもビジョンに見入っていた。

「あけが、ディアネイラ……」

まさしくその姿は、モンスターに見えた。

テセウスは電波ジャックをして、コペルニクスクレータ中のテレビとコンピュータに、この映像と音声を送り込んでいたのだ。たちまちクレータのあちこちで、パニックが起こり始めた。「デイズムが計画していた」という言葉が、人々の恐怖心を煽り立てたのだ。「この飛行物体は、あと一時間ほどで、コペルニクスクレータに到達すると思われます。皆さん、すぐにクレータから避難して下さい。一刻の猶予也没有です」

ついに会場にいる人々も我先にと逃げ始めた。大統領も警備兵に抱きかかえられるようにして会場の外へと向かった。

「しかし、一体誰がディアネイラを……」

議長が呟いたのを聞きつけて、

「閣下、何かご存じなのですね？」

カシェリーナは議長に詰め寄った。議長はビクツとして彼女を見上げた。

ロイとエリザベスはシノンの邸に到着すると、シェリーの話を話した。

「わかった。ニューホンコンに連絡を取ってみよう。シェリーと話ができれば何かわかるかも知れない」

シノンはキーボードを叩き始めた。

「マーン先生のこと何もわからないっていうのに、何でこんなことが起こるのよ」

テミスが独り言のように言った。ロイはテミスを見て、

「マーン先生のことと、デアネイラやクロノスの事、何か関係があるんじゃないか？」

「何でよ？」

テミスはムツとして言った。ロイは、

「デアネイラ計画の大本は、デイズムだぜ。マーン先生は奴の実の息子だ。何かありそうだろう？」

「何者かがデイズムの計画を継承して、マーン先生を誘拐したって事？」

テミスは尋ねた。ロイは肩を竦めて、

「そこまではわからないけどさ。でも、偶然にしちゃ、でき過ぎだろ？」

と言った。テミスはエリザベスと顔を見合わせた。

ニューホンコンの軍需工場はアバスが殺されて一時騒然となったが、やがて危険がないことがわかると、作業員はそれぞれの持ち場に戻り、作業を再開した。しかしシェリーだけはクロノスが発進してしまったので、何もする事ができず、手持ち無沙汰でいた。

（本物のクロノスがある倉庫は、ドアが電子ロックでとても開け

る事ができない。あのパスワードを知っているのは、アバスだけだった。」

シェリーがそんなことを思いながら、他の作業員の仕事をボンヤリと見ていた時、

「シェリー！」

と別の作業員が声をかけた。シェリーはハッとしてそちらに顔を向け、

「何ですか？」

「お前に電話だ。調整室のコンピュータで出てくれ」

「はい」

シェリーは、誰からだろうと思いつつ、工場の端にある調整室に向かった。

彼女は調整室に入ると、コンピュータの主電源を入れ、起動させた。やがてコンピュータは映像を映し出した。

「ロイ、エリー！ どうしたの？」

シェリーは懐かしいが、あまりにも意外な人物からの連絡に、不安がよぎった。するとエリザベスが、

「シェリー、元気そうね」

「ロベルトと会えなくて、しよげてると思ってたんだけどな」

ロイが言つと、シェリーは笑って、

「大丈夫だよ。私はそんなにロマンティストじゃないからさ」

「シェリー、久しぶりね。テミスよ」

テミスが割って入った。シェリーはビックリして、

「テミス！ 十五年ぶりかしらね。元気そうね」

「うん。シェリーもね」

エリザベスとシェリーとテミスの、取り留めもない会話がしばらく続き、ロイはうんざりしてシノンと顔を見合わせた。

「もういいだろ。そんな話をするために、電話したんじゃないんだからさ」

ロイはようやく止めに入った。シェリーはロイを見て、

「一体何？ 突然連絡をよこすなんて」

「クロノスが月に向かった事、知ってるか？」

「えっ？」

シェリーはギョツとした。

「何でそんなこと知ってるの？」

しかしロイはそれには答えずに、

「月は今パニックらしい。でもそれはクロノスのせいじゃないんだ。クロノスより先に、月に向かったものがある」

「クロノスより先に？ 何？」

シェリーは興味深そうに尋ねた。ロイは真顔で、

「ディアネイラだ。五年前、ディズムによって計画された、月を滅ぼすためのサードモンスターだ」

「ディアネイラ……。サードモンスター……」

シェリーはしばらく啞然としていた。エリザベスが、

「シェリーは軍需工場にいるんでしょ？ 何か知らない？」

「この会話、盗聴されていない？」

シェリーは唐突に尋ねた。するとシノンが顔を出して、

「大丈夫だ。盗聴はされていないよ。私はシノン・ダムン。カシエリーナの父親だ」

「わかりました。クロノスは、実は私が改造していました」

シェリーが言うと、ロイとエリザベスとテミスは、

「ええっ？」

と異口同音に叫んだ。エリザベスが、

「ど、とういうこと？」

「私も理由も知らされずに、宇宙航行用に改造するように命じられたのよ。今思うと、あれは評議会議長の指示だったようね」

「議長の？ 議長がクロノスを使って、月を攻撃するつもりだったのか？ 自分が、コペルニクスレータの復興記念式典に出席しているのに？」

ロイが尋ね返した。シェリーは首を横に振って、

「違うよ。クロノスが月に到達する頃には、議長達は専用のシャトルで地球に向かっていているさ。クロノスが月に着くまで、あと六時間以上あるんだから」

「なるほど……」

ロイは腕組みした。シェリーは、

「それよりさっきのディアネイラの話だけど、そいつが月に到達するのにあとどれくらいなの？」

「あと一時間ほどだ。月では、ディアネイラの情報を流した者がいるみたいで、住民の避難が始まっているらしい」

ロイは答えた。シェリーはロベルトの事を思い出した。

「ロベルトも月に行っているんだ。大丈夫かな？」

「大丈夫さ。あいつはこんなことくらいで、死ぬような奴じゃないよ」

ロイはウィンクしてみせた。シェリーもフツと笑って、

「そうだね。そうだよね」と言った。

「ニューホンコンでディズムの影武者らしい人物が目撃されているようだが、君は何か聞いていないかね？」

シノンが口を挟んだ。シェリーはシノンを見て、

「いいえ。ニューホンコンはスパイや殺し屋がたくさん集まっている犯罪都市ですけど、情報の交錯も多くて、まともなのがほとんどないんです」

「そうか」

シノンはがっかりしたようだった。シェリーはそんなシノンを見て少し気の毒になったのか、

「でも情報部にも親しい子がいるから、そっちで何かわかるかも知れませんか。聞いてみますよ」

と付け加えた。シノンはニコツとして、

「そ、そうかね。頼むよ」

シェリーは、

「はい」

と大きく頷いて応えた。そして、

「それから月に向かったクロノスは、私らが乗ったものとは違うんだ」

とロイを見て言った。ロイはキョトンとして、

「どういうことだ？」

エリザベスもシェリーを見た。シェリーは二人を見て、

「コピーなんだよ。本物じゃないんだ。アバスが、あつ、アバスっていうのは、工場のオーナーなんだけど、そいつが何か企んで、本物のクロノスを隠して、コピーのクロノスを改造させていたんだ」

「何でそんなことを？」

エリザベスが尋ねると、シェリーは彼女を見て、

「それはわからない。でもアバスは、ついさつき誰かに射殺されたんだ。騒ぎは納まったけど、犯人はまだ捕まっていないし……」

「ということは、アバスという男は何者かの指示でクロノスのコピーを造り、それを君に改造させ、議長を欺いた、というわけか」

シノンが言った。シェリーはシノンを見て頷き、

「そのようです。アバスの後ろに、アバスに金を出し、操っていた者がいる……。これは、ダス・ガールス長官も言っていました」

「ほオ。あのガールスがね」

シノンは感心したように言った。

第十九章 脱出

カシエリーナは議長からいろいろと聞き出そうとしたが、議長はカシエリーナから逃れるように会場の外へ向かった。

「待って！」

カシエリーナはすぐに議長を追おうとしたが、会場を逃げ惑う多くの人々に阻まれて、議長を見失ってしまった。

「キャッ！」

カシエリーナは誰かに突き飛ばされて、転びそうになった。すんでのところで、彼女はロベルトに助けられた。

「大丈夫ですか、先生？」

「あ、君……。ありがとう」

ロベルトはカシエリーナを助け起こす時、彼女の綺麗な顔が間近になり、腕に柔らかいものが当たったので、ドキッとして真っ赤になった。

「どうしたの？」

カシエリーナはロベルトが熱でもあるのかと思ったらしく、心配そうに尋ねた。ロベルトはハッと我に返り、

「い、いえ、何でもありません」

と誤摩化した。そして、

「とにかく、ここは危険です。こちらへ」

とカシエリーナの手を取って先導し、会場の外へ向かった。

コペルニクススクレータ内のパニックは次第に収拾の方向に向かっていたが、まだ何も解決したわけではなかった。

エウロス・パレ率いる連邦軍艦隊は、月から千キロメートルほどのところまで飛び立ち、クロノスを迎え撃つ準備を進めていた。

「敵の機影はまだレーダーで確認できるのか？」

エウロスはキャプテンシートに座りながら尋ねた。レーダー係が、

「まだです。恐らく、対レーダーコートを施していると思われます」
「ならば他の索敵方法で探せ。どこにいるのかわからんのでは、勝負にならん」

エウロスは髭を撫でながら命令した。するとコンピュータ係が、
「高エネルギー反応が接近して来ます！」

と叫んだ。エウロスは立ち上がって、

「敵の攻撃か？」

「我々にではありません。この方位ですと、基地にです」
「何!？」

エウロスの艦隊の左舷の彼方を、巨大な光の束が通過した。

「何だ、あれは？ あれはまるで……」

エウロスは言って息を呑んだ。

（まるで核融合砲じゃないか……）

まもなく、光の束はコペルニクススクレータの外周にある軍事基地に突き刺さり、基地を一瞬にして壊滅させた。

「何てことだ……」

エウロスは虚脱感に襲われ、シートに崩れるように座った。コンピュータ係の報告が入る。

「基地は全滅です。生存者、なし」

「……」

エウロスは歯ぎしりした。

「何てことを……。何てことをしやがる！」

エウロスは見えない敵を見ようと、外を睨んだ。

コペルニクススクレータも外周の基地の壊滅の振動が伝わり、大揺れした。

「何、この揺れは？」

カシエリーナは立ち止まって揺れに耐えながら言った。ロベルトはカシエリーナを支えながら、

「何か爆発したのかも知れませんか。ディアネイラとかの攻撃が始

まったのでしょうか？」

「かも知れないわね。急ぎましょう」

「はい」

二人は再び走り出した。周囲の人々も揺れが納まると、走り出した。

レージンは、軍本部の尋問室で連邦軍の士官に尋問されている最中に、この揺れを感じた。

「何だ？」

レージンは、月には地震はないと知っていたので、すぐにダイアネイラの攻撃であると考えた。

「何だ、この震動は？」

士官が叫んだ。レージンは士官を見て、

「俺が言った事が正しかった事がもうすぐ証明されるよ。これはダイアネイラの攻撃だ。クロノスにしては、早いだろう？」

「……」

士官はキツとしてレージンを睨んだ。その時別の士官が尋問室に入ってきた。

「何だ？」

レージンを尋問していた士官が尋ねた。入ってきた士官は、

「はい。コペルニクスクレータに、ダイアネイラと呼ばれる飛行物体らしきものが接近しているのは事実のようです。外周基地の一つが、その攻撃で壊滅しました」

と答えた。尋ねた方の士官は仰天して、

「何だと？」

レージンもびっくりしていた。

（震動は一回のものだった。それで基地一つが壊滅しただと？）

パイアも、ダイアネイラが外周基地を壊滅させた事を知らされた。
「何てことだ……」

彼女はソファから立ち上がり、

「月を荒らさせやしないよ」

と呟いて、

「出撃する。アイトウナ発進準備しろ」

と命令した。

シノンは一瞬で考えたが、

「シェリー、本物のクロノスがある格納庫は、電子ロックか？」

「はい。工場のホストコンピュータが管理しています」

シェリーが答えると、シノンはニヤリとして、

「よし、大丈夫だ。今から私がホストコンピュータにハッキングして、ロックを解除する。君はクロノスを出して、ニューペキンに向かってくれ」

「ええっ？ そんなことができるんですか？」

シェリーばかりかロイやエリザベス、テミスまでもが驚いてシノンを見た。シノンは得意そうな顔で、

「できるさ。この私を誰だと思っているのかね」

ロイ達は顔を見合わせた。シノンはシェリーに、

「事は一刻を争う。早くしないといかんぞ」

「はい。クロノスを使うのですね。ディアネイラを撃墜するために」

「そうだ。これは私の勘だが、ディアネイラは地球も攻撃すると思う。そうなる前に叩きたい」

シノンは力強く言った。ロイが、

「シェリー、うまくやれよ。俺と一緒にいられないのが残念だけだな」

「うん。大丈夫だよ、ロイ」

シェリーはウィンクした。

「本当に申し訳なかった。君の情報提供を信用しないで、私は君をスパイ呼ばわりしてしまった」

レージンを連行させた将軍が、本部のロビーでレージンに謝った。
レージンは苦笑いをして、

「まア、仕方ないですよ。それより、早くここを離れましょう。危険です」

「うむ。ありがとう」

レージンは将軍の敬礼に応じながら、

（カシエリーナ、今どうしているんだ？）

「まどろっこしいな」

リノスはコペルニクススクレータをパネルスクリーンで見ながら呟いた。

「何を考えてやがるんだ、あの車椅子の機械男は……」
彼は腕組みして、シートにもたれかかった。

（奴がデイズムなら、こんなやり方はしないはずだ。すぐにでもコペルニクススクレータを壊滅させたはず。何か裏でもあるのか？）
リノスはない知恵を絞って、いろいろと考えてみた。しかし、わからなかった。

車椅子の男は、広間で眠るようにしていた。サングラスの男が近づいて来たので、彼は顔を上げた。

「準備が整いました」

「うむ。ではリノスにコペルニクススクレータを攻撃させる。その後で、全ての放送局とインターネットサイトを電波ジャックし、例の件を実行に移す」

「はい」

車椅子の男はサングラスの男に車椅子を押させて、移動した。

シェリーは、工場の中でとりわけ奥まったところにある、特別格納庫の前にいた。彼女は腕時計を見た。10時55分である。

「あと五分か」

十一時に、シノンが工場のホストコンピュータにハッキングして、格納庫の電子ロックを開く事になっているのだ。

「誰も来ませんように」

シェリーは周囲を見回して祈った。

「シェリー・キモトは、どこだ？」

憲兵隊支部から戻ったガールスが、近くにいた作業員に尋ねた。

作業員はガールスを見て、

「奥の方へ行っみたいですよ」

と答えた。ガールスは礼も言わずに歩き出した。作業員は、ケツとガールスに唾を吐き、再び作業を開始した。

「この工場、異常だ。経営者が射殺されたのに、何一つ動じるところがない」

ガールスは周りで働く作業員を見ながら、そう呟いた。

「レージン！」

カシェリーナは連邦軍本部から出て来たレージンを見つけ、駆け寄った。レージンもカシェリーナを見て、

「カシェリーナ。無事だったか」

「ええ。彼に助けてもらったのよ」

カシェリーナはロベルトを見て言った。ロベルトはレージンに近づいて敬礼し、

「隊長もご無事で何よりであります」

と言った。レージンはロベルトを見て、

「ありがとう、ロベルト。それで、さっきの揺れはディアネイラなのか？」

「恐らく。しかしまだ確認できたわけではありません」

ロベルトは敬礼をやめて答えた。レージンはロベルトに近づき、他の連中はどうした？」

「シャトルに向かいました。我々も早く向かった方がいいかと……」

「そうだな」

レージンはカシェリーナに目配せして、ロベルトを伴い、シャトルに向かった。

第二十章 クロノス発進

シェリーは十一時になったのを確認し、格納庫の鉄扉を開いた。ギギーッとという嫌な音がして、扉はゆっくりと開き、中から間違っても香水にはしたくない臭いがして来た。

「プ……」

シェリーはハンカチを口の前に当てて後ろで結んだ。そして、中に足を踏み入れた。

（確かここは、一年前にクロノスがニューペキンから運ばれて以来、度も開けられなかったんだっけ……）

シェリーはまず格納庫内の照明を探し、スイッチを入れた。埃を被り、白くなったクロノスが浮かび上がるようにしてシェリーの視界に入った。

「動くかな？」

シェリーはクロノスに近づき、エアロックのボタンを探した。

ガールスは行く先々で、作業員にシェリーの行方を尋ね、ついに彼女がクロノスがある格納庫に行った事を突き止めた。

「クロノスを出すつもりか」

ガールスは歯ぎしりした。

「どういうことだ？ あの女も、アバスの息のかかった奴なのか。それとも議長の手先か？」

ガールスは、今の自分がディズムの下にいた時の自分と何ら変わらない、只の飾り物である事に気づいた。

「いつまでも道化を演じているつもりはない！」

ガールスは大声で言い、走り出した。周囲の作業員達がビククリして、走り去るガールスを見ていた。

「ディアネイラだけじゃなく、クロノスも月に向かっているのか？」

シャトルに向かう四駆車で、レージンはカシェリーナから議長の話を聞き、仰天していた。カシェリーナは頷き、

「議長はそう言ってたわ。その情報が月の連邦軍に流れて、貴方はスパイだと思われたわけね」

「なるほど。じゃ、あの連中がクロノスが月に向かってっているって言うってたのは、本当だったんだな」

レージンは腕組みした。運転しているロベルトが、

「でも実際に月に向かってっているのは、ディアネイラです。クロノスはまだ地球を出たくらいですよ」

と口を挟んだ。レージンは前を見据えて、

「とにかく、ここから脱出することが先決だ。急げ、ロベルト」

「はい」

ロベルトはアクセルをググツと踏み込んだ。

リノスはシートに沈み込んで、半分眠りかけていた。

「リノス、聞こえますか？」

モニターにサングラスの男が映った。リノスは右目だけ開いて、

「何だ？」

「コペルニクススクレータに接近し、砲撃して下さい。先程は出力を半分にしてもらいましたが、今度は全開で発射して下さい。それで、コペルニクススクレータは壊滅するはずです」

「わかった」

リノスは、ようやく考えていた事が実行に移せるとわかり、ニヤリとした。

シェリーはエアロックのボタンを押した。プシューツという音がして、エアロックは開いた。

「何とか動くか」

彼女が中に入ろうとした瞬間、銃声がした。シェリーはギクツとして振り向いた。

「待て。一体そのクロノスで、何をするつもりだ？」

そこには、銃を構えたガールスが立っていた。シェリーはそれでもひるまずにハンカチを取って、

「クロノスを使って、ディアネイラを落とすんです」

と答えた。ガールスは眉をひそめて、

「ディアネイラだと？ 何だ、それは？」

「今、月に攻撃を仕掛けようとしている化け物です。クロノスのさらに上に行く、破壊兵器です」

シェリーの言葉に、ガールスは色を失った。

（ディアネイラ……。思い出したぞ。ディズムが計画していたものだ。私は途中で追放されたので、詳しい事はわからんが、確かとてつもない兵器だったはず……）

シェリーは啞然としているガールスを尻目にクロノスの中に入り、エアロックを閉じた。

「はっ！」

ガールスは慌てて銃を撃ったが、対空ミサイルさえ受け付けられない本物のクロノスに、そんなものが通じるはずがない。

「メインスイッチは……これか！」

シェリーは手探りでスイッチを入れた。明かりが点き、計器類が作動した。

「さすがだ。一年も放っておいたのに、動くな。それに、私達のデータが消されてなくて良かった」

データとは、五年前、クロノスを奪取した時に登録した、ロイ達四人の指紋、声紋、網膜の毛細血管、そして掌の静脈のことだ。これがそのまま残っていたので、シェリーはクロノスに拒否される事なく、乗り込めたのだ。彼女は操縦席に座り、シートベルトを締めた。スクリーンにガールスが見えた。

「長官、下がって下さい。クロノスを発進させます」

シェリーは外部スピーカで呼びかけた。

「くそ……」

ガールスは憎らしそうな顔で後退した。クロノスはゆっくり動き出して、前回と同じく、鉄の扉をまるで飴細工のようにねじ曲げると、外へ出た。

「よし……」

シェリーはコンピュータを起動し、ポインタをクリックした。

「さすがに二人乗りを一人で動かすのは大変だな」

ディスプレイにやがてシノンが映った。その後ろにはロイとエリザベスとデミスがいる。

「うまくクロノスに辿り着けたようだな」

「ええ。でもこれからが問題です。操縦に集中すると、索敵ができません」

シェリーが言うと、シノンは得意そうな顔で、

「大丈夫。索敵とナビゲーションはこちらでやる。今クロノスのコンピュータにハッキングするから」

「はい」

クロノスは垂直上昇し、やがてニューペキンを目指して北の空に消えた。

「……」

ガールスはただ唇をかで空を見上げるだけだった。しかし彼はあることに思い当たった。

「その手があったか」

ガールスはニヤリとして、元来た道を走り出した。

コペルニクスクレータの居住民は、ほぼ完全に避難を完了した。そのクレータの上空に、肉眼でも見える高さまで、ディアネイラは接近していた。

「面白いぜ。破壊し尽くしてやるぞ」

リノスは呟き、フツと笑った。その時、索敵レーダーが敵の接近を告げた。

「何だ？ 月の艦隊か？」

リノスはリーダーが指示した方向のスクリーンを拡大投影した。
それはエウロス艦隊だった。

「やはりな。蹴散らしてやる」

リノスが言った時、再びサングラスの男が、

「その必要はありません、リノス。コペルニクススクレータの攻撃に集中して下さい。月の軍が何をしようと、デアネイラにはかすり傷一つ負わせる事はできません」

「わかったよ」

リノスは忌ま忌ましそうに答えて、主砲の操作を続けた。

「憲兵隊のシャトルだから、お前には少し過酷かも知れないが、我慢してくれ」

シャトルに乗り込む時、レージンがそう言うのと、

「大丈夫よ、私って結構頑丈なんだから」

「しかしなア。憲兵隊の奴でも、Gに耐え切れずに、失禁した奴がいたからな」

レージンはわざとカシェリーナが怖がるようなことを言った。カシェリーナはドキンとして、

「おもしろしちゃうの?」

「場合によってはな」

レージンはニヤリとした。するとロベルトが、

「それは訓練の話ですよ。実際にはそれほどのGはかかりませんから、安心して下さい」

と口を挟んだ。カシェリーナはムツとしてレージンを睨み、

「何よ、嘘つき!」

「ハハハ!」

レージンは大笑いをして、シャトルに乗り込んだ。それに続いてカシェリーナが、そしてロベルトが乗り込んだ。

ガールスは車でニューホンコンの軍支部に到着すると、すぐさま

クロノス捕獲命令を出した。

「操縦しているのは素人だ。いいか、撃墜ではないぞ。捕獲するんだ」

ガールスは戦闘機のパイロットに直接指示した。

やがてニューホンコン支部から、十機の戦闘機「ラドン」が発進した。大きさはクロノスの半分ほどだが、スピードはクロノスとさして変わらない。

「あっ……」

シェリーはレーダーに映る十個の機影に気づいた。ディスプレイのロイが、

「ニューホンコンから追撃部隊が発進したようだな」

「ええ。きつとガールスだよ」

シェリーはクロノスを発進させた時に見た、ガールスの悔しそうな顔を思い出した。

「とにかく、振り切る事だけを考えろ。対レーダーコートをしちまえば、奴らにクロノスを見つける術はないはずだ」

「了解！」

クロノスは速度を増した。

シェリーの操縦するクロノスが北へ向かっている事は、車椅子の男も知っていた。

「誰が動いている？」

車椅子の男が尋ねた。サングラスの男は、

「恐らくカシェリーナ・ダムンの父親である、シノン・ダムンでしょう。クロノスを奪ったのは、シェリー・キモト。五年前のクロノス事件の当事者の一人です」

「なるほど。面白いな」

「はい」

車椅子の男は声を出さずに笑った。サングラスの男もニヤリとしたようだった。

第二十一章 意外な黒幕

ディアネイラの先端が開き、主砲が現れた。砲身が輝き出し、エネルギーの充填が始まった。

「コペルニクススクレータもこれでおしまいだ」

リノスは主砲の発射レバーを押した。砲身の輝きが増し、光束が放たれた。

「遅かったか！」

エウロスはその光を見て、キャプテンシートから立ち上がった。

ディアネイラの放った光束は、コペルニクススクレータのドームを貫き、地面に突き刺さった。やがてスクレータ全体が白く輝き、コペルニクススクレータの内部は一瞬にして燃え尽きてしまった。

「私の、私のこの五年間は一体……」

脱出用の宇宙船からコペルニクススクレータの惨状を見ていた大統領はひどく狼狽して言った。

「次はアルフォンススです、リノス」

サングラスの男が言った。リノスはしばらくコペルニクススクレータを眺めていたが、

「了解」

と答えると、ニヤリとした。

テセウス・アスはコペルニクススクレータの都市が消失したのを知り、中央の入り江から脱出する事を考え、母であるヘルミオネを伴い、パイアのいる神酒の海のアイトウナへ宇宙船を飛ばしていた。

「貴方、まだあの女と付き合っていたの？」

少し痩せて老いた感じになったヘルミオネは美しさこそ保っていたが、疲れが見えていた。テセウスはムツとして、

「お母さんの偏見だよ。パイアはお母さんが思っているような女性じゃないよ」

「そうかしら……」

ヘルミオネは納得しかねるという表情で言った。

一方、そのパイア・ギノはアイトウナ自体を発進させる準備を急がせていた。

「ディアネイラが動き出したんだ。奴は南下を始めた。中央の入江か、アルフォンススを狙っているはず。ここへ来るより早くアイトウナを展開させないと、私ら全員ディアネイラの餌食だよ」

パイアは部下に言い、仕事をさせていた。

（テス、うまくここまで来るんだよ。何かあんたのことが本当に愛しくなって来たよ）

パイアはそう思って苦笑いをした。

「コペルニクススクレータは壊滅した。すぐに準備にかかれ」

車椅子の男が言った。サングラスの男は、

「はっ」

と応えると、立ち去った。

クロノスは全速力で飛行していたが、ガールスもバカではなかった。他の支部にも命令を出し、まさに星の数ほどの戦闘機を出撃させていた。

「前から？」

シェリーは前方にいくつかの光点を見つけた。レーダーに反応はない。ステルスタイプの戦闘機のようなだった。

「何、あれは？」

シェリーは啞然とした。肉眼で確認できるだけでも、百機はいた。恐らく実際にはその何倍もいるはずだ。

「たった一機のために、何て数で出て来るんだ……」

シェリーの額に汗が伝わった。

「レーダーから逃れるのは、何もクロノスだけじゃないんだぜ」

ステルスタイプの戦闘機ゲリユオンのパイロットの一人が呟いた。
ゲリユオンは散開し、クロノスを囲んだ。

「クロノスがどれほどの化け物であろうと、もう五年も前に造られたものだ。だが、このゲリユオンは最新型！」

ゲリユオンの攻撃が始まった。クロノスにミサイルと機銃の弾が向かった。

「やられる……？」

シエリーは思わず目を瞑ってしまった。しかしやはりクロノスは化け物だった。前方、上方、後方から、ミサイルランチャーが現れ、ミサイルを乱射した。その上信じられない機動性で、ゲリユオンの放ったミサイルを全てかわし、機銃で破壊した。そして、ゲリユオンの機銃の弾は虚しくその分厚い装甲にはね除けられてしまった。

「バカな……」

ゲリユオンのパイロット達の共通した思いだった。次の瞬間、クロノスのミサイルは数百にも分散して弾幕を張り、ゲリユオンを一機残らず撃墜した。勝敗はたった二分で決してしまった。

「……」

シエリーは何が起こったのかよくわからなかった。ロイが、

「シエリー、敵は全滅したようだ。早くニューペキン空港に向かってくれ」

「りよ、了解」

シエリーは半分呆然としたまま、応えた。

ガールスは数百機の戦闘機が一瞬にして消滅したのを知り、驚愕していた。

「まさに化け物だ……」

彼は同時にディアネイラのことを思い出した。

（ディアネイラは、クロノスの発展型。つまり、クロノス以上の破壊力を持っているのだ……）

ガールスはディアネイラが地球に來ない事を祈っている自分に氣

づいた。

カシエリーナ達の乗るシャトルは、デアネイラの攻撃が始まる直前に離脱していた。

「おや？」

シャトルの通信兵が計器を操作していて首を傾げているのにレージンが気づき、

「どうした？」

と尋ねた。通信兵はレージンを見て、

「何か強力な電波で映像が送られて来ています。地球のものでも、月のものでありません」

「映してみる」

レージンは言った。通信兵はダイヤルを回し、回線を合わせた。カシエリーナもモニターに目を向けた。

「うん？」

レージンは乱れていた画像がやがて正常になり、そこに現れた人物を見て、仰天した。

「ま、まさか……」

その人物は軍服を着ていたが、地球共和国軍の軍服ではないし、月連邦軍のものでもなかった。

「そ、そんな……」

カシエリーナは啞然としてモニターを見ていた。ロベルトも声を出さずに見入っていた。

「地球共和国並びに月連邦の国民諸君。私が本日より、両国の支配者となるダウ・バフ・マーンである」

髪を切り、オールバックにし、無精髭も綺麗に剃っており、目つきが鋭くなっていたが、その人物は紛れもなく、あのダウ・バフ・マーンであった。

「これは一体……」

シノン達もコンピュータでマーンの映像を見ていた。ロイが、

「マーン教授？ どうして？ 何だよ、これ？」

「一体どういうこと？」

エリザベスも啞然としていた。テミスも息を呑んでディスプレイを見つめていた。

「ダウ・バフ・マーンが？ デイズムではなかったのか？」

パイアもアイトウナの中で、マーンの映るモニターを見ていた。

「これは……」

彼女は眉をひそめた。

第二十二章 狂気の始まり

「月のコペルニクスレータを壊滅させたのは、我が軍が誇る最新兵器であるディアネイラだ。その破壊力については、今更語る事もあるまい」

マーンは続けた。

「どういうことだ？ ディアネイラはディズムの計画……。何故ドウ・バフ・マーンが……」

その時ようやく、ガールスはディズムとマーンが実の親子だという事を思い出した。

「そうか。ディズムが死んだ後、奴の野望をその息子が受け継いだという事か……」

ガールスは自嘲して言った。

「抵抗はやめよ。無駄な戦いは好まない」

マーンは話を続けていた。

「しかし、現在の政治体制と自治体制は全て破壊し尽くし、私の手に全ての権力を集中させる。そのため、これから地球と月の主要都市をディアネイラで壊滅させる」

「何だと？」

レージンは叫んだ。カシエリーナは目に涙を溜めたまま、何も言わない。ロベルトは唇を噛み締めていた。

「死にたくなければ、脱出する事だ。これは私の慈悲である」

マーンはフツと笑って言った。

「何を、何を言っているんですか、先生！」

カシエリーナは大声で叫んだ。

「ど、どうしてこんなことに……」

彼女は泣き崩れてしまった。レージンは悔しそうにモニターを睨み、

「それがあなたの本音なのか、マーン先生……」
と呟いた。

（ 所詮あなたは、ディズムの息子だという事か？ ）

リノスはこの映像をモニターで見て驚愕していた。

（ ダウ・バフ・マーンが黒幕だったのか。じゃあ、あの車椅子の男はディズムじゃないのか？ ）

彼は口に出して言うのを控えていた。盗聴されているのに気づいたのだ。

（ 俺は結局は操り人形ってことか ）

シェリーもまた、クロノスの中でマーンの映像をモニターで見ている。

「あの人、ダウ・バフ・マーン……。ディズムの息子……」
とシェリーは呟いた。

テセウスとヘルミオネも、宇宙船の中でマーンの放送を見ていた。
「何てことだ……。五年前、地球と月を救った人が、今度は……」
テセウスは蒼ざめて言った。ヘルミオネは何も言わずに震えていた。

（ 神よ…… ）

彼女は心の中で祈った。

「次はアルフォンススを攻撃する。早く脱出するように」

マーンがそう言うのと放送は終わり、画面は砂嵐となった。

「アルフォンススだと？ 確かそこは、ディズムの生まれ故郷のはずだ」

シノンが言った。ロイが身を乗り出して、

「一体どういう事なんです？ どうしてマーン教授が、あんな格好で、あんなことを言ってる……」

「わからん。私にも全くわからんよ」

シノンが悔しそうに答えた。

「ドウ……」

いつの間にか起きて来たのか、彼らの後ろにナターシャが立っていた。彼女はどうかやらマーンの放送を見てしまったらしかった。シノンはびつくりして振り返り、

「ナターシャ！ 見てしまったのか、今の放送を……」

と尋ねた。ロイ達もナターシャを見た。

「……」

ナターシャは心ここにあらずという顔で立っていた。シノンはデミスに目配せをした。デミスは頷いてナターシャに近づき、

「ナターシャさん、部屋に戻りましょう？」

と声をかけた。しかしナターシャは無反応だった。デミスは仕方なくナターシャを強制的に連れて行った。

「……」

シノンは無言のまま窓に近づき、空を見上げた。

（シェリー、早く来てくれ。カシェリーナ、レージン、早く戻ってくれ。手遅れにならないうちに……）

アルフォンススのドームでは、パニックが起こっていた。各宇宙港は脱出しようとする人々でこった返し、車は渋滞し、あらゆる交通機関が麻痺状態になっていた。

そんなパニック状態のドームの上に、ディアネイラが姿を現した。

「……」

リノスは、ドームの中を逃げ惑う人々の姿を目の当たりにしていた。

（俺は今何をしているんだ……？）

殺戮が生き甲斐だったはずの彼が、今はとても人を殺す気になれなくなっていた。

（一体何のためにそこまで破壊する？ 月を滅ぼすつもりがないなら、何故ドームを攻撃する？）

リノスはマーンの考えが理解できなかった。

パイアのイトウナはついに発進した。全長一キロメートルほどもある、超巨大戦艦と化したイトウナは全ての砲門を展開させ、戦闘体制を整えた。

「デアネイラは、すでにアルフォンスス上空に飛来している。ここに来られる前に、始末をつけるよ」

パイアはブリッジのキャプテンシートに座りながら言った。

「このイトウナが発進する時は、月を統べる時だと思っていたけど、逆を守るために発進する事になるとはね」

パイアはそう呟いて苦笑いした。

「テセウス・アス様の宇宙船が接近しています」

部下が報告した。パイアは正面を見据えたまま、

「収容しろ。テスとあの子の母親には、ブリッジに上がってもらいなさい」

「はっ！」

イトウナはテセウスの宇宙船を収容すると、速度を増し、アルフォンススを目指した。

「くそう。デイズムの亡霊が……」

何とかコペルニクススクレータを脱出し、専用シャトルに乗り込んだ議長は、歯ぎしりして悔しがっていた。

「私の計画を台無しにしおって！」

彼は秘書官を見て、

「クロノスはどうした？ あとどれくらいで到達するのだ？」

「あと四時間ほどです」

「……」

議長はムツとして窓の外に目をやった。

エウロス艦隊は、やっこの思いでデアネイラに追いつき、攻撃

準備をしていた。

「アルフォンススを潰させてはならない。連邦軍の名誉に賭けてもだ」

エウロスは立ち上がって指揮をとっていた。

「あの化け物がどれほど頑丈でもワンポイント攻撃をしかければ、必ず破壊できるはずだ。奴の左エンジンに全艦で狙え！」

エウロスは大声で命令した。主砲、副砲、機銃、ミサイル発射孔の全てが、ディアネイラの左エンジンに狙いを定めた。

「撃てっ！」

エウロスの号令の下、無数の光束とミサイルがディアネイラに向かった。

「ムッ？」

リノスは、エウロス艦隊の攻撃に気づいたが、回避もせずにはいた。

「うおっ！」

ディアネイラは光束とミサイルの直撃を受け、爆雲に包まれて見えなくなってしまった。

「やったか？」

エウロスは身を乗り出して前方を見た。爆雲はゆっくりと散って行き、やがてその向こうに、全く無傷のディアネイラの姿が見えて来た。

「何だと？」

エウロスは色を失った。

（何て化け物だ……。損傷していないのか、あれほどの攻撃を受けて……）

ディアネイラの後方にミサイルランチャーが現れた。それはリノスの操作によるものではなかった。

「何だ？ 勝手に武器が作動している……」

リノスは焦っていた。ディアネイラはクロノス同様、オートディフェンスシステムを搭載していた。敵に攻撃されると、パイロットの意志を待たずに反撃を開始するのだ。

「全艦、回避運動！」

エウロスはディアネイラがミサイルを掃射したのを見て、大声で叫んだ。しかし無駄だった。ディアネイラから放たれたミサイルは、三段階に広がる、多弾頭ミサイルであり、エウロス艦隊をすっかり取り囲んでしまったのだ。

「くそっ！」

エウロス艦隊は、ディアネイラの反撃で、全滅した。

（親父……。まだ当分地球と月は、わかり合えそうにないな……）
エウロスは死ぬ間際に、父であるライオス・パレが教壇で熱っぽく語っている姿を思い出した。

第二十三章 アイトウナ

「連邦軍の艦隊が、全滅したようです」

パイアは部下から報告を受けていた。彼女の傍らには、テセウスとヘルミオネが立っていた。

「連邦軍も月中から艦隊を終結させているはず。もうすぐ決戦になるね」

「パイア……」

テセウスが心配そうに声をかけた。パイアはテセウスを見てニッコリし、

「大丈夫。このアイトウナは、核の直撃でない限り、耐えられるように造られている。相手が例えディアネイラでも、やられることはないよ」

テセウスもホッとした顔で、

「そう。それなら大丈夫だね」

しかしヘルミオネは心配そうだった。

「アイトウナが動き出したようです」

サングラスの男が言うと、車椅子の男は、

「パイア・ギノか。放っておけ。あの女には何もできはしない」

と答えた。サングラスの男はかすかに頷き、去って行った。車椅子の男は天井を見上げた。

ロイ達はシノンの車でニューペキン空港に向かっていた。普段なら一時間以上かかる距離だが、マーンの放送に恐れをなした市民達が地下壕や周辺のシェルターに逃げ込んだため、交通はほとんどなく、歩行者は一人もいなかった。店も全て閉店しており、シャッターが閉められていた。

「シェリーは今、どの辺りまで来てますか？」

運転席でロイが尋ねた。後部座席でテミスと共にラップトップコンピュータを操作しているシノンは、

「まだニューナンキンだな。あと一時間ほどで来るだろう」

助手席のエリザベスは、

「ナターシャさん、大丈夫かしら？」

とテミスに尋ねた。テミスはエリザベスを見て、

「睡眠導入剤を飲ませたから、しばらくは眠っているはずよ。心配ないわ」

「それならいいんだけど」

エリザベスは空を見上げた。

ガールスはクロノス追跡を中止し、地球中の軍にディアネイラ撃滅作戦を展開するよう指示した。

「今の地球の戦力で、コペルニクススクレータを瞬時に焼き尽くすような化け物に立ち向かえるとは思えんが……」

それがガールスの本音だった。

「何をしているのです、リノス？ 早くアルフォンススを焼き払いなさい」

モニターのサングラスの男が言った。リノスはハッと我に返り、
「アルフォンススにはもう誰もいない。そんなところを攻撃して、どうするつもりだ？」

と尋ねた。サングラスの男はそれには答えず、

「命令に背くつもりですか？ ディアネイラを自爆させますよ」

「う……」

リノスは仕方なく主砲の準備をした。そして、

「一つだけ教えてくれ。この破壊活動が完了したら、俺はどうなるんだ？」

「総帥の側近として、権力の中枢に就いてもらう事になります」

「そうか……」

リノスは主砲の発射レバーを引いた。光束が放たれ、アルフォンスのドームを焼き尽くして行った。

「次は地球です」

「……」

リノスは主砲を収納すると、ディアネイラを地球に向けて発進させた。その時、振動が伝わった。

「何だ？」

リノスはレーダーを見たが、何も映っていない。

「敵か？」

また振動が伝わる。

「ディアネイラのレーダーの外から攻撃しているのか……。何て射程だ」

リノスは機体に損傷がないのを確認すると、かまわず前進した。

「ディアネイラに直撃です。しかし、損傷を与えた様子がありません」

パイアはシートに座って部下の報告を聞いていた。

「ビームコートもしているのか。多分ショックを吸収する特殊樹脂も使われているね。こいつは思ったより手強いかも」

パイアはニヤリとした。その隣のシートに、ヘルミオネと並んで座っていたテセウスが、

「ディアネイラはどうしたの？」

と尋ねた。するとパイアはパネルスクリーンに月を映し出して、

「ディアネイラはアルフォンスから月を離脱しようとしている。

月から出て行ってくれるのなら、もうこれ以上攻撃する必要もないわね」

「でも地球を攻撃するつもりなんだろう？」

テセウスは身を乗り出して言った。パイアはテセウスを見て、

「地球が攻撃されても、私には関係ないよ」

と肩を竦めた。テセウスはムッとして、

「でも今は、パイアの部下の人達も地球にいるんだろう？ 関係ないよ。助けてあげないの？」

パイアは真顔になって、

「わかったよ」

と言つと前を見て、

「これよりアイトウナはディアネイラ追撃に入る。地球に向け、発進！」

テセウスはそれを聞いてニツコリし、シートに戻った。

一方メンツを潰された形になった連邦大統領の命令で、月各地の連邦軍が艦隊を編成し、そのトップであるバラムイア・サランド率いる艦隊のところに集結しつつあった。

「我が国の中心コペルニクスレータを潰された礼は、キツチリさせてもらう」

キャプテンシートに沈み込んで、サランドは呟いた。

カシエリーナ達の乗るシャトルは、地球まであと三十万キロメートルのところに来ていた。

「隊長、地球から緊急入電です」

隊員の一人が電子メールのプリントをレージンに渡した。レージンはそれに目を通すとカシエリーナを見て、

「君の親父さんからだ」

とプリントをカシエリーナに渡した。カシエリーナはそれを受け取って読み、

「着陸場所をニューペキンに変更しろ？ ということかしら？」

「あの放送を見て、ニーストウキョウは危険だと判断したんだろう。俺も実はそう思っていた」

「じゃあ、ニューペキンに降りるのね？」

カシエリーナが尋ねると、レージンは頷いて、

「進路変更。ニューペキンに降下するぞ」

とパイロットに指示した。

シェリーの乗るクロノスは、ニューペキン空港上空に来ていた。

「さすがに人気がないな」

シェリーはクロノスを降下させながら呟いた。

「来た来た！」

ロイが滑走路へ飛び出して行った。クロノスはやがて着陸し、停止した。

「シェリー！」

エアロックを開いて出て来たシェリーに、エリザベスが抱きついた。シェリーはニッコリして、

「エリー、私、そういう趣味はないんだけど」

「もう、シェリーは！」

エリザベスもニッコリしてシェリーから離れた。シノンがロイに、「さア、クロノスに乗り込んでくれ。あとカシェリーナ達がロベルトと戻ってくれば、五年前の四人組が勢揃いするな」

と言うと、ロイは嬉しそうに、

「そうですね。四人揃うのは、久しぶりですよ」

シノンは頷いてからシェリーを見て、

「そうだ。デイズムの影武者の情報はどうだったかね？」

「情報部の子に訊いてみたんですけど、誰も知らないみたいです。警察の方も、手がかりなしのようですし……」

シェリーは残念そうに答えた。シノンは溜息混じりに、

「そうか。わからんか……」

と意気消沈して言った。

リノスは、アイトウナの他に無数の艦がディアネイラを追跡している事をリーダーで知った。

「バカな奴らだ。まだ戦うつもりか」

リノスは月連邦軍を哀れんだ。

「勝てる見込みのない戦いをするというのは、苦痛だらうな」

第二十四章 パイアとテセウス

「地球国民はパニックであろう?」

車椅子の男がサングラスの男を見上げて言った。サングラスの男は車椅子の男を見ないで前を向いたまま、

「そのようで。しかも自分達に与えられた時間が、思っているよりずっと短いとも知らずに」

「そうだな。ディアネイラは、何も一機に限ったわけではないからな」

車椅子の男は、キーキーと音をさせながら笑ったようだった。二人はエレベーターで移動中である。

「ダウの方はどうだ? 良好か?」

「はい。かなりうまくいっているようです」

「そうか」

車椅子の男は、また笑ったようだった。

アイトウナは再び、ディアネイラに攻撃を仕掛けようとしていた。「さっきのは飽くまで手を抜いた攻撃だったってことをわからせてやろうか」

パイアは実に楽しそうに言った。そして、

「主砲発射用意。目標、ディアネイラ」

と指示した。テセウスは固唾を呑んでパイアを見守っていたが、ヘルミオネは相変わらず不安そうで、パイアを見る目は疑いと警戒に満ちていた。

「準備完了。発射レバー、首領のシートに回します」

「了解」

パイアのシートの右の肘掛けに、レバーが現れた。

アイトウナの主砲は、ディアネイラの全長ほどもある巨大なもので、口径は三メートルほどあった。その砲身が輝き出し、臨界点に

達した。

「発射！」

パイアがレバーを引くと、主砲がグワオンと吠えた。巨大で強力な光束が、ディアネイラに向かった。

「何だと？」

リノスは後方から迫る高エネルギー反応に気づき、ディアネイラを回避させた。しかし思った以上に光束は大きく、そして速かった。ディアネイラは後部を直撃された。

「うわアッ！」

（バ、バカな……。ディアネイラは、この程度でやられはしないはず……。まさか！）

リノスがそこまで考えた時、操縦席が炎に包まれた。彼は死に直面して、自分が只の捨て駒だった事に気づいた。

「やったね！」

パイアは立ち上がった。ブリッジのスクリーンに、大爆発するディアネイラが映っていた。

「やった、パイア！」

テセウスは大喜びし、シートから離れてパイアに近づいた。パイアはウインクして、

「早くこの事を、カシェリーナ・ダムンに知らせて上げなさい、テス」

「うん」

テセウスは大きく頷いた。

サランドの大艦隊は、アルフォンスス上空で大爆発があったことを知った。

「何が起こった？」

ブリッジでサランドが尋ねた。通信兵が、

「ディアネイラが爆発したようです。パイア・ギノの城アイトウナが、ディアネイラを撃破したようです」

「何？　パイア・ギノの？」

サランドは眉を吊り上げた。

（あの女狐め、何か企んでいるな）

サランドはギリツと齒ざしりして、

「全艦退却する。ディアネイラが撃破されたのなら、艦隊を繰り出す必要はない」

「はっ」

サランドはパイア・ギノの今後の行動を気にしていた。

（あの女、このことを恩に着せるか、それとも……）

アイトウナと戦って勝てるのか？　サランドは不安になっていた。

「ディアネイラー1号機が爆発したようです。反応が消滅しました」

コンピュータルームのような部屋に、サングラスの男と車椅子の男はいた。車椅子の男は椅子に沈み込んで、

「そうか。予定より早く、パイア・ギノが本気になったな。あの女、アイトウナを使って、月を征服するつもりだったようだな」

「そのようです。現に月の連邦軍は、パイア・ギノの動きを警戒して基地の守備固めに入ったようです」

サングラスの男は答えた。車椅子の男は椅子から少し起き上がり、

「地球国民にも、そろそろ恐怖を味わってもらおう。ディアネイラ二号機によってな」

「はい。二号機はすでにクロノスのコピーを射程に捉えております」

「月の連中、もう一度慌てふためいてもらおうか」

車椅子の男は、低い声で笑った。

カシエリーナ達はテセウスが送ったメールを見ていた。

「パイアさんがディアネイラを撃破したの？」

レージンが読んでいるメールのプリントをカシエリーナが覗き込んで言った。レージンはカシエリーナを見て、

「らしいな。パイア・ギノって何者なんだ？」

「月の裏の世界の顔役みたいよ。詳しい事はわからないけど」

カシエリーナが答えると、レージンはプリントをロベルトに渡しながら、

「じゃあ何でテセウス・アスがその事を知っているんだ？ 彼はゲスの息子だろう？ パイア・ギノとどういう繋がりなんだ？」

「そこまで私にはわからないわよ。確か五年前、軍本部のロビーでテセウスにあった時も、彼、パイアさんと一緒だったわ」

レージンはニヤリとして、

「二人は出来てるってことか」

「まさか！ テセウスは二十二歳で、パイアさんは私達より年上のはずよ。考えられないわ」

カシエリーナは目を見開いて反論した。するとロベルトが、

「でも先生、月の友人から聞いた話じゃ、テセウス・アスがパイア・ギノに逆上^{のほ}せてるっていうのは、結構公然の秘密みたいですよ」

「ええっ？ ほ、本当なの？」

ロベルトの言葉に、カシエリーナはすっかり仰天してしまった。

そんなカシエリーナを見て、レージンとロベルトは肩を竦めた。

クロノスのコピーは月まであと八万キロメートルのところまで来ていた。操縦しているのは、特命を受けた共和国軍のエースパイロットである。彼ら二人は、ディアネイラの出現も、クロノスがコピーであることも知らないという、全くの無情報状態にいた。

「あとしばらく進めば、コペルニクススクレータを射程に捉えられる。地球と月が一つの国家に戻るまで、もうしばらくの辛抱だな」

メインパイロットが言うと、コ・パイロットは、

「そうだな。共和国に栄光あれ」

と答え、ニヤリとした。ところが突然、警報がコクピット内に響き渡った。

「何だ？ どうしたんだ？」

「レーダーに反応！ エネルギーだ。それも巨大な……」

「何？」

しかし二人のパイロットは、何一つ出来なかった。次の瞬間、クロノスのコピーは、巨大な光束の直撃を受け、燃え尽きてしまった。二人のパイロットは自分が死んで行くのを認識する間もなかったかも知れない。

アイトウナは、神酒の海を目指していた。

「何か言いたそうですね、お母さん？」

パイアが愛想よくヘルミオネに尋ねた。ヘルミオネはギクツとしたが、気を取り直して、

「貴女はテスをどうするつもりです？」

と尋ねた。テセウスはパイアに言われて、祝杯のワインをアイトウナの奥の部屋に行っていた。パイアはシートにもたれかかって、

「遊びです。気にしないで下さい」

「……！」

ヘルミオネはムツとして立ち上がった。パイアはそれを見てシートから身を起こし、

「少し前の私なら、そう言っていたでしょう。でも今は違います。テスのことは、本当に愛しています。ずっと一緒にいたいと思っています」

ヘルミオネは呆氣にとられていた。周りのパイアの部下達も素知らぬフリをして、聞き耳を立てていた。パイアは自嘲するように、「この五年、ずっと私はテスを試して来たんです。あの子が本気かどうか。あの子は本気でした。一時の気の迷いで、私のような女を好きになったのではないと、私も考えるようになったのです」

ヘルミオネは真剣な顔でパイアを見ていた。パイアは外に目をやり、

「そこまで本気になっている男に惚れられたのなら、私もそれに答えるべきだ。そう結論を出しました」

「……。ありがとう、パイアさん。テスをよろしく願います」
ヘルミオネが目を潤ませて言うと、パイアは再びニッコリして、
「いいえ。こちらこそ、よろしく願います」
と答えた。

第二十五章 地獄から還った男

ニューホンコンの軍需工場の作業員達は、振動で工場が揺れるのに気づいた。

「地震か？」

彼らは周囲を見渡した。しかし、海面は普通に波が打ち寄せているだけであるし、工場以外の建築物は全く揺れていなかった。

「何だ？ 何だよ？」

作業員達が不安がってオロオロしていると、突然中央にあった工場の一つが真ん中から二つに分かれ始めた。

「うわっ！」

床も二つに分かれ始めたので、付近にいた作業員達の何人かがその隙間に落ちてしまった。

「うわーっ！」

他の作業員達はそれを見てパニックになり、その場から逃げ出した。床はすっかり分かれて、下に大きな空洞が現れた。

「あの音、何だ？」

作業員の一人が、空洞の底から聞こえて来る音に気づいて言った。

「エンジンの音か？」

作業員達がざわついていると、その空洞の下から戦艦とも戦闘機ともつかない形の物体が浮上して来た。作業員達はそれを見て仰天した。

「何だ？」

その浮上して来た物体こそ、車椅子の男が言っていた、ディアネイラ三号機であった。

「逃げろっ！」

作業員達は一斉に逃げ出した。

ガールスは、ニューホンコンの軍支部で、アバスの工場に謎の飛

行物体が出現した事を知らされた。

「まさか……」

（ディアネイラが一機だけだと思い込んでいたのが間違いだった……。アバスが怪しいと思った時に、工場を徹底的に調査させるべきだった……。アバスは議長ではなく、デイズムと繋がっていたのだからな）

ガールスは気を取り直して、

「月を攻撃しているディアネイラより先にアバスの工場に現れた方を叩く。付近の支部に出撃させる」と命令した。

（デイズムめ。貴様は本当に死んだのか？ 今度の一件、息子のダウ・バフ・マーンが黒幕とは思えない）

レト・アオキはアパートを引き払い、ニューホンコン空港に向かうタクシーの中で、ディアネイラ3号機を目撃した。

「あれは？」

彼女にはディアネイラがまるで悪魔のように見えた。

「何なの、あれ？」

レトはタクシーを降りた。街の中は大混乱しており、渋滞が起きている。もう先に進めない状態になっていた。レトは人混みをかき分けながら、ディアネイラの方へ走った。

（月に接近していたのはディアネイラで、それはパイア・ギノによつて撃墜されたと聞いた。ではあれは何だ？ ダウ・バフ・マーンが言ったディアネイラとは、一機ではなかったということか？）

レトの額に汗が流れた。

一方ロイ達は、シノンがコンピュータで軍の情報を探り、ニューホンコンに謎の飛行物体が現れたという情報を得ていた。

「アバスの工場の下から、それは現れたようだな」

キーボードを叩きながら、シノンが言った。ロイは顎に手を当て

て、

「何でしょうか？」

「わからん。しかしタイミングから考えると、別のデアネイラだな」

シノン hands 手を休めて答えた。ロイはシェリーを見て、

「アバスが造らせていたのか？」

「わからないわ。少なくとも、私の知る限りでは工場の下にそんなものがあるなんて、誰も知らなかったと思うよ」

シェリーは答えた。ロイはシノンを見て、

「マーン先生が造らせたんでしょうか？」

「違うな。私はさっきからマーン君の放送の事が気になっていたんだがな」

シノンはコンピュータから顔を上げてロイを見た。そして、

「もしマーン君が全ての黒幕だとすれば、時間が足りない。彼が姿を消したのは、まだ一週間前だ。しかしニューホンコンに現れた飛行物体は、とても一週間で造れるようなものじゃない。それにマーン君は、ここ何年もの間、ニューペキンを離れていない」

ロイはエリザベスと顔を見合わせた。シノンは腕組みをして、

「それから、銀行のホストコンピュータにアクセスして、マーン君の口座を調べた。この五年で、彼の口座には、多くの著書の印税と講演料が振り込まれていて億を超える額になっていた。ところが、一年ほど前を皮切りに、その金のほとんどが引き出されている」

「ええっ？」

ロイとエリザベス、そしてシェリーとテミスが同時に叫んだ。シノンは続けた。

「最初に巨額が引き出された日と、アバス・アドがニューホンコンの工場を購入した日が一致している」

「ど、どういうことです？」

ロイは身を乗り出して尋ねた。シノンは、

「何者かがマーン君の口座から不正に金を引き出し、アバスにニユ

「ホンコンの工場を買わせた、と考えている」

「……」

ロイ達は、シノンの大胆な仮説に言葉を失った。

「その何者かとは？」

しばらくして、ようやくロイが口を開いた。シノンはロイに目をやり、

「ベン・ドム・ディズムだ」

「！」

ロイ達は顔を見合わせ、再びシノンを見た。シノンは、

「ディズムは死んだはずだ、と言いたそうだね？」

「ええ。五年前、ディズムは核融合砲基地で爆死したはずです」

シェリーが口を挟んだ。シノンはシェリーを見て、

「しかしディズムの影武者のうち四人が姿をくらまして、今の時点でも発見されていない」

エリザベスが恐る恐る、

「じゃあディズム総帥の影武者と思われる人物の中に、実は本物がいるということですか？」

「多分ね。エリー、これは君がカシェリーナに言った事だよ」

シノンが言うと、エリザベスは赤くなって、

「そ、そうでしたね」

と答えた。

パイアは再びディアネイラらしき飛行物体が月に向かっていているのを知り、慌てていた。

「ディアネイラは一機だけじゃなかったのか」

彼女はシートに座り、腕を組んだ。

「やはり黒幕はディズム……。マーンは操り人形と考えるのが正しいね」

テセウスとヘルミオネは、パイアを見ていた。パイアはその視線に気づき、

「とにかく、デアネイラが何機現れようと、このアイトウナが全て撃墜します」

ヘルミオネは黙って頷いたが、テセウスは、

「無理しないでよ、パイア」

「わかってるわよ、テス」

パイアはウインクして答えた。しかし彼女は内心焦っていた。

（デイズムという男は、常に決め手を最後まで隠していた男。もしこの一連の事件が、奴の仕業なら、さっきのようなわけにはいかない）

車椅子の男とサングラスの男は、デアネイラ三号機のブリッジにいた。デアネイラ三号機は、戦闘機と言うより、やはり戦艦と言う方がふさわしい大きさだった。全長は五十メートル近くあり、全高は二十メートルはあった。

「手始めにニューホンコンを焼き払え。地球の連中に抵抗する気をなくさせろ」

車椅子の男が命令した。

「了解」

ブリッジの前寄りの席にいる乗員の一人が応えた。サングラスの男はキャプテンシートに座っており、車椅子の男はその前に車椅子を固定して座っていた。

デアネイラは急速上昇した。たちまちニューホンコンの街並の全てが見える高さになった。デアネイラの前方が開き、主砲が現れた。

「撃てっ！」

車椅子の男が命令した。乗員が発射レバーを引いた。

「発射！」

主砲が唸った。巨大な光束が放たれ、ニューホンコンのビル街に突き刺さった。次の瞬間、光が強く輝き、周囲のビルが次々に焼失して行った。

「何？」

レトも何もわからないまま、燃え尽きてしまった。

（お母さん……）

それがレトの最後の思索だった。

ガールスはビル街の一角が焼失したのを知り、愕然とした。

「軍の集結を急がせろ。到着した連中から、あの化け物の攻撃に入
れ」

ガールスは命令した。しかし彼に勝算はなかった。

「デイズムの亡霊か……」

と彼は呟き、齒ぎしりした。

第二十六章 狂気の真相

サランドは、レトからの通信が途絶えた事、ディアネイラらしき飛行物体が再び現れた事を知らされた。彼はレーダー係に、

「ディアネイラらしき飛行物体はどこに向かっているのだ？」

「航跡がはっきりしませんので、確かな事はわかりませんが、神酒の海に向かっているのではないかと思われます」

レーダー係が答えると、サランドはフツと笑って、

「そうか、神酒の海か。パイア・ギノが邪魔だと判断したわけだな」と言い、

「我が軍は中央の入り江ドーム上空に集結しつつ、第一戦闘配備。ディアネイラの動きを見守る事にする」

と命令した。しかしサランドの読みは浅かった。

「針路をニユートウキョウに採れ。首都を壊滅させ、新都を定めるためにな」

車椅子の男は命令した。ディアネイラはゆっくりと方向転換し、北東に針路を採った。

「これで何もかも総帥の思惑通りですね」

サングラスの男が言うと、車椅子の男はチラッとサングラスの男の方を見て、

「そうでもない」

「は？」

サングラスの男は呆氣にとられたようだった。車椅子の男は前を向き、

「まだお前が生きているうちは安心できんよ、カロン・ギギネイ」

サングラスの男はギクツとした。

「うまく変装して私に接近したつもりだったのだろうか、最初からわかっていたのだ」

サングラスの男の額に汗が伝わった。車椅子の男は淡々と続けた。
「お前は私を三度殺し損ねている。だから本物の私を殺すまで、何
度でも私を殺すつもりだったのだろう？」

「……」

サングラスの男は何も言わなかった。

（三度？　と言う事は……）

車椅子の男は義足に見せかけたカバーを外し、仮面を取り、手を
覆っていた金属を投げ出し、立ち上がった。

「残念だったな、ギギネイ。私は核融合砲基地には行かなかったの
だよ」

そこに立っていたのは、全くどこも傷を負っていないディズムで
あった。サングラスの男、いや、カロンのギギネイは啞然とした。

「まだお前は殺さぬ。使い道があるのでな。私の忠実な部下として
「何？」

カロンはサングラスと防塵マスクを外した。彼の目は怒りで吊り
上がっていた。

「では何故五年も潜んでいた？」

カロンは怒鳴った。ディズムはフツと笑って、

「資金集めと、ディアネイラの完成のためだ。資金はダウが集めて
くれたので、予定より早くピュトンの工場を買収する事ができた」

カロンは立ち上がった。すると周囲の乗員も立ち上がり、銃を構
えた。ディズムはそれを手で制して、

「お前もダウと同じく、脳波コントロールにより、別人格にしてや
ろう。私の言う事のみを聞く男にな」

「……」

カロンは歯ぎしりした。

（最初から俺とわかっていて、雇ったのか、この男は……）

カシエリーナ達の乗るシャトルは大気圏に突入していた。彼らの
肉眼にも見えるほど、ニューホンコンの火災は広がっており、炎が

高く舞い上がっていた。

（ディアネイラが地球にも現れたって、本当だったのね）
真っ赤になったシャトルの中で、カシエリーナは思った。

（先生……）

レージンに対するものとは明らかに違うのであるが、カシエリーナはマーンを愛していた。師として、男として。

シノン達もディアネイラがニューホンコンを焼き尽くして、ゆっくりとニュートウキョウに向かい始めたのを知っていた。

「教授、どうします？ カシエリーナ先生達が到着するのを待っていたら、ディアネイラがニュートウキョウに到達してしまいますよ」
ロイが言くと、シノンは考え込んで、

「うーむ」

と唸ったまま何も言わない。するとシエリーが、

「でもロイ、ロベルトとレージン隊長も一緒なんですよ？ 二人がいた方が、心強いよ」

「そうだな。待つか。そして賭けるしかないな」

ロイの目配せに、エリザベスとテミスは頷いた。

カロンは両手に手錠をかけられ、キャプテンシートに縛り付けられていた。ディズムはそれを愉快そうに眺めながら、

「お前に歴史のありようをみせてやろう。特別にな」

「……」

カロンは何も言わなかった。

（狂ってやがる。それより、ヒュピーは無事だろうか……）

彼はニューホンコンの郊外に残して来たヒュプシピュレの事が気にかかっていた。ディアネイラの攻撃は郊外まで及んでいなかったが、延焼の恐れはある。

（あいつは俺が心配するほど、ヤワな女じゃなかったな）
カロンはそう思ってフツと笑った。

ガールスは、支部ビルがディアネイラに攻撃されたので脱出し、郊外へ逃れていた。

「このままやられるのだけは避けたいな」

ガールスは呟いた。しかしディアネイラはニューホンコンの軍を無視して、飛び去ってしまった。

「ニュートウキョウへ行くつもりか？」

ガールスは焦った。

（何か、何か手立てはないのか……）

彼はニュートウキョウの軍本部に議長官邸の地下から発見された大型ミサイルがあるのを思い出した。

「あの中には確か核付きのものもあったはず……」

ガールスは勝算あり、と考えた。そして、ニヤリとした。

「ディアネイラか？」

パイアはレーダー係に尋ねた。レーダー係は、パイアの方を見て、「間違いありません。先程撃破したものと同じものです。宇宙線レーダーにしか反応がありませんし」

パイアは顎に手を当てて思索した。

（まずいな。月の軍より、私のアイトウナの方が戦力的に上だと判断して、こちらに向かっているのか……）

「さっきのようなわけにはいかないよ。全艦磁力コーティングせよ。火器の攻撃のダメージに備える」

パイアは真剣な顔で命令していた。テセウスはそんなパイアを見て、今度は簡単にはいかないのだと感じていた。

ニュートウキョウを目指すディアネイラを、遠巻きに共和国軍の戦闘機ゲリユオンが追尾していた。

「下手に攻撃は仕掛けるな。こいつもあのクロノス同様、オートデイフェンスシステムがあるはずだ」

編隊の隊長は言った。もとよりゲリユオンは、デアネイラが本
当にニユートウキョウへ行くのか監視しているだけで、攻撃するつ
もりはなかった。デアネイラもゲリユオンごときに撃墜されるは
ずもないので、全くこの追尾を無視していた。

ニユートウキョウの軍本部には、本部長に降格されたジョリアス・
ダロネンがいた。彼はガールスからの連絡で、基地の隅にある倉庫
の中から、歴代議長が隠していた大型ミサイルを運び出させていた。
「あの男の命令で動くのは何とも忌ま忌ましいが、化け物が接近し
ているとなれば、そうも言っていられんな」

五年前と比較して、口髭を剃った分、逆に若く見えるようになって
たジョリアスは、追放されたのに再び長官に返り咲いたガールスの
ことをあまり快く思っていなかった。確執はあった。しかし今は、
地球共和国存亡の危機である。五年前に死んだはずの狂人が、甦っ
て動き始めたのだ。そんなことに拘ってははいられないのである。

「しかし、何故五年も経ってから、奴は動き出したんだ？」

ジョリアスは、軍の中でただ一人、ディズムは死んでいないと主
張していた。しかし何年経ってもディズムが現れないので、半ば持
論を捨てかけていたのだった。

「この五年は、一体何を意味しているんだ？」

ジョリアスは、それが非常に不気味に思われた。

「一つ教えてほしい事がある」

カロンは抵抗をやめて、ディズムに尋ねた。ディズムは前を向い
たままで、

「何だ？」

「何故ダウ・バフ・マーンを偽の支配者に仕立て上げた？　どんな
必要性がある？」

カロンが言うと、ディズムはチラッとカロンを見てから、バカに
するかのような笑みを浮かべて、

「偽の支配者などではない。奴には実際に地球と月を治めてもらう。私の右腕としてな」

「そうか。貴様は飽くまで表に出ないつもりか」

カロンは苦々しそうに言った。ディズムはカロンの方に向き直って、

「私は究極の政治形態を発見したのだ。矢面に立たされる者と、真の為政者は別であるべきだと」

「つまり国民が不満を表明したら、首だけすげ替えて、中身はそのままということか。そんなものは何百年も前からあることだ」

カロンが笑って言う、ディズムは、

「違うな。そうではない。私が言っているのは、弾圧し、税を徴収し、自由を奪う者と、それを命令する者は別であるべきだ、ということだ。さらに実行する者は、自分の意志を持たない。これが究極の政治形態だ」

と答えた。カロンは啞然とした。

（自分の操り人形で世界を治め、操り人形に憎しみが集中するよう仕向ける？ 何を考えているんだ？）

「政治とは本来そういうものなのだ。為政者は国民を欺かなければ国を治められない。しかし為政者自らが欺こうとすると、どうしてもためらいが生まれる。ならばそんなためらいを持たぬ人間が国民を欺く方が良い」

ディズムは前を向いた。カロンは黙ったままディズムの背中を睨んだ。

「そうすれば国は治まる。全てが円滑に進むようになる」

ディズムはそう言うと、フツと笑った。

「しかしその影の為政者が死ねば、全ては元に戻ってしまうぞ」

カロンは反論した。しかしディズムは、

「そうだな。影の為政者が唯一自分でやらねばならぬことは、後継者を育てる事だ」

と言い返した。カロンは沈黙した。

第二十七章 アイトウナ炎上

カシエリーナ達の乗るシャトルは地球を一周してニューペキン空港に戻って来て、着陸した。時間的にはディアネイラが二ホンに差しかかる頃であつた。

「カシエリーナ！」

「先生！」

緊急用のタラップを滑り降りて出て来たカシエリーナ達に、シノンとロイ達が叫んだ。

「レージン、ロベルト、早くクロノスに乗り込んでくれ。ディアネイラがニュートウキョウに向かつているんだ」

シノンは言った。レージンはカシエリーナを助け起こしながら、
「クロノスに？」

と尋ねた。シノンは大きく頷いて、

「そうだ。シエリーがニューホンコンから本物に乗って来てくれたんだよ」

「本物？」

ロベルトがシエリーを見た。シエリーはニツコリしてから、

「そうだよ。詳しい説明は中ですから、急いで！」

「わかった」

ロベルトとレージンはクロノスに走り出した。

「エリーとテミスは残れ」

ロイが言つと、エリザベスは不満そうだったが、
「わかったわ」

と答えた。ロイはエリザベスの頬にキスをすると、クロノスに走つた。シエリーもエリザベスとテミスに手を振り、クロノスに向かつた。

「生きて帰って、ロイ」

エリザベスが呟くと、テミスがウィンクして、

「大丈夫。あいつはそんな簡単に死ぬような奴じゃないわよ」

「そ、そうね」

エリザベスは不安そうな顔をしていたが、それを振り払うように微笑んだ。

アイトウナは、デアネイラが神酒の海付近に来ているのを察知し、動き出した。

「奴のあの主砲には気をつける。あれをまともに食らったら、このアイトウナも只じゃすまないよ」

パイアは言った。彼女は手にジツトリと汗を滲ませていた。

「そういうことだったのか」

レージンはニュートウキョウに向かうクロノスの中で、個体認識装置に登録をすませながら、ロイとシェリーから、クロノスのコピーの話、マーンの口座から金が引き出されていた話を聞いた。

「じゃあ、シノン教授はやっぱこの一連の事件の黒幕はディズムだと考えているんだな？」

レージンは操縦しているロイに尋ねた。ロイは前を向いたままで、「みたいですね。俺もそう思いますよ。マーン先生は操り人形にされているんですよ、多分」

「だとすると、ただディズムを倒すだけじゃなくて、マーン先生を救出することも考えないとな」

レージンが腕組みして言うと、シェリーが、

「マーン先生の放送がどこで行われたのかは、教授が調べてます。デیلیー・アースのアタマス・エスコさんという人と協力して」

「アタマスさんか。カシェリーナが地球と月に呼びかけの放送をした時、手伝ってくれた人だったな」

レージンは感慨深そうに呟いた。

「共和国軍がとんでもないモノを持ち出しましたよ」

通信機を操作していたロベルトが言った。レージンはロベルトを

見て、

「どうしたんだ？」

と尋ねた。シェリーもロベルトを見た。ロベルトはレージンとシェリーを交互に見ながら、

「議長官邸の地下にあった、ミサイルを使うつもりです」

「何だつて？ あの博物館行きのをか？」

レージンは呆れていた。しかしロベルトは、

「いくら博物館行きと言われるほど古くても、核付きもあったらしいですからね。もしその核付きが使用可能なら、ディアネイラでも只ではすまないでしょうし……」

「何より、ニュートウキョウが汚染されてしまうな」

ロイが口を挟んだ。レージンはロイをチラツと見てから、

「ロイの言う通りだ。軍も何を考えているのか……」
と憤然として言った。

カシェリーナの運転で、シノン、テミス、エリザベスは、デイリー・アースに向かっていた。

「マーン君はニューホンコンにいると思われる。今、アタマスにその辺を探らせているんだが、今一つ情報が足りなくてな」

シノンが言うと、カシェリーナはアクセルを踏みながら、

「私、ニューホンコンに行ってみようかしら。何か掴めるかも知れないし……」

「うむ。しかし、危険だぞ。デイズムが潜んでいた場所だ。仮に奴がディアネイラでニュートウキョウに向かったとしても、何が待ち受けているかわからんぞ」

「でもマーン先生がいる可能性があるのなら、行ってみる価値はあると思うわ」

カシェリーナは譲らない。シノンは肩を竦めて、

「わかったよ。言い出したら聞かないのは、ダムン家の血筋だからな。行つて来い」

「ありがとう、お父さん」

カシェリーナは嬉しそうに言った。そして、

「それより、ナターシャさんは大丈夫？」

とテミスに尋ねた。テミスはカシェリーナを見て、

「はい。教授の知り合いのお医者様と、ナターシャさんの大学時代のお友達が来てくれたので、心配ないです」

と答えた。カシェリーナは、

「そう。なら、安心ね」

と言い、交差点を左折した。

神酒の海に向かっていているデアネイラはついにアイトウナを射程に捉え、主砲を準備していた。二号機のデアネイラは無人で、コンピュータが全てを制御していた。

「デアネイラが攻撃態勢に入りました」

部下の報告にパイアはキツと前方を見据えて、

「全砲門展開。目標、デアネイラ。必ずこの一撃で沈めろ！」

と命令した。アイトウナの各砲塔が展開し、デアネイラ迎撃の態勢を整えていた。

「発射準備完了！」

「撃てッ！」

パイアは大声で言った。アイトウナの砲門が一斉に吠え、デアネイラに向かって光の束を放った。

デアネイラの主砲が輝き出して発射されたのは、その直後だった。

「デアネイラの主砲です！」

「全速回避！」

アイトウナは右に大きく旋回した。しかしデアネイラの主砲の方が早く、アイトウナは左舷前部に被弾した。

「うわっ！」

ブリッジにもその振動が伝わり、パイアは危うくシートから転げ落

ちるところだった。

「消火作業急げっ！　ディアネイラの方はどうか？」

パイアが尋ねた時、リーダー係が大声で、

「無数の高エネルギー体が高速接近中です！」

「何だつて？」

パイアは慌てて次の指示を出そうとした。しかし遅かった。アイトウナに向かって来たのは、アイトウナが発射したものだったのだ。アイトウナは全体に被弾し、爆発を拡大して行った。

「何が起こったんだ？」

かろうじて直撃を免れたブリッジも、煙に包まれていた。パイアは咳き込みながら、テセウスに近づいた。

「大丈夫、テス？」

「大丈夫だよ、パイア。一体何が起こったんだ？」

「わからない。ディアネイラの反撃とは思えないんだけど……」

パイアはテセウスとヘルミオネと共に、ブリッジから通路に出た。「全員に伝える。アイトウナを脱出せよと」

「はい」

パイアはテセウスがヘルミオネと話している一瞬の隙を突いて、ブリッジに戻った。

「パイア！」

後を追おうとしたテセウスの前で、ドアは閉じられた。

「パイア！　何をする気なんだ？」

テセウスは大声で叫んだ。

「テス。お母さんと脱出しなさい。ディアネイラは、私とアイトウナで必ず沈めてみせるから」

パイアはドアに背中を押しつけて言った。しかしテセウスは、
「嫌だ！　僕はパイアと一緒に暮らしたいんだ。二人の子供ができたら、母さんと一緒に楽しく暮らしたいんだ。バカなこと考えないで！」

と泣きながら言った。パイアも目を潤ませて、

「ありがとう、テス。気持ちだけ受け取っとくよ」

「パイア！」

「早く脱出しなさい！ アイトウナはもうすぐ爆発するかも知れないんだ」

「嫌だ！ 絶対に嫌だ！ ここを動かない。決して動かない！ 僕はパイアと生きて行くって決めたんだ！」

テセウスはあらん限りの大声で言い返した。しばらく静寂が続いた。やがてドアは開かれた。パイアは、

「負けたわ、テス。残りなさい。でも、お母さんは脱出させるのよ」
「うん、パイア」

テセウスはニツコリして涙を拭った。そして、ヘルミオネに、
「母さんは脱出して」

「でも、テス……」

ヘルミオネは不安だった。自分一人が取り残されてしまう気がした。しかしテセウスは、

「大丈夫。死んだりしないよ。必ず生きて帰るよ」

「……」

ヘルミオネは黙って頷き、パイアの部下に伴われて通路を去って行った。彼女はその間何度も振り返った。

「さア、今度こそ、ディアネイラを沈めるよ。何があったのか、調べるんだ」

パイアはコンピュータを操作しながら、シートに戻った。テセウスはパイアの隣に立った。

第二十八章 それぞれの策謀

デアネイラ三号機は、キュウシュウ上空に差ししかかっていた。

「どうやら共和国軍は、議長達の遺品を使つつもりらしいな」

デイズムが言った。カロンは、五年前、デイズムを追って降りた議長官邸の地下にあった大型ミサイルを思い出した。

「だが、何をやっても無駄だということが、すぐにわかるだろう」

デイズムはニヤリとして言った。彼は故意にカロンに聞こえるように話しているようだ。カロンはそれに気づき、黙ったままデイズムの背中を穴が開くほど睨みつけていた。

カシエリーナ達はデイリー・アースのニューペキン支局に到着し、政治部のフロアでアタマス・エスコと再会していた。

「お久しぶりです、シノン先生。それに、カシエリーナ先生」

アタマスは二人と握手を交わしながら言った。シノンが、

「早速で申し訳ないが、マーン君の事、何かわかったかね？」

「電波を出している地点がおおよそ絞れたのですが、まだはつきりとわかったわけではありません。ニューホンコンには違いないのですが……」

アタマスが答えると、カシエリーナが、

「とにかく私、ニューホンコンに行ってみようと思っているんです。局のヘリか何かをお貸しいただけませんか？」

「ええっ？ カシエリーナさんが？ 危険ですよ」

アタマスはビックリして反対した。しかしそんなことを言われて怯むようなカシエリーナなら、今頃アパートのベッドに潜り込んで震えているはずである。彼女は憤然として、

「五年前、私はもつと危険な事をしましたよ」

「そ、それはそうですが……」

アタマスもそう言われてしまうと何も言い返せなかった。彼は溜

息を吐いて、

「わかりました。それでは私がパイロットとして同行しましょう」

「ありがとう、エスコさん」

カシエリーナは微笑んで礼を言った。

ロイ達が乗るクロノスは猛スピードでディアネイラを追跡していた。彼らはすでにコリアン半島上空にいた。

「ディアネイラはキュウシュウ上空を通過して、カンサイ方面に向かっていているところです」

ロベルトが伝えた。レージンは腕組みして、

「ディアネイラの攻撃も防がなければならぬが、共和国軍が核を使うのも防がないとならないな」

「ニーストウキョウに着く前に、ディアネイラを沈めるしかないですね」

ロイが言った。レージンは頷いて、

「そうだな。何としても、チュウブあたりでディアネイラに追いついて、叩き落とさないと」

「ニホンにいる共和国軍全てが、ディアネイラ撃墜のために展開しているようです」

ロベルトが言った。するとシェリーがコンピュータを操作しながら、

「ニホンだけじゃないよ。ニースペキン、キャラフト、ウラジオ。とにかく、付近の軍が全て、ニーストウキョウに向かい始めているよ」

「ディアネイラばかりでなく、ニーストウキョウまでもが消滅してしまうような戦いになりそうだな」

ロベルトはシェリーを見て言った。レージンは苛立たしそうにシートの肘掛けを叩いて、

「全面戦争のような戦い方は、戦場を拡大して、死者を出すばかりだということがわからないのか、軍は！」

と叫んだ。

アイトウナは各被弾箇所を補修しながら、デアネイラ二号機に再反撃をくわえるため、動き出した。そのアイトウナから、ヘルミオネを乗せた脱出用の宇宙船が何隻か飛び立った。

「先程のデアネイラの反撃ですが、我が方の攻撃を何らかの方法で反射したものと思われます」

部下が報告すると、パイアは、

「ならレーザーの類いは使用を禁止、ミサイル、その他の火器で攻撃しろ。それに離れていると、奴の小細工がわからない。危険だが、できるだけ接近しろ」

と命令した。テセウスは全身汗まみれでパイアを見つめていた。

「テス」

パイアは前を向いたまま話しかけた。テセウスはハツとして、

「何、パイア？」

「さっきの、嬉しかったよ。私、正直言ってこんなに嬉しかった事はないんだ。ありがとう」

「う、うん」

テセウスは照れながら頷いた。パイアはフツと笑って、

「生きて帰れたら、また思いつきり気持ちいい事しようね」

「パ、パイア……」

パイアのあまりにも大胆で過激な発言に、テセウスは真っ赤になっってしまった。

議長達の乗る専用シャトルは、デアネイラ一号機がパイアのアイトウナに撃墜された情報は入手していたが、二号機と三号機が現れた情報は掴んでいなかった。ガールスが情報を操作し、議長がそのままニユートウキヨウへ降りるように仕組んだのだ。

「月へ向かったクロノスの情報が入らないのはどういうわけだ？
直接回線があるだろう？」

議長は尋ねた。秘書官は首を傾げて、

「妙です。全く通じないようです」

「どういうことだ？ 何が起こっている？」

議長はムツとして窓の外を睨んだ。

デイズムは、議長の乗るシャトルがナリタに近づいているという情報を得ていた。

「もはや帰る場所などないというのにな。哀れな男だ」

とデイズムは呟き、

「撃墜しろ。目障りだ」

と命令した。

ディアネイラの機銃が動いたので、追尾していたゲリュオン編隊は、色めき立った。

「仕掛けて来るのか？」

編隊の隊長は各機に散開するよう指示し、ディアネイラから離れた。しかしディアネイラの機銃は上を向き、発射された。

「何だ？」

ゲリュオンのパイロット達は、同時に上を見た。隊長も上を見た。

「何かいたのか？」

しばらくして、爆雲が見え、爆発音が聞こえた。

「議長の乗っていたシャトルが、撃墜されたようです」

部下の報告に隊長はギョツとした。

「議長のシャトルだと？ 何故こんなところを飛行していたんだ？」

その理由は、ガールスしか知らなかった。

ガールスは議長のシャトルが撃墜されたのを受けて一気にディアネイラ撃滅作戦を展開する事にした。

「これで事実上も名目上も、軍の最高指揮官はこの私だ。何も邪魔する存在はない」

ガールスはニヤツとした。

「ニユートウキョウそのものは犠牲になってもやむを得ん。とにかく、デアネイラを沈めるのだ」
と彼は言った。

ロイ達もゲリユオンとニユーホンコン支部との通信を傍受して、議長のシャトルが撃墜された事を知った。

「これで軍に対する歯止めがなくなってしまったな。ガールスはニユーホンコンだ。奴が暴走を始めるぞ」

レージンが言うと、ロイは頷いて、

「可能性大ですね。ガールスはデイズムの直属の部下だった男です。そんな奴が軍の司令長官じゃ、先が見えてますよ」

「全くだ。あのスケベ親父、これからどうするつもりだろう?」

ロベルトは言った。シェリーはキーボードを叩く手を休めて、

「軍の展開が早まつてる。それにニユートウキョウの軍は逆に散開を始めているよ」

「まさか、ニユートウキョウを巨大な罠にして、デアネイラをおびき寄せるつもりか?」

レージンがピクンとして言った。ロイはムツとして、

「そんなこと、させない!」

とクロノスをさらに加速させた。

第二十九章 狂気VS狂気

一方カシエリーナは、アタマスの操縦するジェットヘリでニューヨークコンに向かっていた。

「デアネイラはカンサイ上空に入ったようです。ニューヨークウが攻撃されるのも、時間の問題ですよ」

インカムを着けたアタマスが言った。するとカシエリーナは外を見るのを止めてアタマスに目を向け、

「レージン達が何とかしてくれます。私達は、マーン先生を救出することだけ考えましょう」

「はア。そうですね」

ヘリは南の空へ消えて行った。

アイトウナとデアネイラ二号機の距離は、肉眼でも確認できるほど接近していた。

「撃て！」

パイアの命令で、アイトウナの全砲門が火を噴いた。デアネイラも主砲を撃って来た。

「ミサイル連続掃射！ デアネイラに迎撃できないくらい撃て！」

パイアの甲高い声がブリッジに響いた。

デアネイラはアイトウナのミサイルと砲弾を受けながらも主砲を連射していた。アイトウナもあちこちを爆発させながら、攻撃を続けた。両者の間に飛び交った弾とミサイルは数え切れないほどであった。

「被弾箇所、処置急げ！ 消火班、効率良く消火に当たれ。敵に休む暇を与えるなよ」

パイアの顔は酷く険しくなり、目は落ちくぼんでいた。テセウスは心配そうにパイアを見守っていた。

アイトウナとデアネイラの交戦を見物していたサランドは頃合いと判断し、動く事にした。

「デアネイラも危険だが、アイトウナも同じくらい危険だ。両者が疲弊したところを一気に叩く。そうすれば、月の平和は恒久化する」

サランドは言い、全艦隊を率いて、中央の入り江を発進した。

デアネイラ三号機は、カンサイを通過し、チュウブに入っていた。

「ニホン各地と付近の共和国軍が、ニョートウキョウに向かっていくようです」

乗員が報告すると、デイズムはニヤリとして、

「愚かな。例え百万の軍で押し寄せても、今の共和国軍にデアネイラを墜とす力はない」

と呟いた。

（確かにそうだ。しかし、ガールスもそれほどバカではないはず。核や物量作戦で勝てるとは思っていないだろう。何かあるはずだ…

…）

カロンは思った。彼は彼なりに、地球の行く末を憂えているのである。

ガールスもニョーホンコン支部の輸送機に乗り、ニホンに向かっていた。

（まさかデイズムも、この俺がニョートウキョウを丸ごと罨にして爆弾を抱えさせているとは思えない）

彼はデイズムに気づかれないために、ニョートウキョウに援軍に向かっている他地域の軍にも、もちろんニョートウキョウの市民にも、全く何の情報も与えていなかった。デアネイラ接近を知って逃げ出す者もいたが、大半の市民は、地下のシェルターに避難していた。そして迎撃をするために展開している地上部隊と、後方支援

の空軍も、デアネイラを引きつけて叩くという事以外、何も聞かされておらず、自分達が犠牲になるとは夢にも思っていなかった。ガールスは爆弾を地下に仕掛けさせ、デアネイラが到達したと同時に、一気に爆発させるつもりだった。戦後のことを考え、さすがに核弾頭は撤収させたのだが、それでも壮絶な戦術に変わりはない。この作戦が実行されれば、ニュートウキヨウはその人口の四分の三を失う事になる。約一千万人が犠牲になる作戦。どちらが狂人か、わからないような戦いである。

「人は増え過ぎた。ある意味でこの戦いは聖戦だ。人類死活のな」
ガールスは誰にもなくそう言った。周囲のパイロットや部下達は、顔を見合わせた。

アイトウナは沈む一歩手前というくらい、被弾していた。

「パイア……」

テセウスが声をかけると、パイアはハツとして、

「テス……」

とテセウスを見た。それから彼女は、

「このままじゃ、やられるだけだ。何か方法は……」

と思案した。部下達もパイアを見た。するとテセウスが、

「そうだ。アイトウナはたくさんパーツから成り立っているのだから、その一部をミサイルに見立てて、デアネイラにぶつけるんだ。そして月に叩きつけて、粉碎する」

「奇抜な作戦だね。でもかわされるよ」

パイアが反論すると、テセウスは、

「かわせないくらい接近すればいいよ」

パイアはビククリしたような顔でテセウスを見ていたが、やがてクスクス笑い出して、

「了解。アイトウナ、前進！ デアネイラに艦首を叩き込むよ」と命令した。

アイトウナはあちこちから煙を出しながら、デアネイラに向か

って動き出した。ディアネイラも反撃を続けていたが、大きさが違う分、アイトウナの方が有利だった。アイトウナの艦首がディアネイラにぶち当たった。

「錨を撃ち込め！ ディアネイラが逃げられないようにするんだ！」
アイトウナの巨大な錨が、ディアネイラに突き刺さった。

「艦首を切り離せ！」

アイトウナの艦首が噴射を開始し、ディアネイラ諸共彼方に飛び去って行った。

「少し方向を誤ったな。あれじゃあ月を一周して、衛星になっちゃうよ」

パイアが言うと、テセウスは笑って、

「だったら戻って来たところを叩き落とせばいいさ」

と答えた。二人は顔を見合わせてニッコリし、キスを交わした。パイアの部下達はホッとして互いに微笑み合った。

サランド艦隊は神酒の海に向かって前進していたが、前方から接近する飛行物体に気づき、慌てていた。

「何だ？ 何が接近している？」

サランドは大汗をかいて怒鳴った。

「わかりません！ 識別不能です！ 猛スピードで我が艦隊に接近して来ます！」

リーダー係は悲鳴に近い声で言った。

「撃てっ！ 撃ち落とせエッ！」

サランドの命令で、無数の砲火が接近する飛行物体に撃たれた。しかし飛行物体のスピードが速過ぎ、ほとんど当たらなかった。しかも当たったものは反射され、次々に戻って来た。

「全速回避！」

しかしサランドの必死の命令も最早手遅れだった。

「うおおっ！」

飛行物体とは、もちろんディアネイラであつたが、ディアネイラ

はサランドの艦のブリッジを根こそぎもぎ取り、艦隊の真っ只中に突入し、多くの戦艦に激突して大爆発を起こした。サランド艦隊はその三分の二を失うほどの損害を出した。

「何があつたの？」

パイアがリーダー係に尋ねた。リーダー係は、

「距離と方位から考えて、連邦軍の艦隊のようです。ディアネイラが激突して、爆発したようです」

「何で連邦軍がそんなところにいたのさ？」

漁父の利を得ようとしたサランドが、その欲のために死んだとはパイアにわかるわけがなかった。

「二号機が爆発しました」

乗員が報告すると、デイズムは不機嫌そうな顔になった。

「どういうことだ？」

「状況がよくわかりません。何故爆発したのか、不明です」

デイズムはムツとしてそれ以上尋ねなかった。

クロノスはチュウゴク上空まで来ていた。

「間に合うのか？」

ロベルトがボソツと言うと、ロイがムツとして、

「間に合わせるよ。間に合わせなきゃいけないんだ」

と言い返した。ロベルトはビックリしたようにロイを見て、

「あ、ああ、そうだな」

と言った。シェリーが、

「ガールスがニュートウキョウに何か仕掛けたようだよ。本部の軍はニュートウキョウから離れたのに、援軍はニュートウキョウの中心部に向かっている。それに市民に避難勧告が出されていないみたいだよ」

と言うと、レージンは腕組みをして、

「奴め、何を企んでいるんだ？」
と呟いた。

第三十章 セカンドVSサード

カシエリーナの乗るヘリは、ヤンスーリバー上空を通過していた。「ニューホンコンは今のところ何も起こっていないようです。爆発も沈静化して、火事も収まりつつあります」

アタマスが言った。カシエリーナは頷いて、

「危険はなさそうですね」

「ええ。幸い、ウチのニューホンコン支局も焼失を免れましたから、少しずつではありますが、情報が入って来るようになりましたよ」

「そうですか」

カシエリーナは前方に目を向けた。

（レージン達、大丈夫かしら？）

ディアネイラ三号機はついにフジサンを越え、カントウに入っていた。デイズムはムスツとしたままで、街を見下ろしていた。

「妙だな」

彼はニーストウキョウの軍が全く何もして来ない事を不審に思っていた。それに、フジを通過するまで追尾していたゲリュオンが姿を消している。何かあることは確かだった。

「ガールスめ、つまらんことを企んでいるようだな」

デイズムは眉をひそめ、遠くに見えるニーストウキョウの街並をもう一度見渡した。

ガールスはディアネイラがカントウに入った事を聞いていた。

「よし、作戦開始だ。奴をニーストウキョウの真ん中までおびき寄せれば、勝てる」

ガールスは得意満面で言った。

ディアネイラは、ゆっくりとニーストウキョウ上空に入った。そ

の時、街の各地で火の手が上がった。

「何だ？」

ディズムは乗員に怒鳴った。乗員はキーボードを叩き、マウスをクリックしながら、

「爆弾です。ニュートウキョウのあちこちに、爆弾が仕掛けられているようです」

「なるほど。そういうことか。急速上昇しろ！」

爆発が次々と起こり、ディアネイラは爆雲の中に吞み込まれた。爆弾が仕掛けられているのは、地下であった。何も聞かされていない市民は、何が起ったのか全くわからないまま、炎に焼かれ、爆風に身体を八つ裂きにされて死んで行った。

「やったか？」

衛星からの画像に見入っていたガールスが呟いた。爆雲の中にディアネイラが消えて、数十秒が経過していた。

「ダメです！ ディアネイラ、上昇しています！」

「何だと？」

ガールスはモニターの爆雲から現れたディアネイラを驚愕して見ていた。

「そんな、バカな……」

ガールスは作戦の失敗を知り、頂垂れた。

「もうおしまいだ。地球は奴に破壊し尽くされてしまう……」

ガールスは、シートに沈み込んでそう呟いた。

ディアネイラは凄まじい噴射をしながら上昇し、高度一万メートルまで来ると、停止した。

「ニュートウキョウに巨大な罠を張り、市民を囷にし、何も知らぬ援軍まで犠牲にして、結果がこれか、ガールス。相変わらず、読みと詰めが甘いな」

ディズムはガールスの愚策を笑った。そして、

「核融合砲用意」

と命令した。カロンはそれを聞いてギョツとした。

（核融合砲だと？ この三号機にはそんなものまで装備されていたのか……）

「撃て！」

デアネイラの下部から現れた巨大な砲塔が唸りを上げて光束を放った。その光束は議長官邸付近に突き刺さった。たちまち各所で誘爆が始まった。

「ニユートウキョウが……」

カロンは啞然とした。ニユートウキョウは、その地層諸共消滅するのではないかと思われるほどの爆発を起こしていた。

「間に合わなかったのか？」

クロノスはまだトウカイ上空にいたが、そこからもそれとわかるほど凄まじい爆雲が見えた。見ようによっては、フジが噴火しているようでもあった。

「一体どうなったんだ？ デアネイラは？」

レージンがシェリーを見た。シェリーはディスプレイに出る数字を見て、

「爆発があまりにも広範囲に渡り、全く映像が入って来ません。もしあの爆発にデアネイラが巻き込まれているのだとしたら、いくらデアネイラでも、無事ではすまないでしょう」

「そうか」

レージンは再び爆雲を見た。するとロイが、

「さっき、光の筋が空から地上に走ったの、見えなかったか？」

とロベルトに尋ねた。ロベルトは首を横に振って、

「いや、見えなかったけど……」

「そうか」

ロイは前を向き、クロノスを加速させた。

爆雲をかき分けるようにして、ディアネイラは下降した。まさしく廃墟と化したニュートウキョウに降り立ったディアネイラは、ハルマゲドンを制した魔王のようであった。

「ダウの放送を再開しろ」

ディズムは命じた。乗員達はキーボードを叩き始め、忙しく動いた。

「何をするつもりだ？」

カロンの尋ねた。ディズムはニヤリとしてカロンを見、

「絶対支配者の演説だ。地球と月の全てを治めるな」

「……」

カロンは黙ってディズムを睨むだけだった。

（狂っているのか。それとも、天才的な頭脳故なのか？）

「ニュートウキョウは灰燼に帰した。コペルニクスクレータも壊滅した。もはや地球にも月にも、我が軍に対抗する力はない。我に服せ、民よ。生き残る道は、他にない」

再びテレビとインターネットに、マーンの演説が流れ始めた。地球の人々も、月の人々も、恐怖に引きつった顔でマーンの放送を見ていた。

「先生……」

カシエリーナもヘリの中モニターでマーンの放送を見ていた。

（どこか変だ。何が変なのだろう？ 先生なのに、先生じゃない気がする……）

「カシエリーナさん、今の放送のおかげでまた発信源がわかり始めました。ニューホンコンのどこなのか、特定できそうですよ」

アタマスが言うと、カシエリーナはハツとして、

「そ、そうですか」

と力なく応えた。アタマスは前を向いたままで、

「カシエリーナさん、お気持ちはわかりますが、クヨクヨしてみて

も何の解決にもなりません。マーン教授は操られているのですから……」

「ええ」

カシエリーナはもしマーンが自分の意志でこんなことをしているのなら、どうしたらいいのだろうと考えていた。

（私にはどうすることもできないの？）

「私は今、地球及び月の全権を掌握し、総帥に就任した。これから国民は、私を神と崇め、敬え」

マーンは実に力強く語った。それはディズム以上のカリスマ性を秘めているようであった。

「これからは議会もなく、裁判所もない。ましてや、評議会など存在しない。警察もいらぬ。全ては軍が執行し、私が決定する。統治は究極形態となり、決して崩壊する事はない。そして、恒久の平和が訪れるのだ」

シノンとエリザベスとテミスは、デイリー・アースの会議室でテレビを見ていた。

「……」

シノンは何も言わずに放送を見ていた。エリザベスとテミスは顔を見合わせて手を取り合い、声も出せないでいた。

「約束しよう。全ての民に幸福を。そして犯罪のない世の中を」

マーンはフツと笑った。

「全ての民に幸福？ 犯罪のない世の中だと？」

クロノスの中でもモニターを見ていたロイが叫んだ。彼はさらに、「ふざけるな！ そんな世の中、あるものか！ 仮にあったとしても、ガチガチに拘束された、息苦しい管理国家じゃないか。何も考えず、何も望まず、何も求めず……。そんなもの、人間の社会じゃない！」

と言い放った。レージンはロイを見て、

「デイズムを見つけ出して、倒すしかない。そんな世の中、俺もごめんだ」

と声をかけた。ロイはレージンを見て頷いた。ロベルトもレージンを見て頷いた。そしてシェリーも。

デイズムはクロノスが接近している事を知り、すぐにディアネイラを発進させた。

「何者だ？ クロノスはニューホンコンに眠っているはずだぞ」

「わかりません。しかし、現に……」

乗員が言つと、デイズムはキツとして、

「撃ち落とせ！」

と叫んだ。

ロイ達も、ディアネイラが爆発していないばかりか、こちらに向かって知っている事を知った。

「ロイ、接近戦に持ち込むんだ。小さい分、クロノスの方が有利のはずだ」

レージンが提案した。ロイは操縦桿を握りしめて、

「了解！」

と応えた。

クロノスはディアネイラの機銃を軽くかわすと、一気に接近し、逆に機銃で攻撃した。しかしディアネイラはかすり傷すら負わない。「ミサイルを使おう」

シェリーがキーボードを叩いて、ミサイルランチャーを出した。

「ミサイルを撃たせるな！」

デイズムが叫ぶ。ディアネイラも機銃座を次々に出し、クロノスを狙って撃った。クロノスはこれを巧みにかいくぐりながら、ミサイルを発射した。ミサイルはディアネイラに命中し、ディアネイラは大きく傾いた。しかし損傷はほとんど見受けられなかった。

「エンジンを狙うんだ。いくら奴でも、エンジンをやられれば只ではすまないはずだ」

レージンが言うと、ロイはクロノスを大きく右旋回させて、デイナーラの後方に回り込もうとした。

「後ろに回り込ませるな！ 攻撃、弱いぞ。もっと集中させる！」
デイズムは必死になって指示を出していた。彼はカロンが妙な動きをしている事に気づいていない。

（デイズムめ。貴様と心中はごめんだ）

第三十一章 追いつめられた狂気

カシエリーナとアタマスは、デイリー・アースのニューホンコン支局に到着し、車に乗り換え、教えられた発信源に向かっていた。「どうやら、アバスの工場の下が発信源のようです。ディアネイラもそこから現れたようですから、まず間違いないでしょう」

ディアネイラの出現で街の大半の人々が逃げ出したニューホンコンの道路は、置き去りにされて焼失した車があちこちにあるくらいで、人の姿は全く見当たらなかった。カシエリーナは相当のスピードで車を走らせていたので、目の前にいきなり女が現れたのに気づいて、大慌てでブレーキを踏んだ。女は長い黒髪にサングラスをかけて、深いスリットの入ったチャイナドレスを着ていた。

「危ないわよ！ 何てことするの！」

カシエリーナは飛び出した女に叫んだ。するとその女はサングラスを外して、

「久しぶりね、カシエリーナ。また会えて良かったわ」

と言った。カシエリーナはビックリして目を見開き、

「あ、貴女は……」

カシエリーナの前に現れたのは、ヒュプシピュレ・カオスであった。

「ダウ・バフ・マーンがいる所に行くつもりでしょ？ 私が案内するわ」

ヒュプシピュレはアタマスを後部座席に移らせて、助手席に乗り込んだ。

「アバスの工場の地下のアジトは、何も知らない者が入ると、命を落とす事になるの」

ヒュプシピュレは愉快そうに言った。カシエリーナは啞然としてしまった。

クロノスはディアネイラの攻撃をかわしながら、ミサイル攻撃を続けていたが、少し損傷させる事はあっても、決定的なダメージを与える事が出来ないでいた。

「このままじゃ、どうにもならない。残弾も少なくなってきた。戦法を変えよう」

レージンが言った。ロイが、

「クロノスをディアネイラにぶつけて中に乗り込み、直接乗員を倒すしかないですね」

「そうだな」

ロベルトも同意した。シェリーは渋々頷いた。ロイは、

「そうと決まったら、即行動だ！」

と言い、クロノスをディアネイラに突進させた。

「何をするつもりだ？」

ディアネイラに向かって来るクロノスを見て、ディズムは眉をひそめた。

「まさか！」

視界いっぱいに広がったクロノスが、何をしようとしているのかわかった時は、もう遅かった。

「うおっ！」

クロノス激突のショックで、ディズムは倒れ、乗員は皆シートから投げ出されてしまった。只一人、カロンだけが、縛られていたおかげで何ともなかった。彼は倒れているディズムを尻目に、キャプテンシートから抜け出した。

「おのれ」

ディズムがようやく立ち上がった時には、カロンはすでに乗員全員を手刀で殺していた。カロンはディズムを見て、

「終わりだ、ディズム」

ディアネイラは推力を失って、地上に落下していた。ディズムは歯ぎしりしてカロンを睨んだ。

クロノスの先端は、ディアネイラのブリッジの下に突き刺さってい

た。

「ディアネイラが落下を始めたぞ。どうしたんだろう?」

シェリーが言うと、ロベルトが、

「衝突の衝撃で、乗員が気を失ったんじゃないか?」

「ならばこのまま地上に叩きつけてやる!」

ロイはクロノスの噴射を強くした。

クロノスは勢いを増してディアネイラを押し始めた。ディアネイラ自体の落下速度にクロノスの推力が加わり、両者は急速に地上へ落下して行った。そして膨大な砂埃と、強烈な衝撃と共に、ディアネイラは地上に激突した。

「形勢逆転だな」

その落下の衝撃のせいで、今度はカロロンが倒れ、ディズムが立っていた。ディズムはカロロンにゆっくりと銃を向けた。

「……」

カロロンは落ち着き払ってディズムを見上げていた。ディズムはニヤリとして、

「死ね、カロロン・ギギネイ!」

と引き金に指をかけた。その時、カロンの右足がディズムの右手を蹴り上げた。

「グッ!」

銃は天井に当たって床に落ちた。カロンは素早く立ち上がると、銃を蹴ってブリッジの隅へと滑らせた。

「一つ確かめておこうか」

カロンはジャケットの内ポケットから何かを取り出し、ディズムに見せた。それは若い女の写真であった。

「この女、何者かわかるか?」

「何?」

ディズムはその写真の女を見た。その時、レージンとロイとロベルトが、ブリッジに乗り込んで来た。

「カ、カロロン・ギギネイ!」

レージンはカロンを見て仰天した。ロイとロベルトも名前は知っていたらしく、レージンの声にビクツとしてカロンを見た。カロンは三人をチラツと見てから、再びディズムを見た。

「答える。この女は何者だ？」

しかしディズムは何も言わなかった。カロンはフツと笑った。

「そうか。答えないつもりか。いや、答えられないと言った方が正しいか」

ディズムは額に汗をかいていた。カロンは写真の女をチラリと見て、

「この女は、本物のディズムが子を産ませるために会っていた女だ。名はカリユア・アソス」

ディズムの顔に焦りの色が見えた。

「何だ？」

レージン達はわけが分からず、顔を見合わせた。カロンは写真を内ポケットに戻すと、

「この女を知らないお前は、本物ではない。影武者だな」

「ええっ？」

レージン達は仰天して、ディズムを見た。

カシエリーナ達は、アバスの工場に到着していた。

「さっ、こっちょ」

工場の端にある長い通路を、ヒュプシピユレが先頭に立って歩き出した。カシエリーナとアタマスは顔を見合わせてからヒュプシピユレを追った。

「何故私達を？」

カシエリーナが尋ねた。ヒュプシピユレは二人を押し止めて通路の先にいる見張り二人を銃で撃ち殺して、

「ダウ・バフ・マーンには命を助けられた事があるのよ。それにカロンの手助けでもあるの」

カシエリーナは、以前そんな話をマーンから聞いた事を思い出し

た。そして、

「カロンさんの？ それはどういうことですか？」

カシエリーナは血を流して倒れている見張り二人の死体を横目で見ながら尋ねた。ヒュプシピュレは次に現れた敵をまたあっさりと撃ち殺して、

「カロンは今ディアネイラに搭乗しているわ。ディズムとともにね」「ええっ？」

カシエリーナとアタマスはすっかり驚いてしまい、ヒュプシピュレが、

「危ないわよ！」

と突き飛ばしていなければ、危うくマシンガンの餌食になるところだった。

「全く！」

ヒュプシピュレはカシエリーナ達の素人加減に呆れながらも、手榴弾で敵を片付け、先に立って歩き出した。そして、

「ぼんやりしていると、私でも守り切れないわよ。ここは敵地だつてこと、忘れないでよ」

と厳しい口調で言った。カシエリーナはしょんぼりして、

「す、すみません」

と謝ってから、またアタマスと顔を見合わせた。

レージン達は信じられないという顔で、カロンとディズムを交互に見た。

「影武者であるお前が、どうしてここまでのことができたのだ？ 答えろ」

カロンはディズムに一步詰め寄って尋ねた。ディズムはフツと笑ってカロンを見て、

「私はベン・ドム・ディズム以外の何者でもない。過去などいっさい関係なくな」

と言い返した。カロンはムツとして、

「ふざけるな。カリユア・アソスを知らない貴様が、本物のわけがない」

「カリユア・アソスを知っている者が本物だと、どうして断言できる？」

デイズムのその問いに、カロンはたじろいだ。レージンも息を呑んだ。するとロイが、

「貴様が本物であろうとなかろうと、今の世の中にとっては悪以外の何者でもない」

と口を挟んだ。デイズムは若造が、という顔でロイを見て、

「悪？ 何故私が悪なのだ？」

「何だと？」

ロイがカツとなってデイズムに掴みかかるうとするのをレージンとロベルトが止めた。代わりにレージンが、

「悪ではないというのか？」

と尋ね返した。デイズムは今度はレージンを見て、

「当然だ。悪とは時代の敗者、あるいは少数派を示す言葉。私は勝者となるから、悪ではない」

デイズムはまさに勝ち誇ったように言い切った。

「ならば貴様はやはり悪だ！ ここで死ぬのだからな！」

カロンがデイズムに掴みかかるうとした時、ディアネイラがグラツと揺れた。ニュートウキョウの緩んだ地盤が崩れて、ディアネイラが大きく傾いたのだ。

「うわっ！」

カロン、そしてレージン達は、ブリッジを転げた。デイズムはその隙を突いて、ブリッジから逃走してしまった。

「くそっ！」

カロンは立ち上がり、デイズムを追った。レージン達もカロンに続いてブリッジを飛び出した。

カシエリーナはヒュブシピュレに従って工場の巨大なエレベータ

ーに乗り、地下深くへ降下していた。

「マーンは、地下の一番奥にいるはずよ。扉が開いたら、すぐに伏せて。ここから先は、もっと激しい銃撃戦になるわ」

ヒュプシピュレは、銃に弾丸を装填しながら言った。カシエリーナはギクツとして、

「銃撃戦？」

と鸚鵡返しに言った。その時、エレベーターが停止した。カシエリーナは思わず唾を呑み込んだ。扉がガコンと音を立て、ゆっくりと開き出した。

「伏せて！」

カシエリーナとアタマスがヒュプシピュレの声に反応して床に伏せた途端に、嵐のような銃撃が襲って来た。時々、ヒュプシピュレが弾丸を装填する音が聞こえた。敵の叫び声もした。ヒュプシピュレの舌打ちも聞こえた。カシエリーナは半日くらい伏せていたような気がしていた。

しばらくして、

「終わったわよ」

ヒュプシピュレの声がした。カシエリーナとアタマスは顔を上げた。エレベーターの外には、多数の死体が転がっていた。カシエリーナは吐きそうだった。その死体の山の向こうに長い廊下が見える。「さ、マーンはこの先にいるわ」

ヒュプシピュレは歩き出した。もう敵はいないようだ。カシエリーナはアタマスに目配せして歩き出した。

第三十二章 独裁者の最期

デイズムはディアネイラの格納庫に降りて、脱出用の小型機に乗り込んでいた。そこへカロンが現れた。

「逃げるつもりか」

カロンは小型機に近づいたが、すでにエンジンが始動しており、小型機は動き出していた。しかもどこに潜んでいたのか、十人ほどの戦闘員が現れ、カロンの前に立ちはだかった。

「どけ、雑魚共。命が惜しくないのか」

カロンは怒鳴った。

（こいつらも人格を操作されて、奴の言いなりになっているのか？）

目も虚ろのまま自分に近づいて来る戦闘員を見て、カロンは苦々しく思った。その間にデイズムはハッチを開き、ディアネイラから飛び去ってしまった。

「クロノスに戻ろう。あの小型機を叩き落とすんだ」

レージンは来た道を引き返ししながら叫んだ。

「わかりました！」

ロイとロベルトは、レージンを追いかけた。

ヒュプシピユレが廊下の突き当たりの大きな扉を押し開けると、その中はまるでテレビ局のスタジオのようなところだった。

「はっ！」

カシエリーナは、その中央のテーブルに血まみれで突っ伏している三人の男に気づいてびっくりして後ずさりした。その三人は、全く同じ顔をし、同じ服を着ていた。

「デイズム総帥？ まさか……」

アタマスも目を白黒させて三人の死体を見ていた。ヒュプシピユレが、

「そいつらはデイズムになり損なつた影武者よ。カロンと一緒にいるのが、影武者同士の争いを制した奴なのよ」

と説明した。そして、

「こいつらが残っていると想定していたけど、まさか殺し合いをしたとは思わなかったわ」

ヒュプシピュレはカロンだったら悔しがるかな、と思つてクスツと笑つた。カシェリーナがそれに気づき、

「どうしたんですか、ヒュプシピュレさん？」

と尋ねた。ヒュプシピュレは笑うのをやめて、

「別に。扉を銃で破壊するから、下がつて」

と指示した。カシェリーナとアタマスは元来た大きな扉のところまで下がつた。ヒュプシピュレはそれを確認すると、銃の弾丸を詰め替えた。

「さてと。この銃、これで使い納めね」

と銃身を撫でて、彼女は扉に狙いを定め、連射した。さつきとは異質の、重い銃声がして、扉を破壊した。同時に、ヒュプシピュレは銃を投げ出した。威力のある弾丸を使ったため、銃そのものが壊れてしまつたようだ。

「さア、先に進むわよ」

ヒュプシピュレは別の銃をドレスの下から取り出しながらカシェリーナ達を見て、中に入つて行つた。カシェリーナとアタマスは、それに続いて入つた。

クロノスは、デイズムの小型機を追つていた。

「叩き落としてやる！」

ロイはデイズムの小型機にクロノスを接近させた。機銃が唸り、デイズムの小型機の右主翼が火を噴いた。デイズムは脱出装置を作動させて小型機を脱出し、地上に降下した。

「逃がさないぞ」

クロノスは低空飛行をし、デイズムを追つた。デイズムは廃墟の

中に逃げ込んだ。クロノスはデイズムの前に回り込み、着陸した。デイズムは逃げ場を失って、立ち止まった。

「もうこれ以上逃げられないぞ」

レージンとロイとロベルトが、エアロックを開いて外に出て来た。デイズムは歯ぎしりをした。

「おのれ……」

カシエリーナ達が扉の中に入ると、その前方にガラス張りの部屋が見え、マーンが立っていた。

「先生！」

カシエリーナが走り出そうとしたのを、

「お待ちなさい」

ヒュプシピュレが止めた。

「マーンは人格操作をされて、貴女が誰なのかわからなくなっているわ。迂闊に近づくとか、撃たれるわよ」

ヒュプシピュレの警告に、カシエリーナは仰天した。

「撃たれる？」

カシエリーナは啞然として、ガラスの向こうにいるマーンを見た。確かにマーンの様子は妙だった。こちらを見ているのに、カシエリーナ達に気づいていないようなのだ。

「ここで待っていていなさい。私が先に中に入るわ」

ヒュプシピュレは銃を構えてマーンに近づいた。カシエリーナとアタマスは、息を吞んでそれを見ていた。

「マーン」

ヒュプシピュレはガラスの扉を押し開けて、マーンに声をかけた。マーンはその声に反応し、腰のホルスターにある銃を抜き、ヒュプシピュレを撃った。

「くっ！」

ヒュプシピュレはそれを予期していたかのようにかわし、逆にマーンを撃った。しかしマーンは床を転がってそれをかわし、一気に

ヒュプシピュレに近づいて彼女の喉元に銃口を押し当てた。ヒュプシピュレは、思わず目を閉じた。

（カロン……）

彼女は死を覚悟した。死ぬ事など恐れてはいなかったが、カロンにもう一度会えないままのお別れは、とても悔しかった。

「やめてーっ！」

まさしく、何分の一秒というわずかな時間だったはずだ。マーンが引き金を引く寸前にカシエリーナが飛び込んで来て、ヒュプシピュレを押し倒し、マーンの前に立ちはだかったのだ。

「先生！ 先生！ 先生ーっ！」

カシエリーナは顔をグチャグチャにして泣いていた。それでも、声は力強かった。マーンの顔つきが変わった。静かな湖面にさざ波が立ったような現象が起こり、やがてそれがマーンの心の奥底まで伝わった。マーンは、銃を下げ、頭を抱えて苦しみ出した。

「うおおっ！」

しかし、まるでそうなることでより強く暗示がかかるようにされていたのか、再びマーンは銃をカシエリーナに向けた。

「危ない！」

今度はヒュプシピュレがカシエリーナを押し倒し、銃弾から救った。

「そんなことでマーンを救えるほど、ディズムの計略は甘くはないわよ」

ヒュプシピュレはカシエリーナを庇いながら、後ずさりしてマーンから離れた。マーンはヒュプシピュレに銃口を向けた。

「ダメです、先生！ この人は貴方を助けに来たんですよ！」

カシエリーナはヒュプシピュレの前に出て、マーンに叫んだ。マーンの頭の中に、以前見た事がある光景がよぎった。核融合砲基地で、カロン・ギグネイがディズムを撃とうとした時に、同じようにカシエリーナが飛び出した時の事が。

「カ……シエリー……ナ……」

マーンの口からその言葉が漏れた時、カシエリーナはマーンに抱きついた。ヒュプシピュレとアタマスは啞然としてカシエリーナの行動を見ていた。マーンは銃を床に落としてしまった。

「先生……」

カシエリーナは頬を紅潮させて、マーンを見た。マーンの目に生気が蘇ったように見えた。

「カシエリーナ……」

「先生！ 先生！」

マーンはぼんやりとした意識ながら、カシエリーナを抱きしめ返した。

「やっぱりね……」

ヒュプシピュレはそう呟いて、フツと笑った。

（この二人は男女の愛を超えた関係なのね。どちらも互いをとてつもなく信頼している。だからこそ、マーンに心が戻ったのね。私にはとてもできないことだわ）

レージンとロイとロベルトは、ディズムを取り囲むようにして立った。

「貴様が本物であろうと偽者であろうと関係ない。何故こんなことをした？」

レージンが尋ねた。するとディズムは、

「私の理想を実現するためだ。民主主義などという愚にもつかぬものを信奉している限り、人類は決して恒久の平和など手に入れる事は出来ない。絶対支配者による統治のみが、それを実現可能にするのだ」

「独裁者による支配がどんな結末を迎えたかは、歴史が示しているだろう。何を今更……」

ロイが反論すると、ディズムはロイを睨んで、

「それは支配者に責任がある。体制に問題があるわけではない」

「それは理屈だ」

ロベルトが異を唱えた。しかしディズムは、

「多数決の原理が支配する民主主義社会では、全てが遅くなる。災害時にも、有事の際も、何もかもが後手後手に回るのだ。そんな体制より、一人の神の如き支配者が全てを決定し、実行する体制の方が優れているのだ」

と再反論した。

「借り物の言葉を並べ立てるな、偽者め」

カロンの車で追いつき、怒鳴った。ディズムはカロンを見た。レージン達もカロンを見た。カロンは少し身体のアちこちに傷を負っていた。十人を相手にして戦い、勝ち残ってここまで来た証だ。

「お前が偽者かどうかなど、この際どうでもいい。ただお前を生かしておくわけにはいかない」

「私を殺しても、別の私がいるぞ」

ディズムはニヤリとして言った。しかしカロンはフツと笑って、

「あとの三人は、お前がディズムになるために殺したんだろう？

だから偽者はお前だけだ」

ディズムは驚愕していた。レージンやロイが止める間もなく、カロンはディズムの首の骨を手刀でへし折ってしまっていた。ディズムは首を横に向けたまま、地面に倒れ伏した。

「終わったな」

カロンは誰にともなく言った。

エピソード それぞれの未来へ

カシエリーナ達はデイリー・アースの支局に戻った。後からニユーホンコンに到着したシノンとエリザベスとテミスが出迎えた。

「マーン君はどうした？」

シノンが尋ねた。カシエリーナは車の後部座席で眠っているマーンを見て、

「疲れているみたいで、眠っているわ。相当精神的に負担になっていたのね。意に反することを言わされていたのだから」

「そうか」

シノンは座席のマーンを覗き込んで言った。エリザベスとテミスは、チャイナドレスを着た恐ろしく綺麗なヒュプシピュレが二人にニツコリ微笑んでさつさと建物の中に入って行ったのを見て、顔を見合わせ、溜息を吐いた。

「何であんなに綺麗な人がいるんだろうね」

テミスが呟いた。エリザベスも、

「ホントね」

と応えるのが精一杯だった。

「先に行っていて下さい。私はマーン先生が起きるのを待ちます」

「わかった」

シノンはアタマスと先に立って歩き出した。エリザベスとテミスは、カシエリーナの方をしばらく見たまま建物に入って行った。カシエリーナはマーンをもう一度見て、

「先生……」

と呟いた。

「あんたは何のためにディズムのところにいたんだ？」

レージンが尋ねると、カロンはレージンを見て、

「奴を殺すためだ。俺はターゲットは必ず仕留める主義でね」

「でも何故今まで生かしていた？ もっと早く殺していれば、ニユートウキヨウは破壊されずにすんだはずだ」

ロイが非難めいた口調で言うと、カロンはキツとロイを睨みつけ、
「青臭い事を言うなよ、坊や。俺は正義のためとか、世のためとかでデイズムを殺そうとしていたわけじゃないぞ」

ロイはその言葉に反論できなかった。カロンは、

「デイズムが本物かどうかは結局わからなかったが、これで全員この世からいなくなった。俺は完全にこの世界から足を洗えるよ」

と言うと、ニヤリとし、車に飛び乗って去ってしまった。レージン達は、廃墟の中で、走り去るカロンの車を見ていた。

アタマスが呼んだ近くの病院の医師がマーンの診察を医務室で行っている間、カシエリーナ達は会議室で休んでいた。

「マーン君はどんな状態だったんだ？」

シノンがようやく切り出した。カシエリーナはアタマスをチラッと見てから、

「強い暗示をかけられていたみたいで、私達の事が全くわからなかったの。何度も呼びかけているうちにその暗示が弱まって、段々私やヒュプシピユレさんのことがわかるようになったのだけれど、酷く衰弱しているようで、心配なの」

と答えた。

「そう言えば、あの綺麗な女の人はどうしたんですか？ 先にこの建物に入って行ったはずですけど」

テミスが言った。カシエリーナもハツとして、

「そう言えば……。私達の命の恩人なのに、きちんとしたお礼も言っていないわ」

「何か、不思議な人でしたね」

テミスが呟くように言った。そこへ診察を終えた医師が入って来た。

「どうなんですか、マーン先生は？」

カシエリーナが医師に詰めよるように尋ねた。医師はカシエリーナを見て、

「随分と強い暗示と、その効果を高める薬を飲まれたようで、記憶が混乱しているようです。後遺症はないとは思いますが、ここ何日かの記憶がないかも知れませんね」

「そうですか」

カシエリーナはホツとしたような、残念なような、複雑な心境だった。

「もう会えますか？」

「大丈夫ですよ。但し、長時間の話は無理です。長くて二十分にしてください」

カシエリーナ達は医師について、マーンの休んでいる医務室に向かった。

「カシエリーナ」

彼らが会議室を出た時、後ろからヒュプシピュレが呼びかけた。カシエリーナは彼女の話の内容を悟り、

「先に行っていて。私、ヒュプシピュレさんと話があるから」

シノン達を行かせ、ヒュプシピュレと共に廊下の隅に行った。

「どうするつもり？」

ヒュプシピュレが唐突に尋ねた。カシエリーナは顔を紅潮させて、何の事ですか？」

「マーンとの事よ。貴女、彼の事を愛しているんでしょう？」

「そ、それは……」

カシエリーナは口籠っていたが、

「それは、もう五年前にすんでいることです。あの時の私の行動を見て、そうおっしゃるんでしょうけど、私は先生を男として愛してはいますが、それは所謂男女の愛いわゆるとは違います」

ヒュプシピュレはプツと吹き出すように笑って、

「さすが大学の先生ね。言い訳が実に理屈っぱいわ。要するに恋愛の対象とは違うと言いたいよね？」

「はい」

カシエリーナはヒュプスピュレにすっかり自分の心の中を読まれている気がして、ますます顔が赤くなった。

「貴女の考えを否定も肯定もしないけど、私にはできないことだわ」
ヒュプスピュレは言い、カシエリーナに背を向けた。

「また会いましょう、カシエリーナ。今度は戦場ではないところでね」

と歩き出した。カシエリーナはその後ろ姿に向かって、

「はい。カロンさんとお幸せに！」

ヒュプスピュレは振り返ってニヤリとし、

「余計なお世話よ」

と言い返して背を向け、手を振って立ち去った。

一方レージン達はシノンからの連絡でマーンが無事救出されたことを知った。

「これで万事解決ですね」

ロベルトが言うと、レージンは、

「バカを言うな。これからが大変なんだよ。ニユートウキョウはしばらく首都機能を回復できないから、遷都するか、ニユートウキョウを復興させてそのまま首都とするか、議論しなけりやならないぞ」

「はア、そうですね……」

「被害が甚大過ぎるから、遷都だろうけどな」

レージンは悲しそうな目で廃墟を見渡しながらそう続けた。

ロイとロベルトはこの戦闘で命を落とした幾百万の人々のことを思い、目を伏せた。そんな雰囲気を全く察していないのか、

「私、失業しちゃったからさ、ロベルトのところに居候させてよ」
シェリーがニコニコしながら爆弾発言した。ロベルトはギョツとして、

「な、何だって？」

「どうしてそんなに驚くのさ？ さては、他に女がいるんだね？」

シェリーの目が吊り上がる。ロベルトは、

「ご、誤解だよ。俺がいるのは憲兵隊の宿舎だぞ。一緒に住むなんてできないって!」

「あ、そっか」

シェリーは残念そうに言った。するとレージンが、

「俺が許可するよ、ロベルト。一緒に住んでいいぞ」

「ええっ?」

仰天するロベルト。シェリーは満面の笑みをたたえて、

「ありがとうございます、隊長」

と言った。ロイはそれを見て大笑いをしていた。

カシェリーナはシノン達が会議室に戻ってから、一人でマーンの休んでいる医務室に入って行った。

「先生……」

マーンはまた眠っているようだ。カシェリーナは静かにベッドに近づき、

「先生、早く元気になって下さい……」

と囁き、マーンの顔を触った。そして何故か涙を流してしまった。

「先生……」

もう一度カシェリーナは呟いた。

翌朝、地球と月の人々は、五年前のあの日を思い出す光景に出会っていた。全てのテレビとインターネットサイトに、カシェリーナの映像が映っていたのである。

「皆さん、ディアネイラによる月と地球の破壊計画は、何とか途中で止める事ができました」

そのカシェリーナを、アイトウナでパイアとテセウスが見ていた。

「相変わらず、綺麗な子だね、カシェリーナは」

パイアが言うと、テセウスが、

「パイアもね」

「ありがとう」

二人はキスを交わし、ベッドに横になった。

カシエリーナは続けた。

「しかし、ディズム総帥のような人物が現れるのは何も稀な事ではありません。いつでもどこでも、起こりうる事なのです。ですから忘れてはいけません。五年前に私が言った事を思い出して下さい」

ロイとエリザベス、そしてロベルトとシェリーは、ニューホンコンのホテルのロビーでその放送を見ていた。

「国の行く末を決める最終的な決定権を持っているのは、私達国民だということを。そして、その権利の行使を誤り、義務を怠ると、再びディズム総帥のような人物が現れるのだということを」

カロンとヒュプシピュレは、どことも知れぬ邸の中で、その放送を見ていた。

「もう、このような悲劇を繰り返してはいけません。私は二度とこのようなことが起こらない事を祈っています」

カシエリーナは画面から消えた。

「よくやった、カシエリーナ。上出来だったよ」

スタジオの隅で見ていたレージンが彼女を労った。カシエリーナはニッコリして、

「そう。ありがとう」

二人はアタマス達に会釈して、抱き合うようにしてスタジオから出て行った。アタマスは、

「あれは幻だったのかな？」

とカシエリーナの後ろ姿を見ながら呟いた。

「私、大学やめようかな？」

カシエリーナが突然言い出したので、レージンはビックリして、
「何でだよ？ どういうことだよ？」

カシェリーナは立ち止まって、

「私、大学の講義を通じて、政治のあるべき姿、法律の理念を人に伝えようと思っていたのだけれど、それだけじゃダメな気がするの。もっと多くの人に伝えるようにしないと」

「そうか」

レージンはカシェリーナの言おうとする事がわかった気がした。

「マーン先生のしていたことを引き継ぐのか？」

「ええ。本を書き、講演をし、私が体験した事をたくさんの人に直接伝えたいの。マーン先生のように。そして、マーン先生の方までカシェリーナは涙ぐんで言った。レージンはカシェリーナの頬を伝わる涙を指で拭い、

「マーン先生はきっと良くなる。いつか二人で講演をすることもできるさ」

「うん」

カシェリーナはレージンを見上げて、もう一度ニッコリした。

その翌日、地球共和国臨時政府は軍事力の増強を発表した。月連邦も、大統領の談話として軍事力の増強を発表した。

歴史は繰り返すのか。それは誰にもわからない。

エピソード それぞれの未来へ（後書き）

ここまでお読み下さり、ありがとうございます。
カシエリーナシリーズはこれにて完結です。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連「横書き」という考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n9335e/>

聖女カシェリーナ完結編 サードモンスタープラン

2011年11月13日23時04分発行